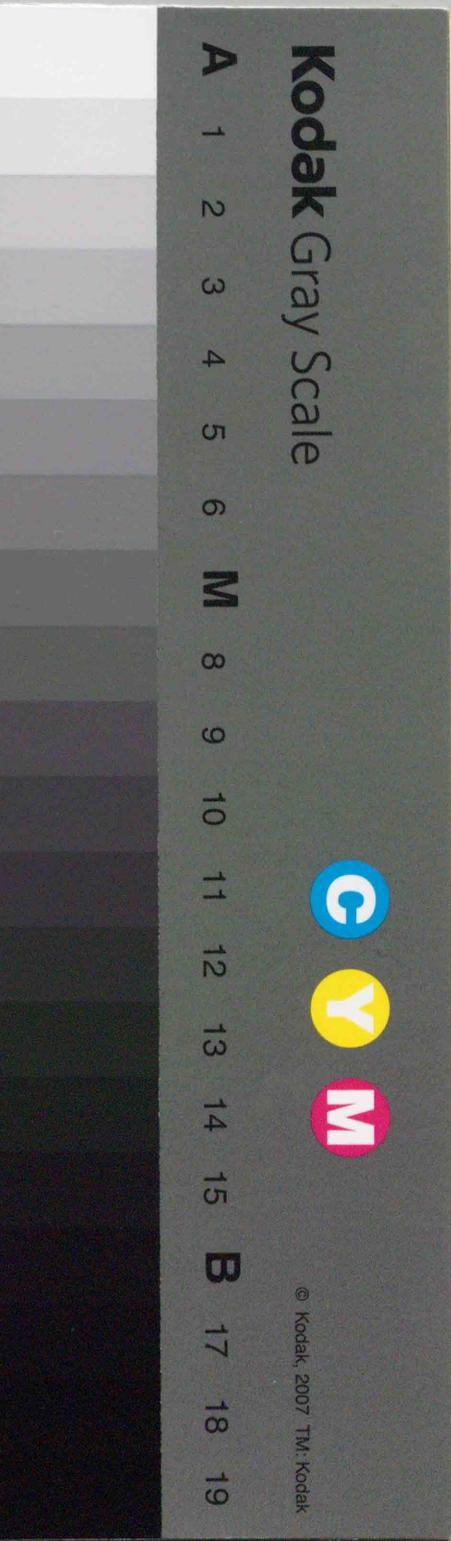
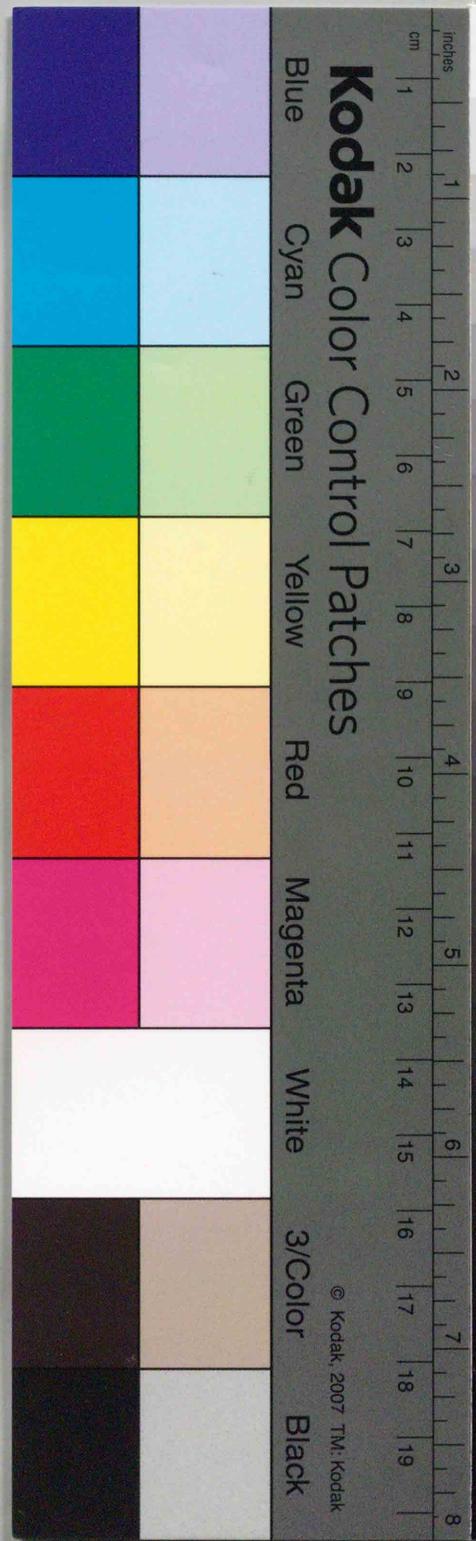


教科書
21
42-
26000



43027
教科書文庫
4
Z10
42-1939
20000
87011



資料室

教科書文庫
4
210
42-1939
2000087011

4b
210
H214

文部省檢定
昭和四十年一月十八日高等女子學校歷史科用

廣島文理科學教授
栗田元次著

新體女子綜合國史

東京中文館藏版

広島大学図書

2000087011





緒言

一、本書は昭和十二年三月二十七日文部省訓令第八號の高等女學校歴史科教授要目に準據し、その四年制度第四學年用として編述したものである。

二、史實の選擇は初級用との重複を避けると共に、附載した系圖及び年表は初級用と同一のものを用ゐ、初級用との聯絡の便に供した。國體の本義を明徴し、國民精神を振起せしむることは最も意を用ゐ、國民道徳涵養の基礎たらしめんことを期した。この爲には外國史との比較にも留意し、以て我が國の特性を理解せしむるに努めた上、参考欄にもこれに關する問題説話を掲げて考察の便を図つた。

三、女子普通教育の最後の課程であるから、特に女子に關する史實を多く採り、上は皇后の御坤徳から、下は各方面に活動した女子の事蹟を知らしめ、日本獨特の婦道の涵養に資せんことに留意した。

此の點に就ては參考問題の掲出にも意を拂つてゐる。

一、政治經濟文化等各種文化現象の發展を綜合的に明かにするに努め、各時代の特色と文化との相互關係の理解、外來文化の攝取、同化と獨自文化展開の經過等の闡明を期し、特に女子の文化的貢獻について留意した。

二、他學科特に修身・公民・國語・家事・裁縫等との聯絡は學習經濟上頗る有意義である。従つてこの方面への注意も怠らなかつたが、學習者に於ても常にこの用意を有つて本書に對せられんことを希望する。

目次

第一章 肇國の宏遠と國體の精華……………一

第二章 古代の社會組織と國民道德の淵源……………七

第三章 大陸文化の輸入とその影響 女性の貢獻……………二二

第四章 統一政治の完成と奈良時代 女性の活動と
風俗の變遷……………三〇

第五章 外來文化の醇化と國風文化の興隆 平安時
代の大勢……………三六

第六章 武士の勃興と鎌倉時代……………四〇

第七章 建武中興と吉野時代……………四九

第八章 室町時代と東山文化……………五五

第九章 社會の革新と婦道の發達……………六一

第十章 文教の復興と江戸時代……………七〇

第十一章	勤王思想の發達と王政復古	八〇
第十二章	明治維新と帝國憲法	九〇
第十三章	教育勅語と現代の文化	一〇四
第十四章	現代の大勢と女性の覺悟	一一一
	終	
	次	目 2

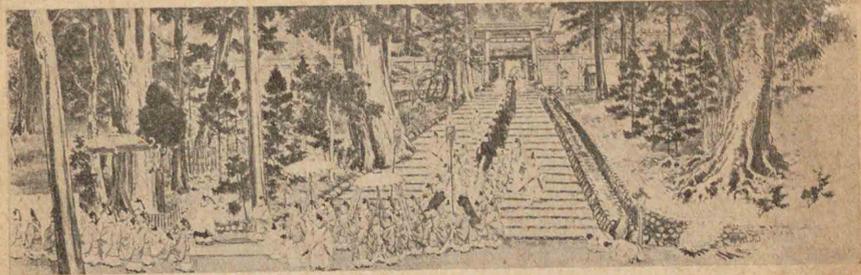
第一章 肇國の宏遠と國體の精華

世界各國の
歴史

我が國の
歴史

外國との
比較

再び國史を學ぶ目的 私達は東洋史・西洋史を學んで世界諸民族の盛衰、國家の興亡、文化の消長の跡を尋ね、諸民族の間に争が絶えず、各國家の内には革命が屢起り、その爲に國體の變動少なからず、文化の變遷の著しいのに驚かされた。然るに我が國は神代この方上に萬世一系の皇室がましまして國民を愛撫され、下には大和民族が中心となつて忠君愛國の誠を盡くし、皇威を伸張し、國威を發揚しつゝ、獨特の文化を發展させて來たのである。これ實に世界無比の我が國の特色であるが、かゝる特色は外國の歴史と比較することによつて一層明かになる。再び國史を學ぶ目的はこの點にあるのである。



肇國の宏謨と萬世一系の皇位 古事記等の傳
 によれば神代の昔伊弉諾尊伊弉冉尊の二柱の神
 がましまし先づ大八洲國を造り給ひついで山川
 草木をはじめ數々の神々を生み給ひ最後に是等
 の統治者として最高至貴なる皇祖天照大神を御
 生みになつた。これ我が肇國の基であつて、それ
 が遼遠の昔である上に、皇室國土國民が一つ源よ
 り發し、君臣の分が炳として定つてゐることは、世
 界に類なき我が國の誇である。而も天照大神は
 一層肇國の大義を明かにし、天壤無窮に發展せし
 められようとの思召から、皇孫瓊瓊杵尊を大八洲
 國に降臨せしめられ、

豐葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地。
 宜爾皇孫就而治焉。行矣。實祚之隆、當與天



壤無窮矣。

との御神勅を賜はつた。肇國の宏謨は實にこの
 時に成就せられたのである。而して同時に三種
 の神器を御授けになつたので、御歷代天皇は萬世
 一系の皇位の御璽として永くこれを相傳へられ、
 今上天皇御即位式の勅語にも、

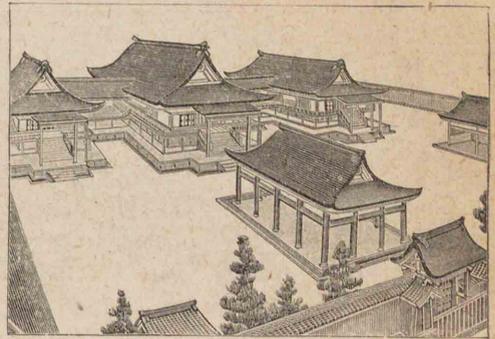
朕祖宗ノ威靈ニ頼リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク
 神器ヲ奉シ茲ニ即位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ
 誥ク

と仰せられてゐるのである。殊に八咫鏡は皇祖
 の御靈代として特に重んぜられたので、崇神天皇
 第十代の御代に大和笠縫邑に別宮を建て、天叢雲
 劍と共に奉齋し、皇女豐鍬入姫命に奉仕せしめら
 れ、更に垂仁天皇第十代の御代には伊勢五十鈴川上

内宮外宮と
宮中の奉齋

宮中三殿
の圖

向つて左
中央皇殿
向つて右
賢所
神殿



たられた。これを齋宮と稱する。

に奉遷し、皇女倭姫命が奉齋に當たられること
になつた。これ皇大神宮の起源であつて、後、雄
略天皇^{第二十}の御代に豊受大神を山田に祀られ
るや、前者を内宮、後者を外宮と稱し、皇室をはじ
め奉り國民全體の尊崇深く、傳統の儀禮は神代
さながらに行はれつゝあり、宮中には八坂瓊曲
玉と共に模造の鏡、劔を奉安されてゐる。

参考 皇大神宮の奉仕には其後永く皇族の女性の方が當

日本の氣候
風土と位置

國土國民の増大と皇威の伸張 皇祖の神勅に、豊葦原千五百秋之
瑞穗國と仰せられたやうに、神代以來の我が國土たる日本列島は、氣
候風土の恵が豊かであつて資源に富み、四面海を環しながら大陸に
近く、従つて外國の侵掠には難しいが文化の輸入には頗る便利な位
置にあり、且風光明媚であつて國民性を純潔・高尚・穩和ならしめるの

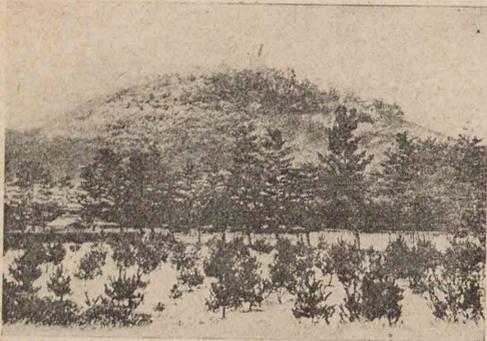
神武天皇の
御東征

に與つて力があつた。かくて天孫降臨以來、肇國の宏謨は神勅のま
にまにこの恵豊かな國土に發展し、皇威は益、伸張したので、神武天皇
代^{第一}は國內統一を完からしめんと思召して御東征の雄圖を立て給

ひ、大和地方を平定して橿原の地に皇居を奠め、
詔を發せられて、

神武天皇御
奠都の勅
畝傍山御
奈良縣畝
傍町

皇威伸張と
國內統一



上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然
後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎

と仰せ出されたのである。これ實に皇祖の神
勅と共に千古不磨の大文字であり、肇國の精神
を一層明かに宣揚されたものと拜察せられる。
かくてこの御精神に従つて崇神天皇は四道將

軍を四方に發せられ、景行天皇は日本武尊に東西僻遠の地を垂撫せ
しめられたので皇威の伸張は愈、廣く、國內の統一は益、完全なるに至
り、成務天皇^{第三十}の御代には内治の整頓も著しくなり、國威を海外に

國民の増大
とその三大

異種族の同
化と皇室中
心

輝かすべき準備も整ふに至つた。皇威の伸張と共に國民も次第にその數を増したが、これに三種の別が立てられた。神代以來の神々の裔に當る神別、神武天皇以後皇室から分かれた皇別、皇威の發展に従つて外國から歸化した蕃別が即ちそれであり、別に蝦夷熊襲等の異種族の歸順したのものもある。かくの如く我が國民はその要素が、單一ではないが、皇室の御仁慈は異種族にも遍く、神別皇別を中心に國民はよくその包容同化に努めたから、長い年月の間に全く異種族たる痕跡もなくなり、完全に一體の國民となつて、皇室を中心にして一家族の如く相睦み合ふに至つたのである。

【参考】東西の歴史より國民の要素が雜多で統一融合の困難な例を挙げ、我が國の優れた點を比較せよ。

我が國體

國體の精華 以上の如く、我が國體の淵源は遼遠なる神代の昔にあり、天照大神の御子孫たる萬世一系の天皇が天壤無窮にこの國を統治し給ふべきことは、皇祖の御神勅に儼然と定められたのである。

國體の永遠
性

而もこの萬古不易の國體は神代のまゝに今日に至るまで相傳へられ、帝國憲法第一條に

國體の精華

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇コレヲ統治ス
と定められるに至つた。かくの如く尊く、且永遠性を有する國體は全く世界無比であるが、これ實に皇祖の御神徳と御歷代天皇の御稜威並びに億兆心を一にして國民が歷世忠孝の美德を發揮し來つた結果であり、我が國體の精華はこゝに存すると言はねばならぬ。

【参考】世界各國の興亡變遷と比較して我が國體の精華を深く考へよ。

第二章 古代の社會組織と國民道德の淵源

國體と氏族
制度

氏族制度 世界無比なる我が國體は我が古代獨特の社會組織に基いてゐるのである。これを氏族制度といふ。氏族は祖先を同じうする血族團體であつて氏と稱し、これに屬する人々を氏人、その長を氏上と言ひ、別に血族でない部曲と稱する人民が隸屬してゐた。

氏の組織

而して氏は各職業を世襲し、大體同一の土地に住んでゐたので、氏の名には中臣・大伴・物部・鏡作・服部等の如く職業によるものと、蘇我・平群等の如く地名によるものが最も多く、皇室では各氏の尊卑を明かにする爲に、氏上に姓カネを興へられ、皇別には臣・神別には連・地方豪族・蕃別には直首等アタヘを賜はるのが例であつた。皇室も最高至貴の氏族であつて、天皇は氏上、皇族は氏人に當たらせられ、部曲には御名代部・御子代部等の特別なものもあり、御料地は縣・屯田等と稱せられてゐた。而も皇室は國民全體の大宗家と信ぜられてゐたから、天皇は國民全體の氏上にも當たらせられた譯であり、國家全體が皇室を中心として、天皇に統率せられた一大血族團體の觀を呈してゐたのである。かくて各氏上は氏の土地・人民部曲を率ゐ、世襲の職業を以て皇室に仕へ奉つてゐたから、朝廷の政治組織も特別の制度を立てることなく、而も自然に確固整然たる國家の統一が保たれてゐた。即ち中臣氏等は朝廷の祭祀を、大伴・物部氏等は朝廷の軍事を掌つて中央に居り、

地方の氏上は國造・縣主等に任ぜられて各地方の政治に當たつてゐたのである。かくて皇威の伸張、國民の増大と共に中央・地方の政に與る氏上の數も漸く増し、臣連の姓を有して直接大政に參與する有力なる氏上は、特に大臣・大連と稱せられるに至つた。蘇我氏は前者・大伴・物部氏は後者の最も著名なものであり、やがてそれが最高の官名の如くなつたのである。この氏族制度は時勢の變化に従ひ、大化改新によつて廢されたが、その遺風は永く傳へられ、同一の氏が蕃殖するに従つて血統を區別する爲に苗字を生じ、藤原氏の中に近衛・鷹司等、源氏に新田・足利等の分流が出来た。現今は姓を稱することは廢れたが、姓名・氏名・苗字等の語は一般に混用されてゐる。

國民の思想道德 以上の如く氏族制度の社會組織は、自然の血族關係を基として成立つてゐたので、氏人の間には血統を重んじ、氏上を尊ぶ思想が強く、氏上を中心として固く團結し、氏の爲に一身を犠牲にする精神が發達してゐた。而も各氏族の大宗家は皇室であり、

氏神と敬神
崇祖の精神

建部神社
大津市東
南、祭神
日本武尊
皇大神宮の
崇敬

忠孝一本

祭政一致



天皇は國民全體の大宗主と仰ぎ奉つてゐるから、國民の間に忠君愛國の精神も自然に生れ、氏の團結にも増して君民一體の思想が強調された。又血統を重んずる思想は祖先崇拜の風を盛ならしめ、各氏は祖神又は祖先以來の守護神を祀つて氏神とし、以て敬神崇祖の美德を發揮するに至り、皇室に於ては皇祖を皇大神宮としてその奉齋を最も重んぜられたのである。されば國民は皇大神宮を他の神々にも優つて崇敬し奉ると共に、天皇は現人神と仰ぎ奉つた。従つて國民の親に對する孝行も、氏上に對する忠誠も、天皇に對し奉る忠節も自然の至情として自ら一致し、忠孝一本の世界無比なる國民道德の基礎が確立されたのである。又敬神崇祖の精神は氏の統率、國の政治にも自ら現はれ、氏に於ける氏神の祭祀、國に於ける皇祖の奉齋は最も重んぜられ、大事は悉く神意

日本の婦道

香椎宮
福岡市東
方祭神仲
哀天皇后
功皇后

神功皇后の
坤徳



を承つて決するのが例となつてゐた。政治を「まつりごと」と稱する國語はかゝる事實に基いて出來たものであり、祭政一致は我が國固有の政治の特色として、今日に及んでゐるのである。

【参考】各地の神社には昔の氏神の名残を遺してゐるものが少くない。各郷土の神社について考察して見よ。

婦道と神功皇后の坤徳 男子が外に出て氏族の爲、君國の爲に忠

君愛國の至誠を盡くしてゐたのに對し、女子は主として家にあつて良妻賢母の道を守り、内助の功を盡くしてゐたが、非常の際には男子に劣らぬ剛毅の精神を發揮して、我が國獨特の婦道を完うした例も決して少なくない。日本武尊の妃弟橘姫の走水の御入水の如きは國民の模範として著しい例であるが、特に神功皇后の坤徳は日本婦道の典型と仰ぎ奉るべきである。

皇后は仲哀天皇第四十を助け給ひて熊襲の征討に従はさせられたが、途中天皇の崩御に遭ひ給ふや、神意を承つて男々しくも新羅征討の壯舉を斷行せられ、國威を海外に輝かすと共に、御凱旋の後應神天皇第五十を生み給ふや、攝政として大政に與り給ひ、我が國文化發展の基を築かせ給うたのである。

参考 我が國民道德は古今一貫した精神に基いてゐる。婦道に就いてその點を深く考へよ。

第三章 大陸文化の輸入とその影響

女性の貢獻

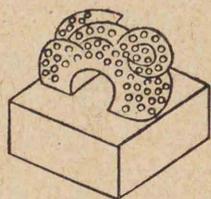
朝鮮との關係

大陸との交渉 我が國と朝鮮との交渉は頗る古く、神代の頃早くも素戔鳴尊が朝鮮に往來せられた古傳もあり、崇神天皇の御代には任那が新羅の壓迫に苦んで救を求め、我が國は彼の地に日本府を置くに至つたことは國史に明かな事實である。併し兩者の關係が最

支那との關係

も密接になつたのは神功皇后御親征以後であつた。又支那との關係も古くから存し、九州地方の豪族が後漢と往來してゐた事實も明かに知られて居るのであるが、それが我が國に大なる影響を及ぼすやうになつたのは推古天皇第三十の御代隋との直接交通をはじめられて後である。かくて我が國は、朝鮮を通じて支那の文化を受入れ、更に支那を通じて印度其他の文化を輸入するに至りその影響によつて目覺しき文化の發達を示し、生活風俗

後漢光武帝が九州の豪族に贈つた金印
大陸との關係とその影響



の上に變革を齎すことゝなつた。而もかゝる重大なる外交關係は、何れも女性の攝政又は天皇の御代に始まつたのである。

参考 東洋史を復習して、古代日本の東洋に於ける地位を考へよ。

工藝の傳來

工藝産業の進歩 朝鮮との交通の結果、諸國より各種工匠の奉獻

女子工匠と歸化人

多く、皇化を慕つて來朝歸化するものも少なからず、鍛冶・酒造・造船・裁縫・機織等の技術は頗る進歩するに至つた。これ等の工匠の中には

皇室の産業
御奨勵

國富の増大

學者・漢籍
の傳來

女子も少なからず、應神天皇や雄略天皇の御代には特に吳支南方に使
を遣して縫織の工女を召されたこともあり、歸化人の中では一族百
二十餘縣の人々と共に來た弓月君ユヅキキミ、後秦始皇帝の、十七縣の民を率ゐて來
た阿知使主アチノミ、後漢靈帝の、等が最も名高く、前者は秦ハク、後者は漢ウヰの氏を賜は
つてその分布全國に及んだ。かくて應神天皇以後の我が國の産業
は長足の發達をなし、御歷代天皇はその御奨勵に努め給ふことが頗
る著しかつたが、仁徳天皇第六十、雄略天皇等の御事蹟は殊に名高く、雄
略天皇の皇后幡梭姫ハタスヒメが親しく養蠶を遊ばされて範を國民に示され
たのは畏き極であつた。従つて國富も大いに増し、雄略天皇の御代
には齋藏イミクラウチ、内藏ウチクラ、大藏オホクラの三藏を併立せらるゝに至つたのである。

参考 歸化人の多かつた所以を東洋史上より考へよ。

儒教・佛敎の傳來

工匠の渡來と共に學者の來朝も少なからず、應
神天皇の御代に來た阿直岐王アチキミ、仁等ニトウは最も著名な人々であつて、同時
に論語千字文等の漢籍も傳へられた。かくて我が國にも漢學が行

漢學・漢字
の流行と歸
化人の功

儒教の傳來
とその影響

王仁の墓
大坂府河
内郡音原
村
佛敎の傳來

崇佛排佛の
争と蘇我・
物部兩氏



はれ、漢字が使用されるに至り、阿知使主の子孫は東漢直王ヤマトシヤクヤマト、仁の後裔
は西漢直カシヤクヤマトと稱して代々朝廷の記録を掌ることとなり、これ等の歸化
人が我が文化の發達に力を致したことは頗る多い。而して漢學の

中心思想は儒教であるから、この新思想も同
時に傳はつたが、現實的な政治道德の教であ
り、忠孝を重んじ、祖先崇拜を説くものであつ
たから、よく我が固有の國民思想と合致し、我
が國民道德の發達に寄與した所が頗る多い。
その後欽明天皇第二十の御代に至り、印度から
西域を経て支那に傳はり更に朝鮮にも榮え
てゐた佛敎が百濟から傳へられた。然るに

その教は三世因果を説き、佛を信じて未來の幸福を重んずる等、我が
固有の思想と相異なる所が少なくなかつたので、當時朝廷で覇を競
つてゐた蘇我、物部兩氏の勢力争と結びついて、崇佛、排佛の烈しい論

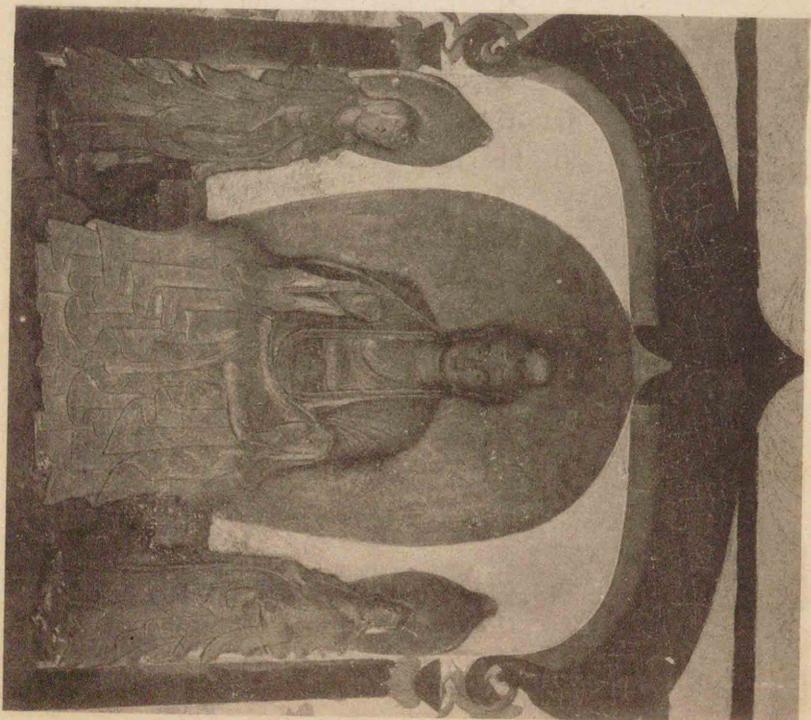
争が起つたのである。併し物部氏が滅びて蘇我氏が獨り榮え、佛教の諸惡莫作諸善奉行の道德と慈悲忍辱の崇高な信行とは次第に國民の思想に深い感化を及ぼし、皇室でも國民の幸福の爲に用明天皇^{第三十}がこれを尊信されるに至つて、その信仰は漸く上下に弘まるやうになつた。かくて我が固有の思想は儒教の道德と佛教の信仰を加へて一層進歩し、敬神崇祖・忠君愛國の國民道德は益發達するに至つたのである。

【参考】 儒教佛教の興起及び我が國に傳はる迄の經路を考へよ。

推古天皇と飛鳥時代の文化・政治・外交 以上の如き大陸文化の影響は我が國最初の女帝にまします推古天皇の御代に至つて益著しくなり、攝政聖德太子の御助力によつて日本文化の基礎が確立され、飛鳥時代と稱せられる我が國最初の文化隆盛期が現出したのである。天皇は太子と共に深く佛教を信仰せられ、國利民福を祈つて佛教興隆の詔を發せられ、多くの寺を建て、佛像を造り、僧侶を招かせら



像銅尊三迦釋寺隆法



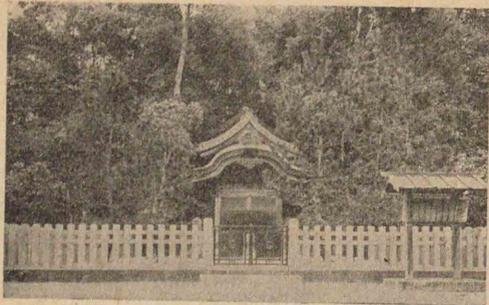
龕佛窟三第山龍天省西山

美術の隆盛
とその系統

聖徳太子
御墓
大阪府南
河内郡磯
長村
社會事業と
學問

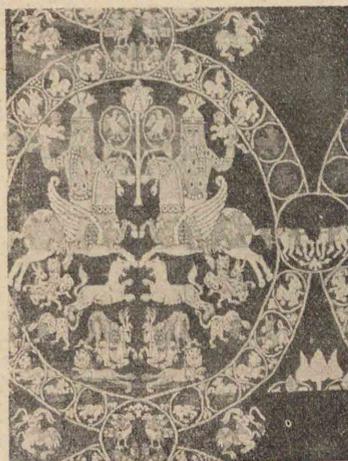
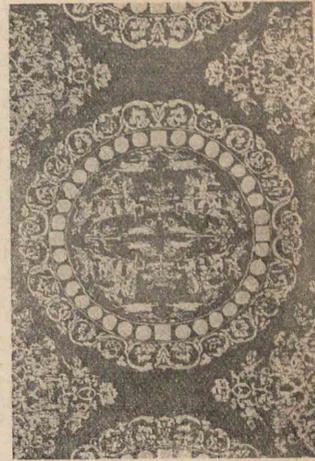
固有の精神
發揮

れ、太子は勅を奉じて法華勝鬘維摩等の經典の講義をなし、註疏を述
作遊ばされた程であつて、この御代の末には寺院四十六、僧尼一千三
百餘を數へるに至つた。従つて建築彫刻繪畫工藝等の美術の進歩



著しく、法隆寺の如きは現在なほ當時の面影をさ
ながらに存し、その中には佛像佛具をはじめ各種
の遺品を包藏して居り、是等の藝術は支那南北朝
の流を汲むと共に、遠く印度波斯ギリシヤ等の影
響をも傳へてゐるのである。佛教の影響は社會
事業にも及んで、四天王寺には施藥悲田療病等の
諸院が設けられたが、漢學其他一般學問の發達も
見るべきものがあり、聖徳太子の御英才はこの方
面にも發揮され、憲法十七條の御制定、我が國最初の國史の御撰修等
を自ら遊ばされた程である。併し決して大陸文化に盲目的に心酔
したのではなく、我が固有の精神も盛に宣揚せられ、天皇は神祇尊崇

の詔を下して上下を誡められ、太子は百官を率ゐて神祇の奉齋を行



らない。

【参考】

飛鳥時代文化とこれに影響を及ぼした大陸の文化を比較考察せよ。

はせられた。政治外交の革新も亦著しく、憲法を制し、冠位十二階を定められたのは、何れも當時漸く腐敗して來て豪族の専横を見るに至つた氏族制度の弊害を平和の裡に改革されようと遊ばされたものであり、支那との國交を始められたのは、朝鮮半島諸國が次第に反服常ならぬやうになり、その弊害が少なくなつたので、直接大陸文化の源である支那と交つて文化の輸入を盛にし、且國威を中外に發揚せんとせられたものに外な

女性の貢獻 大陸文化の輸入と我が文化の發達、内治外交の變遷

革新の間にあつて、女性の貢獻も亦少なからぬものがあつた。神功皇后・幡梭姫皇后・推古天皇等の御坤徳は申すも畏し、朝鮮半島諸國の反服常ならず、我が國威の動搖を見るに至るや、雄略天皇の御代に吉備弟君の妻樟姫繼體天皇第二十代の御代に物部鹿火の妻欽明天皇の御代に調伊企儺の妻大葉子等の忠貞兩全の美談は有名な事實である。工藝の輸入發達に力めた工匠の中に女工の少なくなかつたことは既に述べた所であるが、佛教が盛になるや女性の出家して尼となるもの多く、殊に善信尼の如きは崇峻天皇第二十代の御代、百濟に留學して受戒した程であつた。舒明天皇第三十代の御代に蝦夷征討に遣された上毛野形名の妻が、敵の重圍中にあつて敢然弓弦を鳴らして夫の急を救ひ、聖徳太子の王女上宮大娘姫王が太子薨去後の蘇我氏の僭上を毅然として御責め遊ばされた如きも、日本婦道の鑑として永く稱へらるべき事實である。

氏族制度の
腐敗と豪族
の僭上

大化改新の
精神

大化改新の
大要

参考 以上の女性の事蹟について既に知れる所を述べよ。

第四章 統一政治の完成と奈良時代 女性の活動と風俗の變遷

統一政治の完成 推古天皇の御代に於ける政治改革の目的は、専ら氏族制度の腐敗による弊害の矯正にあつたのであるが、聖徳太子薨去の後には唯一の豪族蘇我氏の僭上不遜が益著しくなり、遂に皇威を蔑にするに至つた。そこで中大兄皇子は聖徳太子の御精神を繼承せられ、皇極天皇^{第三十代}の四年、遂に蘇我氏の誅滅を斷行して氏族制度を廢し、新たに隋唐の制度を參酌して皇室を中心とする中央集權的な統一政治の基礎を確立せられた。これ即ち大化改新であつて、皇子は孝徳天皇^{第六十代}の御即位と共に皇太子の位に上られ、土地人民の私有を禁じて悉く公地公民とし、官職世襲を廢し、新官制を定めて、人才登用の途を開き、戸籍を造り、班田收授の法を立て、税法を定めて

大化改新の
大要
二壺 崩御○即位

承せられ、皇極天皇^{第五代}の四年、遂に蘇我氏の誅滅を斷行して氏族制度を廢し、新たに隋唐の制度を參酌して皇室を中心とする中央集權的な統一政治の基礎を確立せられた。これ即ち大化改新であつて、皇子は孝徳天皇^{第六代}の御即位と共に皇太子の位に上られ、土地人民の私有を禁じて悉く公地公民とし、官職世襲を廢し新官制を定めて人才登用の途を開き、戸籍を造り、班田收授の法を立て、税法を定めて

古代——神武天皇より大化改新

天皇	紀元	重要事項	朝鮮支那
神武	元	即位 論功行賞○國造縣主を置く 皇祖天神を鳥見山に祭る 諸國御巡幸	
崇神	二	即位	
垂仁	三	即位	
孝安	四	即位	
孝昭	五	即位	
孝德	六	即位	
孝安	七	即位	
孝靈	八	即位	
孝元	九	即位	
開化	十	即位	
神	十一	即位	
崇	十二	即位	
崇	十三	即位	
崇	十四	即位	
崇	十五	即位	
崇	十六	即位	
崇	十七	即位	
崇	十八	即位	
崇	十九	即位	
崇	二十	即位	
崇	二十一	即位	
崇	二十二	即位	
崇	二十三	即位	
崇	二十四	即位	
崇	二十五	即位	
崇	二十六	即位	
崇	二十七	即位	
崇	二十八	即位	
崇	二十九	即位	
崇	三十	即位	
崇	三十一	即位	
崇	三十二	即位	
崇	三十三	即位	
崇	三十四	即位	
崇	三十五	即位	
崇	三十六	即位	
崇	三十七	即位	
崇	三十八	即位	
崇	三十九	即位	
崇	四十	即位	
崇	四十一	即位	
崇	四十二	即位	
崇	四十三	即位	
崇	四十四	即位	
崇	四十五	即位	
崇	四十六	即位	
崇	四十七	即位	
崇	四十八	即位	
崇	四十九	即位	
崇	五十	即位	
崇	五十一	即位	
崇	五十二	即位	
崇	五十三	即位	
崇	五十四	即位	
崇	五十五	即位	
崇	五十六	即位	
崇	五十七	即位	
崇	五十八	即位	
崇	五十九	即位	
崇	六十	即位	
崇	六十一	即位	
崇	六十二	即位	
崇	六十三	即位	
崇	六十四	即位	
崇	六十五	即位	
崇	六十六	即位	
崇	六十七	即位	
崇	六十八	即位	
崇	六十九	即位	
崇	七十	即位	
崇	七十一	即位	
崇	七十二	即位	
崇	七十三	即位	
崇	七十四	即位	
崇	七十五	即位	
崇	七十六	即位	
崇	七十七	即位	
崇	七十八	即位	
崇	七十九	即位	
崇	八十	即位	
崇	八十一	即位	
崇	八十二	即位	
崇	八十三	即位	
崇	八十四	即位	
崇	八十五	即位	
崇	八十六	即位	
崇	八十七	即位	
崇	八十八	即位	
崇	八十九	即位	
崇	九十	即位	
崇	九十一	即位	
崇	九十二	即位	
崇	九十三	即位	
崇	九十四	即位	
崇	九十五	即位	
崇	九十六	即位	
崇	九十七	即位	
崇	九十八	即位	
崇	九十九	即位	
崇	一百	即位	
崇	一百零一	即位	
崇	一百零二	即位	
崇	一百零三	即位	
崇	一百零四	即位	
崇	一百零五	即位	
崇	一百零六	即位	
崇	一百零七	即位	
崇	一百零八	即位	
崇	一百零九	即位	
崇	一百一十	即位	
崇	一百一十一	即位	
崇	一百一十二	即位	
崇	一百一十三	即位	
崇	一百一十四	即位	
崇	一百一十五	即位	
崇	一百一十六	即位	
崇	一百一十七	即位	
崇	一百一十八	即位	
崇	一百一十九	即位	
崇	一百二十	即位	
崇	一百二十一	即位	
崇	一百二十二	即位	
崇	一百二十三	即位	
崇	一百二十四	即位	
崇	一百二十五	即位	
崇	一百二十六	即位	
崇	一百二十七	即位	
崇	一百二十八	即位	
崇	一百二十九	即位	
崇	一百三十	即位	
崇	一百三十一	即位	
崇	一百三十二	即位	
崇	一百三十三	即位	
崇	一百三十四	即位	
崇	一百三十五	即位	
崇	一百三十六	即位	
崇	一百三十七	即位	
崇	一百三十八	即位	
崇	一百三十九	即位	
崇	一百四十	即位	
崇	一百四十一	即位	
崇	一百四十二	即位	
崇	一百四十三	即位	
崇	一百四十四	即位	
崇	一百四十五	即位	
崇	一百四十六	即位	
崇	一百四十七	即位	
崇	一百四十八	即位	
崇	一百四十九	即位	
崇	一百五十	即位	
崇	一百五十一	即位	
崇	一百五十二	即位	
崇	一百五十三	即位	
崇	一百五十四	即位	
崇	一百五十五	即位	
崇	一百五十六	即位	
崇	一百五十七	即位	
崇	一百五十八	即位	
崇	一百五十九	即位	
崇	一百六十	即位	
崇	一百六十一	即位	
崇	一百六十二	即位	
崇	一百六十三	即位	
崇	一百六十四	即位	
崇	一百六十五	即位	
崇	一百六十六	即位	
崇	一百六十七	即位	
崇	一百六十八	即位	
崇	一百六十九	即位	
崇	一百七十	即位	
崇	一百七十一	即位	
崇	一百七十二	即位	
崇	一百七十三	即位	
崇	一百七十四	即位	
崇	一百七十五	即位	
崇	一百七十六	即位	
崇	一百七十七	即位	
崇	一百七十八	即位	
崇	一百七十九	即位	
崇	一百八十	即位	
崇	一百八十一	即位	
崇	一百八十二	即位	
崇	一百八十三	即位	
崇	一百八十四	即位	
崇	一百八十五	即位	
崇	一百八十六	即位	
崇	一百八十七	即位	
崇	一百八十八	即位	
崇	一百八十九	即位	
崇	一百九十	即位	
崇	一百九十一	即位	
崇	一百九十二	即位	
崇	一百九十三	即位	
崇	一百九十四	即位	
崇	一百九十五	即位	
崇	一百九十六	即位	
崇	一百九十七	即位	
崇	一百九十八	即位	
崇	一百九十九	即位	
崇	二百	即位	
崇	二百零一	即位	
崇	二百零二	即位	
崇	二百零三	即位	
崇	二百零四	即位	
崇	二百零五	即位	
崇	二百零六	即位	
崇	二百零七	即位	
崇	二百零八	即位	
崇	二百零九	即位	
崇	二百一十	即位	
崇	二百一十一	即位	
崇	二百一十二	即位	
崇	二百一十三	即位	
崇	二百一十四	即位	
崇	二百一十五	即位	
崇	二百一十六	即位	
崇	二百一十七	即位	
崇	二百一十八	即位	
崇	二百一十九	即位	
崇	二百二十	即位	
崇	二百二十一	即位	
崇	二百二十二	即位	
崇	二百二十三	即位	
崇	二百二十四	即位	
崇	二百二十五	即位	
崇	二百二十六	即位	
崇	二百二十七	即位	
崇	二百二十八	即位	
崇	二百二十九	即位	
崇	二百三十	即位	
崇	二百三十一	即位	
崇	二百三十二	即位	
崇	二百三十三	即位	
崇	二百三十四	即位	
崇	二百三十五	即位	
崇	二百三十六	即位	
崇	二百三十七	即位	
崇	二百三十八	即位	
崇	二百三十九	即位	
崇	二百四十	即位	
崇	二百四十一	即位	
崇	二百四十二	即位	
崇	二百四十三	即位	
崇	二百四十四	即位	
崇	二百四十五	即位	
崇	二百四十六	即位	
崇	二百四十七	即位	
崇	二百四十八	即位	
崇	二百四十九	即位	
崇	二百五十	即位	
崇	二百五十一	即位	
崇	二百五十二	即位	
崇	二百五十三	即位	
崇	二百五十四	即位	
崇	二百五十五	即位	
崇	二百五十六	即位	
崇	二百五十七	即位	
崇	二百五十八	即位	
崇	二百五十九	即位	
崇	二百六十	即位	
崇	二百六十一	即位	
崇	二百六十二	即位	
崇	二百六十三	即位	
崇	二百六十四	即位	
崇	二百六十五	即位	
崇	二百六十六	即位	
崇	二百六十七	即位	
崇	二百六十八	即位	
崇	二百六十九	即位	
崇	二百七十	即位	
崇	二百七十一	即位	
崇	二百七十二	即位	
崇	二百七十三	即位	
崇	二百七十四	即位	
崇	二百七十五	即位	
崇	二百七十六	即位	
崇	二百七十七	即位	
崇	二百七十八	即位	
崇	二百七十九	即位	
崇	二百八十	即位	
崇	二百八十一	即位	
崇	二百八十二	即位	
崇	二百八十三	即位	
崇	二百八十四	即位	
崇	二百八十五	即位	
崇	二百八十六	即位	
崇	二百八十七	即位	
崇	二百八十八	即位	
崇	二百八十九	即位	
崇	二百九十	即位	
崇	二百九十一	即位	
崇	二百九十二	即位	
崇	二百九十三	即位	
崇	二百九十四	即位	
崇	二百九十五	即位	
崇	二百九十六	即位	
崇	二百九十七	即位	
崇	二百九十八	即位	
崇	二百九十九	即位	
崇	三百	即位	
崇	三百零一	即位	
崇	三百零二	即位	
崇	三百零三	即位	
崇	三百零四	即位	
崇	三百零五	即位	
崇	三百零六	即位	
崇	三百零七	即位	
崇	三百零八	即位	
崇	三百零九	即位	
崇	三百一十	即位	
崇	三百一十一	即位	
崇	三百一十二	即位	
崇	三百一十三	即位	
崇	三百一十四	即位	
崇	三百一十五	即位	
崇	三百一十六	即位	
崇	三百一十七	即位	
崇	三百一十八	即位	
崇	三百一十九	即位	
崇	三百二十	即位	
崇	三百二十一	即位	
崇	三百二十二	即位	
崇	三百二十三	即位	
崇	三百二十四	即位	
崇	三百二十五	即位	
崇	三百二十六	即位	
崇	三百二十七	即位	
崇	三百二十八	即位	
崇	三百二十九	即位	
崇	三百三十	即位	
崇	三百三十一	即位	
崇	三百三十二	即位	
崇	三百三十三	即位	
崇	三百三十四	即位	
崇	三百三十五	即位	
崇	三百三十六	即位	
崇	三百三十七	即位	
崇	三百三十八	即位	
崇	三百三十九	即位	
崇	三百四十	即位	
崇	三百四十一	即位	
崇	三百四十二	即位	
崇	三百四十三	即位	
崇	三百四十四	即位	
崇	三百四十五	即位	
崇	三百四十六	即位	
崇	三百四十七	即位	
崇	三百四十八	即位	

天智天皇の
宏業

法典の編纂
とその完成
大寶二年
戸籍

統一政治の
完成と都城
の造営

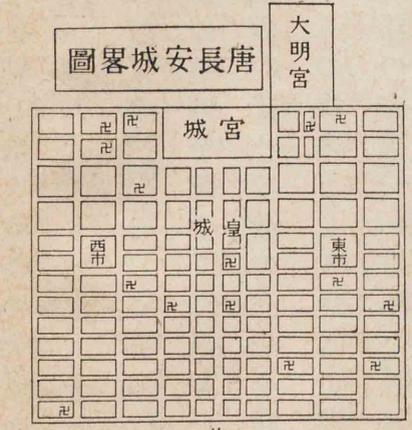
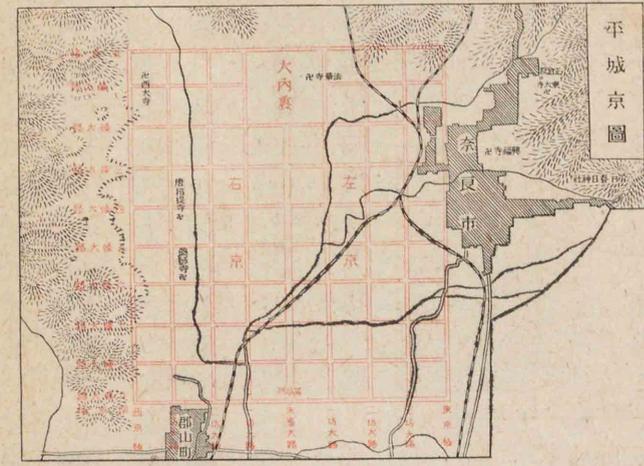
國家の財政・國民生活の安定を期し着々改新の大業を進められたのである。かくて齊明天皇^{第七代}の御代にも猶皇太子として皇威の伸張、國威の發展に努められ、天智天皇^{第八代}として御即位遊ばさるゝや、對外關係を調整し、政治機構の整備を圖つて益々皇室を中心とする中央集權的統一政治の完成を期せられた。而してその根本として最も重要な事は永久的な法典の完備であるから、改新の精神に基き、唐の法典に範をとり、我が固有の風習を參考して、初めて近江朝廷令二十二卷を制定されたが、この法典は文武天皇^{第十代}の修正を経て



文武天皇^{第十代}の御代に大寶律令として一先づ完成し、更に元正天皇^{第十四代}の御代に改訂を加へられて、律令各十卷の養老律令として最後の完成を見たのである。かくて國家の政治、國民の生活は悉くこれに據つて行はれることとなり、皇威國內に遍く、國威海外に輝き、文化

燦然たる奈良時代の盛世を見るに至り、それに伴って規模宏莊なる帝都の都市計畫も唐制に倣つて次第に進み、天智天皇の滋賀京大津市地方、持統天皇第四十代の藤原京奈良縣を経、元明天皇第四十代の平城京の經營に至つて一段落を見た。平城奠都と前後して和同開珎を初めて鑄造せられ、これを全国的に流通せしめられるに至つた事も統一政治の完成を物語るものである。

平城京圖
唐長安京略圖
奈良時代の盛世と聖武天皇

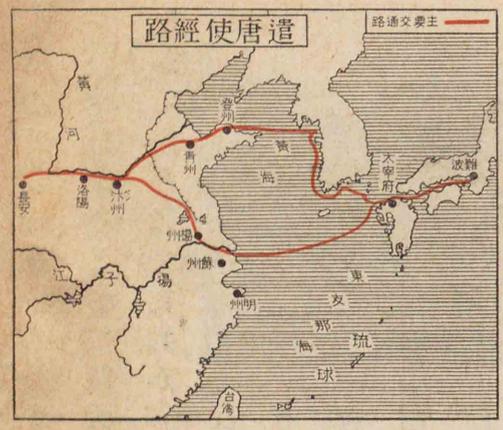


而して奈良時代の盛世は聖武天皇第四十五代の御代に

興隆の絶頂に達したのであるが、天皇は推古天皇以來國利民福の爲に御歴代天皇の尊崇を得て來た佛教を殊に深く信仰せられ、都に東大寺、各國に國分寺を建立して殆ど國家的宗教とせられ、政教一致の統一政治を實現せんとするに至つたのである。

【参考】 大化改新と明治維新を比較考察せよ。

奈良時代の文化 推古天皇以來の支那との國交は隋が滅びて唐



遣唐使
遣唐使行路圖
唐文化の影響

の興つて後も盛に行はれ、奈良時代には遣唐使の組織も整つてその往來前後十數回に及び、我が國人の留學、彼の國人の來朝も頗る多くなつた。従つて當時世界に隆盛を誇つた唐の文化は盛に輸入せられ、飛鳥時代について大陸の影響を受けた我が國文化第二次の黄金時代を現出したのである。而してその中心たる佛教は既に述べ

國家的佛教の興隆

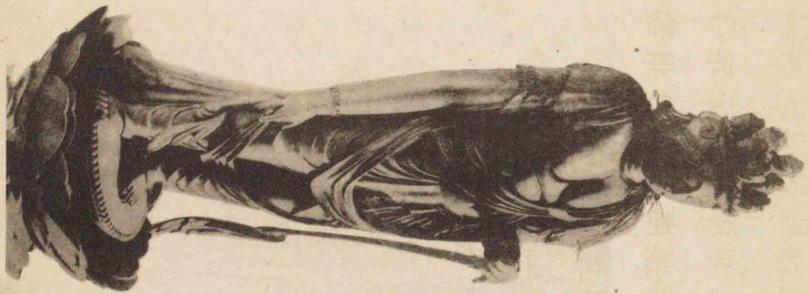
た如く國家的宗教となつて大いに榮え、都には所謂南都七大寺東大西大南大北大、興元興藥師元興、法隆元興を始めて、諸大寺藝カを並べ、地方にも國分寺の外に寺院少なからず、朝鮮や支那から傳はつた所謂南都六宗三論法相成實俱舍華嚴律は並び行



唐招提寺
金堂
奈良市西
部

佛教美術の
黄金時代

はれ、僧侶も一寺に數百人あるは珍しからぬ有様となり、行基カ鑿カ眞カ等の高僧も現れ、社會慈善事業もその信仰から盛に行はれた。併し國家的保護の厚いのに馴れてやがて僧侶の墮落を來たし、出家の身ながら政治上に活動する者も出來、遂に稱徳天皇第四十八代の御代の道鏡の僭上をすら見るに至つた。かゝる佛教の興隆は自然寺院佛像の造立、寺内佛前の裝飾等の爲に建築彫刻、繪畫工藝等の美術の進歩を促し、殆ど空前絶後の黄金時代を現するに至り、その遺品は奈良附近の寺院に現存するものが少なくない。漢學による各種學問も弘く行はれ、大學、國學等



音觀面一十寺華法



薩菩の門龍陽洛

の教育もそれによつて盛になり、吉備眞備阿倍仲麻呂の如き海の内
外に盛名を恣にした學者も輩出し、我が國最初の漢詩集たる懷風藻
も撰修せられた。漢學の盛大は亦國民精神を刺戟し高揚したこと
も少なからず、古事記・日本書紀等の國史の編纂によつて我が國體が
明徴され、諸國風土記の撰進は當時の國狀を明かにし、我が國民的文
學の粹である和歌の流行は凝つて萬葉集の編纂を見るに至つたの
である。而して日本書紀は純粹の漢文で記されたが、古事記は漢字
を用ひて國語を現し、萬葉集に至つては頗る自由に漢字を驅使して
所謂萬葉假名を用ひ、外來文化同化の先端をなしてゐる。

【考】 萬葉集の歌及び萬葉假名の例。

田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪者零家留
猶高乃高圓山乎高彌鴨出來月乃遲將光

(山部赤人)

(大伴坂上郎女)

女性の活動 かくの如く雄々しく花々しく發展した時代に、政治
社會文化の各方面に於ける女性の活動も頗る目覺しいものがあつ

女帝

光明皇后

光明皇后
御筆蹟

橘三千代

和氣廣蟲

た。申すも畏き事ながら、推古天皇以來奈良時代を通じて、女帝の多くましましたことはこの點よりも留意しなければならぬ。即ち推古天皇より光仁天皇第四十代に至る十七代中女帝八代を數へ、奈良時代七代中の四代は女帝にましましたのである。是等の女帝の御事蹟は改めて述べる要はないであらう。奈良時代の女性の龜鑑として特に仰ぐべきは光明皇后と申し奉る聖武天皇の皇后光明子である。皇后は藤原不比等の女で漢學書道に達せられ、佛教を篤信して御仁慈深くま

天平六年十月音

藤三娘

しまし、聖武天皇の盛世はその御内助による所少なからず、國分寺東大寺の創立にも御力を盡くされ、又施藥院・悲田院を設けて鰥寡孤獨を救はしめられた。皇后の御母橘三千代も女丈夫であつて、不比等に對する内助の功多く、元明・元正・聖武の三天皇に厚き御信任を得て朝廷にも活躍したのである。稱徳天皇の御信任深かつた和氣廣蟲

萬葉集の女
流歌人

上古の服制
正倉院御
人物樹下美
人の圖

西域發掘
の樹下美人
唐制模倣の
服制



も剛柔兼備の賢婦であつて、嘗て飢饉の際棄兒を養育すること八十餘人に及んだが、道鏡の野望明かになるや、弟清麻呂と共に斷乎反抗して流された。萬葉集の歌人中に上下尊卑の別なく女流歌人が頗る多いのは、當代女性の豊かな精神生活を窺ひ得られる點であるが、特に皇族中では額田王オホホト臣下では大伴坂上イラフツメ女メがその双璧である。

【参考】 既習の事實を復習して女帝の御功績をまとめよ。

風俗の變遷

上古の風俗は古墳等からの發掘品又は埴輪等によつて想像するに、極めて簡素で多くは素色の絹麻・楮等の筒袖の上着に、女は腰に裳を纏ひ、玉類を頸や腕の飾として居た。然るに支那との交通が盛になるや、特に唐の影響著しく、官吏には禮朝制ライチャウの服制定まり、一般

に廣袖長裾の華美なものが流行し、支那で夷狄の風として賤まれた左衽ジケンを元正天皇の御代から右衽に改めるに至つた。食物・食器も自然素朴なものより漸く進歩し、住宅も堀立茅葺の小屋より白堊の壁朱丹の柱に碧瓦の屋根を負ふ堂々たる邸宅が構へられるやうになつた。正倉院御物の中には當時の風俗を偲ぶに足る貴重なる遺品が頗る多いが、女性の風俗は特に美しく、豊満華麗の風が最もよろこばれた。併しかゝる風俗は都會の上流人に限られ、地方の人民の生活はなほ上古の姿その儘だつたのである。

第五章 外來文化の醇化と國風文化の興隆

平安時代の大勢

政治の變遷 統一政治は奈良時代に完成、隆昌の域に達したが、佛教興隆に伴ふ僧侶の專横によつて紊亂したので、光仁天皇について御即位になつた桓武天皇は、平安奠都を斷行されてその弊害を去り、

第五章 外來文化の醇化と國風文化の興隆

平安時代の勢

平安奠都の意義

政治の變遷 統一政治は奈良時代に完成隆昌の域に達したが、佛教興隆に伴ふ僧侶の專横によつて紊亂したので、光仁天皇について御即位になつた桓武天皇は、平安奠都を斷行されてその弊害を去り、

代時良祭りよ新改化大一期一第代上		天皇	皇	室	紀元	年號	重 要 事 項	主 要 人 物	朝鮮支那
45	聖	孝	天	天	39	弘文	近江大津宮に奠都即位 中臣鎌足を大織冠として藤原の姓を賜ふ 庚午年籙成 大友皇子太政大臣	藤原不比等	新羅百濟
44	正	明	天	天	38	天智	比羅夫肅慎再征○始めて瀾刻を作る 百濟救援のため九州行幸 我軍白村江に唐軍と戦ふ 延位二十六階制定○烽火・水城を作る	藤原不比等	新羅百濟
43	元	武	天	天	37	天智	中大兄皇子皇太子	藤原不比等	新羅百濟
42	武	文	天	天	36	天智	阿倍比羅夫蝦夷肅慎征伐 比羅夫肅慎再征○始めて瀾刻を作る 百濟救援のため九州行幸 我軍白村江に唐軍と戦ふ 延位二十六階制定○烽火・水城を作る	藤原不比等	新羅百濟
41	統	持	天	天	35	天智	多爾島人來朝	藤原不比等	新羅百濟
40	武	天	天	天	34	天智	令二十二卷を頒つ即位	藤原不比等	新羅百濟
39	天	天	天	天	33	天智	讓位して太上天皇と稱す 多爾・夜久・菴美・度麻の民來朝 大寶律令成る	藤原不比等	新羅百濟
38	智	天	天	天	32	天智	和同開珠を鑄る 蝦夷討伐 平城京遷都 善鏡叙位の法を制す 太安麻呂古事記を上る 諸國に風土記を編ましむ 信覺・球美人來朝	藤原不比等	新羅百濟
37	天	天	天	天	31	天智	養老元 養老律令成る	藤原不比等	新羅百濟
36	天	天	天	天	30	天智	日本書紀成る	藤原不比等	新羅百濟
35	天	天	天	天	29	天智	太安麻呂卒す	藤原不比等	新羅百濟
34	天	天	天	天	28	天智	渤海始めて朝貢 藤原光明子立后 遣唐使の制を定む	藤原不比等	新羅百濟
33	天	天	天	天	27	天智	神龜元	藤原不比等	新羅百濟
32	天	天	天	天	26	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
31	天	天	天	天	25	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
30	天	天	天	天	24	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
29	天	天	天	天	23	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
28	天	天	天	天	22	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
27	天	天	天	天	21	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
26	天	天	天	天	20	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
25	天	天	天	天	19	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
24	天	天	天	天	18	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
23	天	天	天	天	17	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
22	天	天	天	天	16	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
21	天	天	天	天	15	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
20	天	天	天	天	14	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
19	天	天	天	天	13	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
18	天	天	天	天	12	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
17	天	天	天	天	11	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
16	天	天	天	天	10	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
15	天	天	天	天	9	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
14	天	天	天	天	8	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
13	天	天	天	天	7	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
12	天	天	天	天	6	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
11	天	天	天	天	5	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
10	天	天	天	天	4	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
9	天	天	天	天	3	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
8	天	天	天	天	2	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
7	天	天	天	天	1	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
6	天	天	天	天	0	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
5	天	天	天	天	-1	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
4	天	天	天	天	-2	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
3	天	天	天	天	-3	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
2	天	天	天	天	-4	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟
1	天	天	天	天	-5	天智	天智元	藤原不比等	新羅百濟

攝關政治の出現
基經筆蹟

藤原氏全盛時代

道長筆御堂關白記

力が、嵯峨天皇の御代に出た冬嗣不比等の玄孫以來再び盛になり、その子良房は文徳天皇第五十の御代に人臣として最初の太政大臣に任ぜられ清

基經

和天皇第六十の御代には長くも人臣として攝政の要位を占めるに至つた。而も基經良房に至るや、光孝天皇第五十の御壯年なるに拘らず萬機の政を攝政の

如く聴き、宇多天皇第九十の御代には、皆關白シテ太政大臣ニ然後奏下トとの勅を賜はるに至つて、關白は全く官職の様になり、やがて藤原氏は攝政關白を獨占して天皇の御幼壯に關せず政權をその手に握り、我が國



體に反する所謂攝關政治の出現を見るに至つたのである。かくて延喜天曆の治と謳はれた醍醐村上第六十二の兩天皇の御代には攝關を置

かれなかつたが、冷泉天皇第六十三以後は永く恒例となり、藤原氏は屢事を構へて他氏の政治的進出を阻み、自家の權力維持を圖つてその全

藤原氏全盛時代の弊害

地方豪族の宅
武士とその統領の發生

地方に於ける武士の勢力

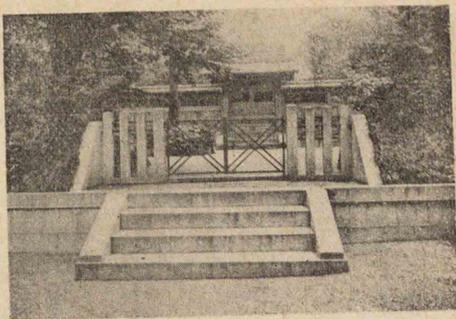


盛時代を現出し、一條第六十六三條第七十六後一條第八十六の三天皇に歷仕して榮華專權の限を盡くした道長の時代に絶頂に達した。而も藤原氏は自家の利害と榮華にのみ走つて朝廷の政務を怠つてゐたので、統

一政治は全く弛廢し、私有地たる莊園が増して公領が少なくなり、地方の政治は腐敗して安寧秩序が紊れ、人民の困窮、國庫の缺乏が甚しくなつたのである。茲に於て地方の豪族は自衛の爲に武装して武術を練磨するやうになつて武士の發生を見ることとなり、中央に於て藤原氏に抑へられてゐた貴族も地方に土着する者が多くなつて、その統領たる地位を占めるに至つた。而してその中

最も有力になつたのが西國に勢力を張つた平氏桓武天皇と東國に地盤を固めた源氏清和天皇の後裔であり、承平・天慶の亂、前九年・後三年の役等は、何れも是等武士の同族又は異族間の交戦であつたのである。藤原

氏の攝關政治がかくの如く弊害百出するに至つたので、後三條天皇
第七十代は其の改革を企てられ、御親政によつて藤原氏を抑壓せんと圖
られたのであるが、不幸中道にして崩じ給うた。そこで白河天皇^七



後白河天皇御陵
京都市東山区

院政を行はせられた白河鳥羽^{第七十四代}、後白河^{第七十七代}の三上皇が何
れも入道遊ばされて法皇と稱せられた如く、深く佛教に歸依せられ
た爲に、寺院僧侶の横暴が盛になつて、所謂僧兵の亂暴を見るに至つ

た。茲に於て當時地方に勢力を得てゐた武士は、是等朝臣の抗争、僧
兵の鎮壓等の爲に中央に進出して政治的にも次第に勢力を占める
に至り、平治の亂には平氏が源氏を壓倒して支配的地位を獲得する
ことゝなつた。然るに平氏は勢に乗じて清盛が武士として最初の

大宰大貳清盛

太政大臣に迄昇り、一族亦朝臣の列に入つて藤原氏の先例を
その儘に専權榮華の限を盡くし、武士の本分を失つて奢侈文弱に墮したため、奢る平家久しからず、
忽ち源氏の勢力に驅逐されて滅び、やがて世は源氏によつて眞の武
家政治の時代に入ることゝなつたのである。

参考

攝關政治の我が國體に反する所以を考察せよ。

平安時代初期の文化

平安時代初期は奈良時代に引續いて唐風文化の模倣が盛であつて、學問文學にその風著しく、大學はもとより
當時流行した一族子弟教育の爲に建てた私學校たる和氣氏の弘文

日本の佛教の出現

嵯峨天皇

神佛習合の風

遣唐使の廢止と國文學の興隆



院、藤原氏の勸學院、橘氏の學館院等でも主として漢學が教へられ、嵯峨天皇、小野篁、都良香、僧空海等は漢詩文の名手として名あり、リヤウシヤウシヤウ凌雲集等の詩文集の勅撰すら行はれ、續日本紀以下の六國史も續々編纂せられ、書道の三筆も全く唐風であつたのである。併し佛教には早くも日本獨特の風が現れ、最澄が創唱した天台宗、空海が大成した眞言宗は、何れも唐に留學して輸入したものに、或ひは諸宗の粹を加へ、或ひは更に教義を發展せしめたものであつて、國家の保護よりも貴族の歸依に頼る所が多く、奈良時代のやうに國家の政治に累を及ぼすことなく、又神佛調和の思想も發達して、神社に神宮寺を附屬し、寺院に鎮守神を祀る風が普通になつた。これを神佛習合シニゴシニゴと稱する。かくて宇多天皇第五十代の御代に遣唐使の派遣が中止せられ、間もなく唐が滅びるや、漢詩文に代つて和歌、和文が漸く流行し、醍醐天皇の御代には紀貫之オホシノカウチノ、凡河内躬恒等ツツネが、最初の勅撰歌

假名文字の使用

國風文化の興隆

僧形八幡神像 奈良市外藥師寺藏

佛敎の墮落と淨土敎の發達



集たる古今和歌集を撰進し、貫之は亦土佐日記を著して和文の魁サキガケをなした。而してかくの如く國文學の盛になつたのは、この頃から、漢字を省略し、或ひはその草體を變化させた假名文字の使用のはじまつたことも大なる原因になつてゐるのである。

参考 令外の官格式の制定等も外來文化醇化の一例である。前項を参照して平安時代初期の文化の特色を考へよ。

平安時代中期以後の文化

外來文化が醇化されて純粹の國風文化の盛になつたのは藤原氏の攝關政治が全盛を極めた平安時代中期以後に特に著しくなり、その餘風は院政より平家全盛時代迄繼續された。佛教では天台眞言の二宗が皇室貴族の尊信が益盛になるにつれて漸く僧侶の墮落を來たしたが、眞摯シンシな僧侶の間には阿彌陀佛を念じて未來の極樂往生を願はんとする淨土敎の思想が次

本地垂迹説
の出現

國文學の全
盛

上代様草
假名
散文

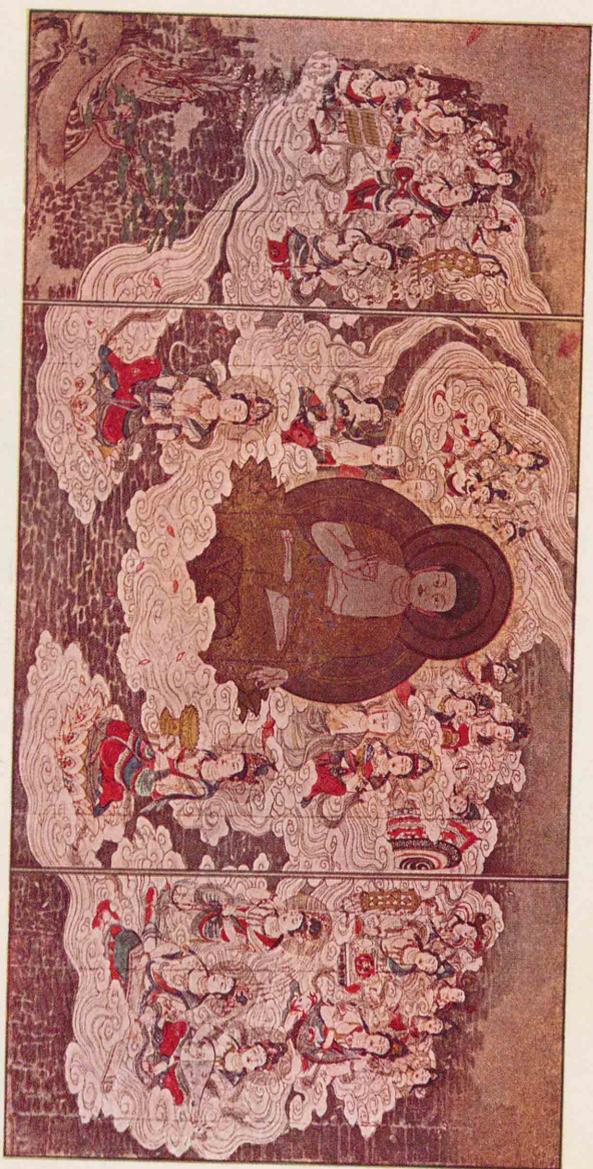
和歌

第に盛になり、高倉天皇^{第十代}の御代に至て遂に法然によつて浄土宗
が開かれた。浄土教の信仰は古く支那にもあつたが、法然の信仰は
更にそれを徹底させた我が國獨特のものである。又神佛習合の思
想も益々發達して佛を神の本地^{ホトケ}、神を佛の垂迹^{スサケ}と考へる本地垂迹説が
唱へられ、僧形^{ソウギヤウ}の神像すらも作られるやうになつた。文學は漢文が
廢れて全く國文學の全盛時代となり、散文では物語、日記類が最も多

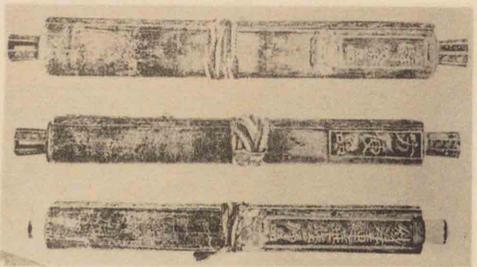
わあはほやうららていそ
わんはほやうららていそ

く行はれ、特に紫式部の源氏
物語、清少納言の枕草子は國
文學史上古今無双の双璧と

稱せられ、前者は貴族生活を描いた小説で、結構の精妙描寫の巧^{ウマク}緻^チ、前
後にその比を見ぬ大傑作であり、後者は折々の感興を集めた隨筆で、
その鋭敏な觀察と豊富な趣味は心にくきばかりの逸品であつて、何
れも今猶内外に喧傳^{ケンペウ}されてゐる。和歌にも和泉式部、赤染衛門、伊勢
大輔等の名手が續出し、勅撰歌集も次々に出來、優雅流麗な歌風と洗



(聖都信心畫傳) 圖 迎來衆聖



形外同



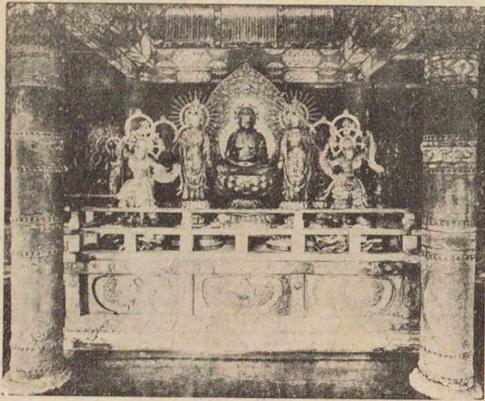
經納家平社神鳥巖



像輪念字一寺尊中

書道の國風
化

美術工藝の
國風化
金色堂内
部
岩手縣平
泉村

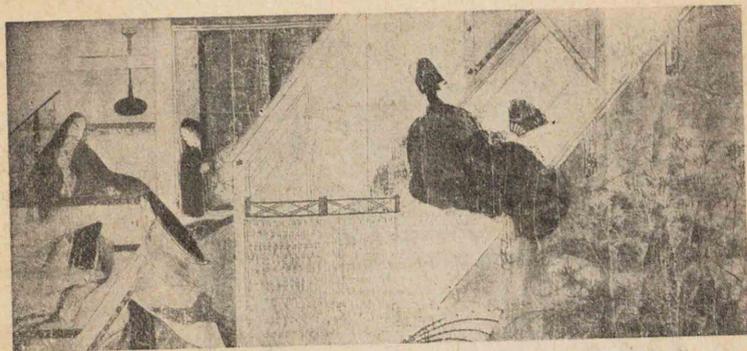


大和繪の源流をなし、後、藤原隆能等が出て繪卷物の流行を見るに至り、各種工藝品も藤原氏の榮華を反映して精妙な技術の進歩著しく、何れも優美華麗な趣を發揮してゐる。

練された語句の技巧が重んぜられた。而して是等の作者に女流作家の著しく多いのは次に述べる如く、この時代に特有な女性の生活と教養に基くものである。文學と共に書道も國風に同化せられて

所謂三蹟の名筆を輩出したが、假名文字の流行につれて上代様と稱せられる流麗な草假名の發達を見るに至つた。美術工藝も全く唐風を離れて國風を示すに至り、建築では宇治の鳳凰堂、平泉の金色堂、嚴島の嚴島神社等にその面影を存し、彫刻には名工定朝が現れて多くの名作を遺し、繪畫には早く巨勢金岡宅磨爲成等の名匠が出て

参考 美術・文學等は文化の特色を最も明かに示すものである。奈良時代と比較して國風文化發達の由來を考へよ。



平安時代の女性 此時代の初期には女性の教養も男子と同じく漢文學が主であり、社會的に貢獻したのも少なくない。嵯峨天皇の皇后橘嘉智子檀林が御生家の弟武敏公と謀つて學館院を建て、一族の教養に資し、嵯峨に檀林寺を創められて佛教の修養に力められ、同じ天皇の皇女有智子智子内親王が漢詩文に秀れ給ひ、正子内親王淳和天皇が佛教の信仰深くましまし、濟治院を設けて施療を行ひ、又孤兒を養育せしめられた如きは、何れも當代女性の龜鑑である。然るに藤原氏の全盛時代になるや、女子は次第に社會的活動から遠ざかつて家内に籠るやうにな

り、文學・藝能に専念するに至つた。而も當時假名文字は女文字と稱せられて専ら女子の用ふるものとされてゐたので、自然國文學に女流作家を多く輩出したのである。更に女性特有の教養の高められたのは、藤原氏が己の女を宮中に納れて外戚となり、權勢を得ようとして一族相競ふに至るや、才學ある女子を選んで侍女とする風の盛になつたのに基く。前に舉げた清少納言は一條天皇の皇后定子の侍女、紫式部和泉式部伊勢大輔等は中宮彰子道長の許に仕へてゐた人々であり、赤染衛門は道長の妻の侍女であつた。併し、才學を誇る是等女性の中には感情に溺れて道德を亂し、華やかな生活の裏面には哀愁に泣くものも少なくなかつたのである。

参考 女性の生活教養に就て古代のそれと比較考察せよ。

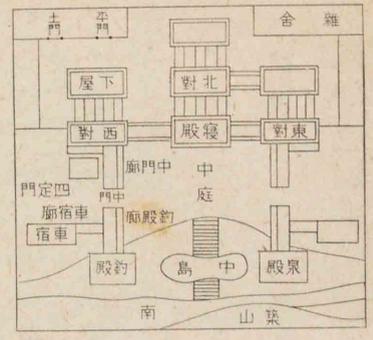
風俗の國風化

唐風の服制も次第に國風に馴致せられ、男子は禮服に束帶直衣ナホシ常服に直垂ヒタケ水干ススキカン、女子は禮服に十二單ヒトヘ常服に袷ウチキ姿が普通となつたが、院政の頃から男子の服装は特に糊を強くした強裝束

年中行事と
娛樂

寢殿造平
面圖

道德の衰退



の流行を見、住宅には輕快優雅なる寢殿造が貴族一般の風となり、自然と人工の美を調和して工夫を凝らすやうになつた。人日・上巳・灌佛・端午・七夕・重陽等の年中行事は、何れも奈良時代頃より唐から傳はつたものであるが、平安時代になると、これ等も次第に趣を變じて國風に化し、やがて我が國獨特の風習として廣く行はれるに至り、詩歌・管絃・圍碁・雙六等の宴遊・娛樂も貴族の奢侈榮華に従つて盛に流行するにつれ、何れも國風を帯びるやうになつたのである。併し貴族の生活は次第に文弱浮薄に流れて迷信が流行し、道德的精神の衰退を免れなかつた。

参考 年中行事や風俗で現今猶行はるゝものに就いて考察せよ。

第六章 武士の勃興と鎌倉時代

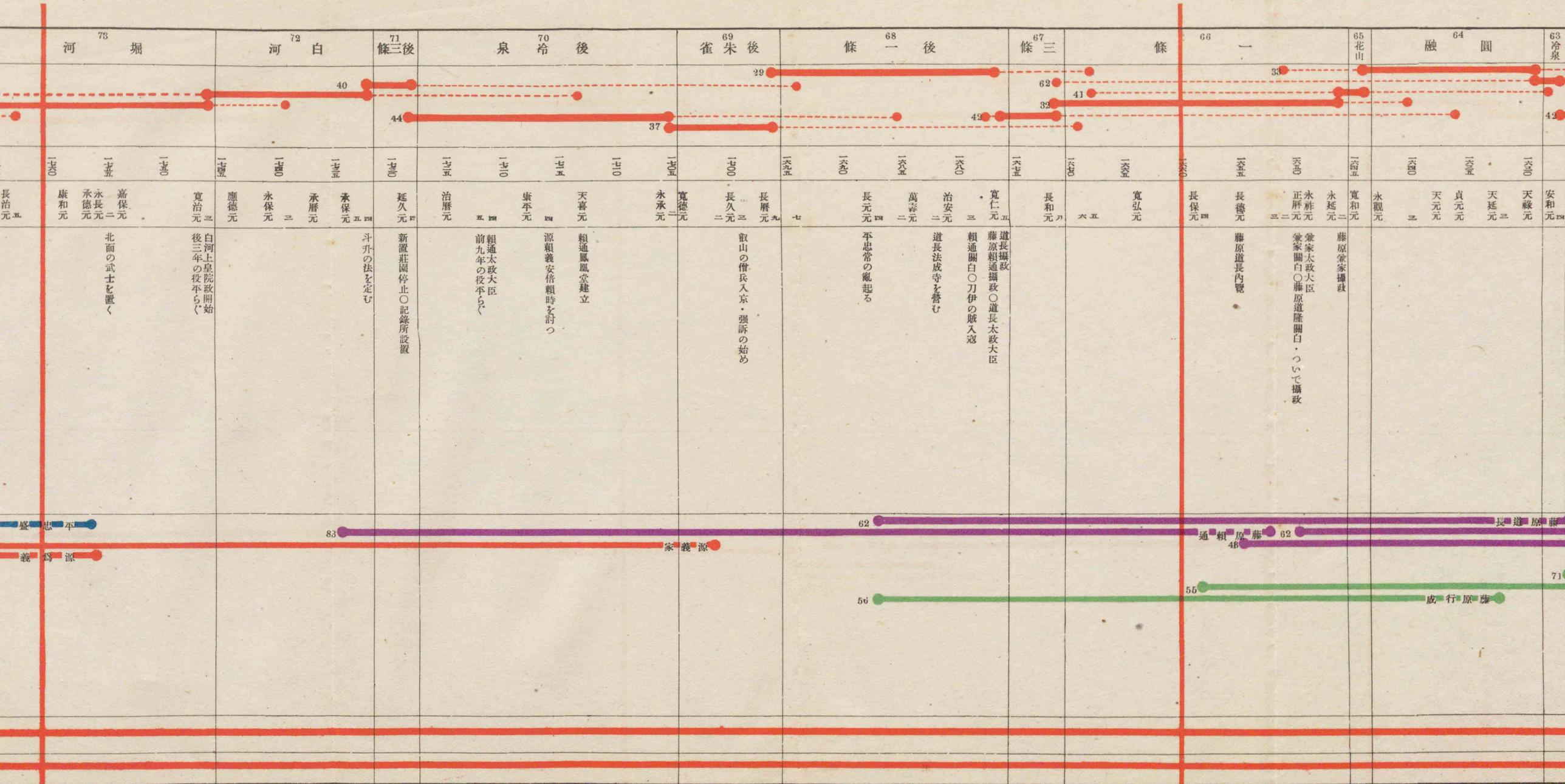
つた。

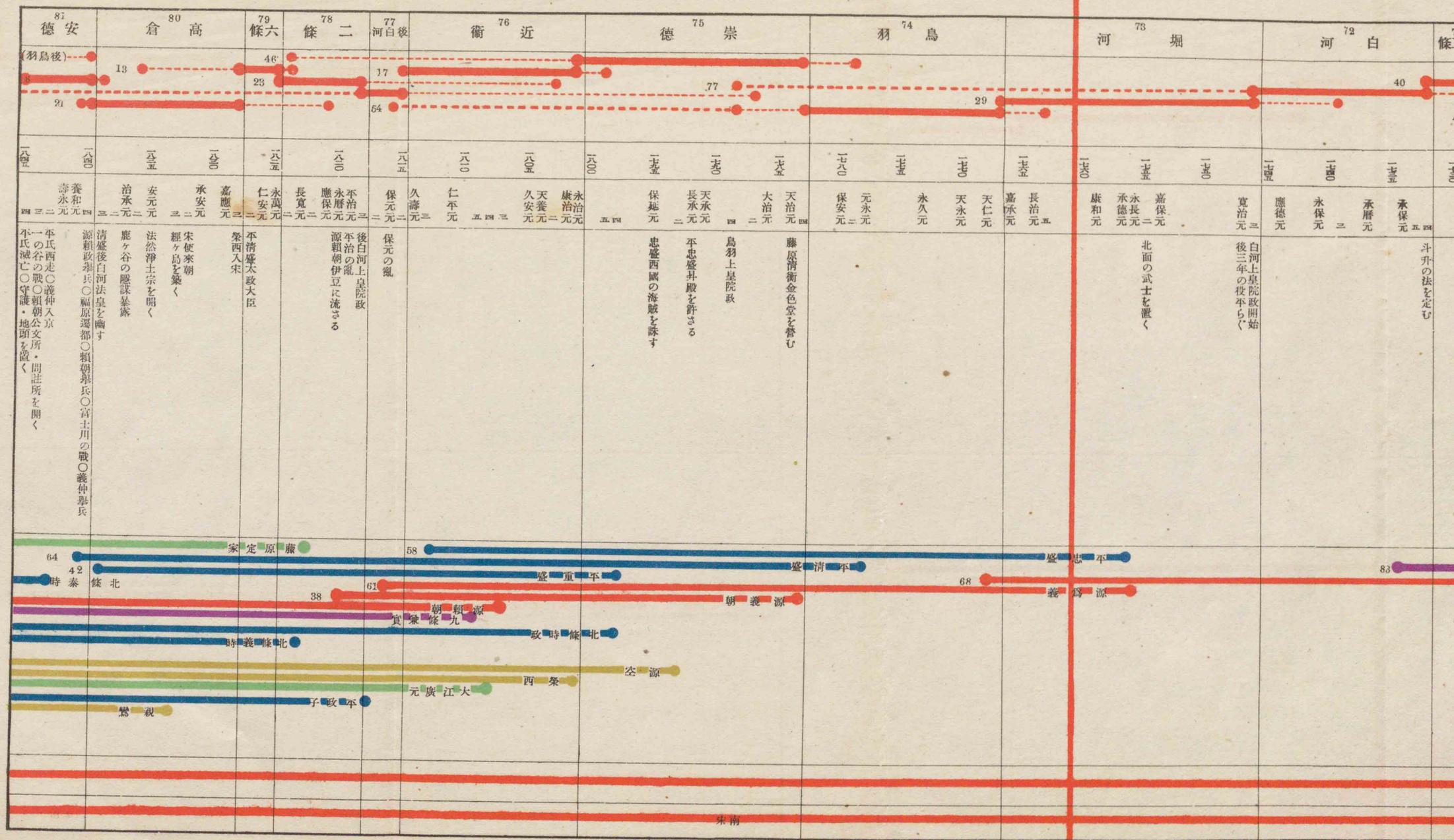
参考

年中行事や風俗で現今猶行はるゝものに就いて考察せよ。

第六章 武士の勃興と鎌倉時代

代時安平一期二第代上																																
天皇	桓 武		平 城		嵯 峨		淳 和		仁 明		文 德		清 和		陽 成		光 孝		字													
皇室	一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		58													
紀元	一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一四〇		一五〇													
年號	延暦元		弘仁元		天長元		承和元		嘉祥元		仁壽元		貞觀元		元慶元		仁和元		寛平元													
重要事項	長岡に遷都		最澄延暦寺を建つ		平安奠都		東寺・西寺建立 續日本紀成る○田村麻呂征夷大將軍となる 渤海に遣使○清水寺建立		田村麻呂蝦夷平定 志波城を築く 田村麻呂再び征夷大將軍となる○最澄・空海入唐 最澄歸朝・天台宗を傳ふ 空海歸朝・真言宗を傳ふ		藏人所を置く○藥子の亂		弘仁格式成る 渤海來朝○冬嗣勸學院を作る 東寺を空海に賜ふ		經國集を撰す 渤海入朝		遣唐使を遣す		日本後紀成る 播磨・伴健岑等流罪に處せらる		學館院建立		良房太政大臣 良房攝政		應天門の變○最澄傳教大師と謚せらる 續日本後紀成る		基經攝政 文德實錄成る 在原行平養學院を置く 渤海入朝		基經關白 巨勢金剛實聖禪子を遣く 高望王に平氏を賜ふ			
主要人物	和坂空胤		氣上海澄		清田冬原		麻呂村		房良原藤		54		56		52		62		69		67		57 持家伴大									
朝鮮支那	新羅 (海漕)		唐																													





武士興隆の
經過

武力の専有
と主従の關
係

莊園の所有
經營とその
支配

武士の實力
と信望

平氏滅亡の
原因

武士勃興の由來

平安時代中期以後武士が地方に起つて次第に勢力を得、やがて彼等の中から出た平氏が藤原氏に代つて天下の政權を握るに至つた經過は既に述べた。かくの如く武士が勢力を得たのは、彼等が武力を専有し、従者として固く主従の關係を結んだ家、子郎黨を有してゐたからである。而も私有地たる莊園を所有して自らその經營に當たつて居り、且中央の貴族がその莊園の支配を彼等に委せるやうになつたので、その經濟的基礎も亦頗る強固であつた。かくて政治が腐敗し、秩序の紊亂してゐた地方にあつて、實力によつて軍事警察の實權を握つて人民の信望をあつめ、やがて中央に於てもその實力が認められるやうになり、遂に先づ平氏が天下の政權を握るに至つたのである。然るに平氏はこの武士としての特色を忘れて一族擧つて朝臣として榮達し、藤原氏榮華の餘弊に溺れて、質實剛健の精神を失ひ、專權を行つて忽ち天下の人心を失つた爲に早く滅亡の悲運を招いたのであつた。

源頼朝の深謀遠慮

源頼朝筆蹟

武家政治の職制の基礎

【参考】 武士の莊園には彼等自身開墾して私有するに至つたものが多く、これを名田と稱し、それを多く有するものを大名、然らざるものを小名と稱した。これが大名小名の名稱の由來である。

武家政治の成立と發達

平氏を破つてこれを西海に走らせた源頼朝は、平氏の成敗に深く鑑みて、輕々しく京都に上らず、祖先以來源氏に縁故深い關東に徐ろに勢力を張り、自然の要害たる鎌倉に根據



を構へて地方の武士を完全にその配下に服せしめ、確固たる基礎を築くにつとめた。而して未だ平氏滅亡以前に、配下の武士を統率

する目的で、先づ侍所を開いて和田義盛を別當として、軍事警察を掌らせ、ついで京都から法制に通じた大江廣元・三善康信を招いて公文所（後に改む）、問註所を開き、廣元を前者の別當として、庶政を、康信を後者の執事として、訴訟を掌らせた。この三個の役所がやがて武家政治の中央機關となつたのである。ついで平氏滅亡の後、謀反人の起る

守護地頭の設置と天下の實權掌握

北條泰時筆蹟

武家政治の完成

貞永式目 紀元二千三年寫

變態政治の出現

のを豫防する爲と稱して全國に守護地頭を置き、配下の武士をこれに任じて、前者に國內の軍事警察を掌らせ、後者に莊園・公領の年貢米取立の事を掌らしめた。茲に於て各國の國司の權は守護に移り、莊園の領主は地頭に制壓されるやうになり、天下の實權は自然に源氏の手に歸するに至つたのである。かくて頼朝は最



後に奥羽地方に久しく勢力を張つてゐた藤原氏を滅ぼして天下を一統し、後鳥羽天皇（第八十二代）の建久三年、征夷大將軍に補せられて幕府を鎌倉に開き、名實共に天下の

御成敗式目

一可修理神社專祭記事

石神者依人之敬増或人者依神之德遂運然則恒例之祭祀不致侵或如在之礼皆勿令怠慢自茲於關東御分國之并莊園者

政權を握つた。茲に於て元來蝦夷鎮定の爲に置かれた征夷大將軍が天下の政權をあづかり、その幕衛であつた幕府が天下の政治の府となり、未曾有の變態政治の形態が出現することゝなつたのである。

併し、源氏は武士の實力を以てよく天下の安寧秩序を維持し、人民の生活を安定して天下の信望をあつめたので、幕府の基礎は頗る固く、北條氏が勢力を得て源氏の正統を滅ぼし、執權としてその實權を握つてからも、政權の動搖することがなかつた。かくて後鳥羽上皇が王政復古を企て給ふた承久の變の後益、その組織を整へ、執權北條泰時は貞永式目を制定して武家政治の法制の基礎を確立し、その孫時頼もよく善政を行ひ、後宇多天皇^{第九十代}の御代には文永弘安兩度の元寇に時宗が全國の武士を率ゐて敢然としてこれを防ぎ、金匱無缺なる我が國體を完全に守つたのである。

【参考】 武家政治の變態なる所以を考へよ。

武士道の興起とその發達 鎌倉幕府がよくその權勢を保つことの出來たのは、武士の實力の然らしめた所であるが、その實力は武士道と稱せられる崇高な道德的精神に基く所が頗る多い。而してこの武士道の精神は地方に於ける武士勃興の間に自然に發達したの

であつて、自衛の爲に起つた武士の生活に尙武剛健の精神が重んぜられ、主従の關係によつて結合した彼等の間に義理・恩愛の情が盛になつて忠節仁愛の重んぜられるに至つたのは當然である。而も主従の關係は父子代々に繼承せられたから、累代の主君に對する報恩と父祖に對する崇祖の精神が重んぜられ、主名や家名を重んじて卑怯未練の振舞を忌み、清廉潔白を尙び、居常質素儉約を守つて華奢遊惰を戒めてゐた。而してかゝる精神は古來勇武を稱せられた東國に於てその發達が最も著しかつたが、東國に根據を置いて武家政治を創めた頼朝は、武士が藤原氏や平氏によつて作られた文弱遊惰の風に染むことを最も警しめ、武士道精神の獎勵に頗る努力し、歴代の將軍・執權もその遺法を守つて武士の訓練に力を致したのである。従つて武士道はこの時代に大成せられ、その精神は國民全體にひろまつて、一般に國民の道德的精神を盛にし、國民生活を肅正するに至り、後世、國民道德の重要な要素となることゝなつた。

家族制度の發達

婦道の進歩

代表的な女性
の事蹟

【参考】 既習の史實中より、武士道を全うした武士の實例を考へよ。

婦道の發達と女性の生活 當時の武士は主君から領土を分與され、それを代々子孫に傳へてゐたので、總領の優越權が認められ、一族はよくその統制に服して家族制度が發達し、従つて家庭内では父・夫の權威が最も重んぜられた。而も武士道の發達に伴つて貞節を重んずる婦道の進歩著しく、平安時代の頽廢した女子の精神生活も堅實にかへり、夫に對する内助の功が重んぜられ、子女の訓育もよく行はれるに至つた。頼朝の妻政子の内助の功、時頼の母松下禪尼の庭訓等は、その代表的なものであつて、諸子のよく知る所なるべく、義經に對する靜御前の毅然たる貞節、義仲の妻巴御前の男子も及ばぬ勇烈の如きも世に喧傳される所である。かゝる氣風は上下貴賤の間にも及び、藤原爲家の妻阿佛尼は夫に代つて訴訟の爲に鎌倉に下つて十六夜日記の名著を著し、その女紀内侍に乳母のふみを書き與へて内助庭訓の功多く、元寇の際の肥後の國の尼眞阿の愛國の至情は、

儒夫を起たしむる慨がある。

【参考】 婦道の振興が國民道德の發達に如何に重大な關係を有するかを實例によつて考察せよ。

文化と風俗 武士の興起、武士道の發達は當代の文化・風俗に影響する所多く、佛教では宋から榮西が臨濟派、道元が曹洞派の禪宗を傳へ、その直截な教説と峻烈な修業が武士

氏部仰藤原定家

の氣風に合して流行し、又法然の弟子親鸞の淨土眞宗の創唱、一遍の時宗の開宗によつて淨土教は更に徹底普及せられ、日蓮

金澤文庫

は法華經の熱烈な信仰より法華宗を開き、何れも簡単な教義と平易な念佛又は題目行によつて士民一般の歸依を得た。學問文學は公家・僧侶によつて餘勢を保つに過ぎなかつたが、初期には和歌に藤原

俊成・定家父子等が現れて新古今集の勅撰もあり、散文に和漢混淆の新文體が出來て勇壯な平家物語・源平盛衰記等の軍記物語が流行し、

學問文學と
武士

金澤文庫
印

藤原定家
筆蹟

佛教の新宗
派と武士

武家時代を反映した。而して武士の中にもその嗜として文雅の道を解する者も少なからず、將軍實朝の和歌、北條實時の學問に對する



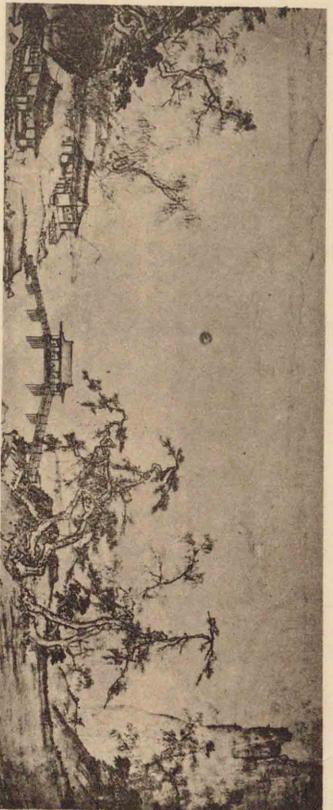
貢獻は最も有名である。建築では禪宗と共に宋から新しい様式が傳はつて寺院建築に新紀元を劃すると共に、住宅には質素簡單な武家造が流行するに至り、彫刻には運慶、湛慶等の一派が新たに興つて勇壯な氣風をみなぎらし、且寫實の方面に新生面を開き、繪畫は日本風の和繪が最盛期に達して數々の繪卷物が作られ、題材には戦争や社寺の縁起等が多く用ひられた。工藝として武器、武具の名工が輩出し、名作を續出せしめたのは時代の反映として注意すべきである。風俗が簡易質素になつたのは言ふ迄もなく、鐙着、元服等の儀禮が重んぜられ、犬追物、流鏑馬、笠懸等は武士の娛樂として、竹馬、印地打イシウチ等イシウチは兒童の遊戯としてもてはやさ

興福寺藏、天燈鬼、龍燈鬼



六波羅密寺藏、運慶像





宋夏珪筆山水圖



雪舟筆山水畫長卷一部

王政復古運動の嚆矢

後醍醐天皇の御討書
一、正中の變

れた。

参考

家庭に檀那寺のあるものはその宗派を知り、その宗祖に就いて調べて見よ。

第七章 建武中興と吉野時代

建武中興の由來 武家政治が變態の政治であり、特に北條氏が幕府の實權を握つてからは益々變態の度を加へたので、朝廷に於かせられては早くから天皇親政の常態に復して皇威を復興せんとする御理想があり、その最初の運動が承久の變となつて現れたのであるが、不幸失敗に終らせられた。然るに其の後幕府の專權が益々甚だしくなつたので、英明剛毅なる後醍醐天皇第九十代は、北畠親房等の賢臣を登用されて朝政の御改革を圖られ、元寇以來幕府の財政が紊れ、執權北條高時の失政に人心を失つたのに乘じて、王政復古を企てられたが、早く幕府の知る所となつて失敗せられた。即ち正中の變である。併し天皇は猶その御雄圖を棄て給はず、再び討幕の計を立て給ひ、復

護良親王
御筆蹟
一二元弘
の變

楠木正成
筆蹟

新田義貞
筆蹟
鎌倉幕府の
滅亡
王政復古の
成就

中興の御理
想

復幕府の知る所となつて畏くも後鳥羽上皇の例に倣つて隠岐に遷され給うたが、機熟して勤王の軍諸國に起り、大業成就の形勢が著しくなつた。即ち元弘の變である。かくて護良親王の御活動、楠木正成の奮戦は益、勤王の士氣を旺盛ならしめ、幕軍に屬してゐた新

田義貞、足利高氏等の歸順によつて勤王軍の勢は愈々旺盛となり、遂に北條氏の滅亡、鎌倉幕府の覆滅を見るに至つた。茲に於て天皇も京都に還幸あら

せられ、王政復古の大業がその緒に就くに至つたのである。

建武中興の顛末

天皇は、今の例は昔の新儀なり。朕が新儀は未來の先例たるべし」と仰せられた如く、着々政治の革新を企て給ひ、武家政治は勿論院政も攝關政治も廢せられて萬機を御親裁遊ばされ、

足利尊氏
筆蹟

公武合體の
政治

公武の軌轍

武家政治の
餘弊

中興の挫折

専ら延喜の治と稱せられた醍醐天皇の御代を模範として公家一統の政治を再現せんとせられた。併し時勢に應じて勳功により武士も登用せられ、足利尊氏高氏天皇の御名を賜はつて改名の如きは信任殊に深く、從つて公武相並んで朝廷に立つことになつ

たのである。然るに朝臣は時勢に疎くして徒に地位を誇り、武士は武功に驕つて實力を盾に専横ならんとする傾向甚だしく、兩者の軌轍や不平が次第に多くなつて、政務の澁滞、賞罰の不當等が少なくなつた。その上武家政治の餘弊は大義名分未だ明かならず、武士の實力が廣く滲潤してゐたので、天皇の遠大な御理想も士民に理解せられること少なく、大業の成就是頗る困難な形勢になつたのである。而もこの形勢に乗じて武家政治再興の野心を有する尊氏の惡辣陰險な活動が著しくなつて、護良親王も弑せられ給ひ、中興の業は益々行

尊氏の謀反
と吉野遷幸

詰り、尊氏の謀反によつて忽ち挫折するに至つた。かくて鎌倉より都に攻め上つた尊氏は、一度敗れて西海に退いたけれども、再舉上京して官軍を撃破し、この間に正成も湊川に戦死して果て、天皇は吉野に遷幸せられて、京都御恢復を御圖りにならねばならなくなつたのである。

吉野時代

しかし勤王の諸將の活動も

自は此後存外心事此謀國
千波園親王(子)は果し
軍忠(子)教旨非難有(子)彦隆
事深被(子)思食(子)右合(子)常
筆(子)村(子)回朝(子)取(子)守(子)守
作(子)山(子)名(子)云(子)要(子)言(子)根(子)能(子)半(子)又
主(子)有(子)子(子)在(子)其(子)日(子)下(子)江(子)軍
勢(子)未(子)冷(子)者
天(子)氣(子)如(子)此(子)以(子)達(子)也(子)何
百(子)十(子)五(子)日(子) 存(子)心(子)實(子)躬
り 勤(子)王(子)忠(子)臣(子)也

時に利あらず、北畠顯家・新田義貞等は相ついで死し、天皇は御雄圖も空しく、御痛憤の中に吉野の山中に崩御あらせられた。かくて引續く後村上第九十七代・長慶第九十八代・後龜山第九十九代の三天皇の御苦心、宗良親王・懷良親王等

の御活動、北畠・楠木・新田・菊池等の一族擧つての忠勤もその成果を見るに至らず、戦亂五十餘年に及んだ。茲に於て後龜山天皇は人民の困苦を察せられて、足利義滿の願を容れ、京都に御還幸になつて、皇位

後醍醐天皇
の御最期
後醍醐天皇
皇遺勅

戦亂五十餘
年

武家政治の
再興

を後小松天皇第九十代に譲り給ひ、武家政治の再興を御許しになつたのである。

参考 建武中興吉野時代の勤王諸將の活動は全國に及んでゐる。各、郷土附近にその事蹟を尋ね見よ。

中興精神の影響と女性の忠誠

かくの如く建武中興の大業は完

大日本首神國之神祖始基神永代傳
繪我國此等異類其類云云故神國云
也神代、豊事京千五百、秋、瑞穂國、天地用

成を見るに至らなかつたけれども、その大理想と諸將の忠勇義烈の精神は、深く國民思想にし

神皇正統
記(古寫
本)

加賀白山
比咩神社
所藏

後世への影
響
神皇正統記
と太平記

みわたり、永く後世に影響を及ぼした。殊に北畠親房が國體の精華を説き、大義名分を論じた神皇正統記、吉野時代の君臣の事蹟を流麗に述べた太平記等の書は、後世國民愛讀の書として廣く行はれ、楠公崇拜の風も江戸時代以來頗る盛になつて、やがて明治維新、王政復古運動の礎となつたのである。又この時代に於ける女性にも忠誠の

女性の忠誠
楠木正成の妻

観心寺本堂
大阪府南河内郡
瓜生兄弟の母

菊池武時の妻

志深く、忠貞兩全の健氣な行動に、その芳烈を永く後世に傳へてゐる者が少なくない。楠木正成の妻が、夫の最期の際に於ける正行への庭訓は最も有名であるが、夫の在世中は内助の功多く後顧の憂なからしめ、死後は正行・正時・正儀等の子弟を薫育して永く王事に盡くさしめた古今無双の良妻賢母と言ふべきである。新田義貞の部下であつた越前の瓜生保・同義鑑兄弟の母が、二人の戦死の報にも



悲の色を見せず、元來上の御爲にこの一大事を思ひ立ち候ひぬる上は、百千の甥子共が討たれ候とも歎くべきにては候はずと毅然たる覺悟を示して士氣を鼓舞し、菊池武時の妻が夫の戦死に當たり、その子武重に従容と遺訓して後、夫の辭世に唱和して自刃した如きも、何れ劣らぬ日本婦人の誇である。

参考 菊池武時夫妻の辭世唱和の歌。

故郷に今宵限りの命ぞと知らでや人の我を待つらん (武時)
故郷も今宵限りの命ぞと知りてや君の我を待つらん (妻)

第八章 室町時代と東山文化

室町時代 後龜山天皇御還幸の後はじめ正式に認められた足利氏の室町幕府は、その職制を大體鎌倉幕府に模してゐたが、この頃は最早各地方の守護地頭の勢力が強大になり、殊に足利氏が吉野時代に朝廷に對し奉つて自家の勢力を維持する爲に、部下の取締を寛大にしてゐたので、將軍の統制が充分行はれず、幕威ははじめから弱少なるを免れなかつた。初代將軍義満はこの弊風を除いて幕威の興隆に力め、榮華驕僭の限をつくしたが、その勢威は鎌倉時代に及ぶべくもなく、その後次第に幕政は權臣の專權に委ねられ、六代將軍義政に至つて益甚だしくなり、遂に應仁の大亂の勃發を見、爾來將軍の權威は全く地に墮ちて、戰國争亂の世の現出を見るに至つたのであ

幕威の漸衰

幕威の弱小

室町幕府の成立

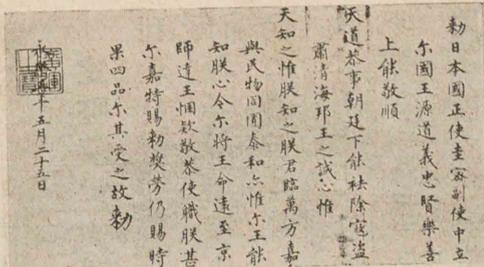
屈辱的外交

る。この間、義満が自己の利益の爲に、鎌倉時代の末から漸く盛になつた國民の海外發展を犠牲にして開始した明との國交は、大義名分を忘れて彼に對して臣禮を執り、頗る我が國體の精華を瀆したものであり、義政も續いて同じ態度を執り、その後も永く繼續せられたのは遺憾であつた。併しその爲に新しい文化の輸入が少なくなかつたことは注意すべきである。

對明外交の影響

門の國書

東山文化



東山文化と稱せられる。その特色とする所は、鎌倉時代と同じく武士の世でありながら、剛健雄偉の風が失はれて、數寄風流を嗜み、閑雅靜寂を好むやうになつたことであり、その間に支那元明の影響少な

東山文化

以上如く室町時代は内治外交共に遺憾な點が頗る多かつたが、義満が北山に金閣を建て、奢侈を極め、義政が東山に銀閣を建て、風流に耽つてゐたのに影響されて獨特の文化が起り、世にからず、且公武の關係が密接になり、地方士民の接觸の機會も多くなつた爲に、文化普及の傾向が漸く著しくなつた。而してこの時代の文化は現代に迄その流風を傳へてゐるものが頗る多いのは、特に注意すべきである。佛教は鎌倉時代以來武士の信仰を得てゐた臨濟宗が幕府との關係最も深く、尊氏の尊信を得た疎石^{夢窓}は後醍醐天皇はじめ御歴代の御歸依深く、爾來その門流が最も繁榮し、宋の例に倣つて南禪寺を上とする五山の制も備はり、幕府の顧問となつて政治外交に活躍した者も多かつた。これに反して眞宗・曹洞宗・法華宗等は一般國民の間に普及し、特に眞宗の兼壽^{蓮如}はその花々しい布教に宗祖に劣らぬ功績を擧げて教團の基礎を固めた。又本地垂迹説は、益發展して日本の神道を中心とする反本地垂迹説を生むに至り、一般に神道の理論的研究が盛になつた。學問・文學は、

東山文化の特色

東山文化と現代

佛教の普及

南禪寺
京都市東山区

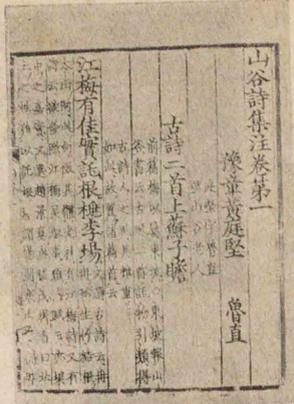


神道の發達

花々しい布教に宗祖に劣らぬ功績を擧げて教團の基礎を固めた。又本地垂迹説は、益發展して日本の神道を中心とする反本地垂迹説を生むに至り、一般に神道の理論的研究が盛になつた。學問・文學は、

鎌倉時代の末から禪宗僧侶によつて傳へられた朱子學によつて儒學の理論的研究が漸く起り、五山の僧侶を中心として漢詩文が流行して所謂五山文學として異彩を放ち、國文學では隨筆に徒然草、軍記物語に太平記が

五山版



名高く、新たに和歌から變じた連歌が流行して名人宗祇を出し、能樂の流行は謠曲の名作を續出せしめた。又鎌倉時代より盛

印刷と書道

になつた印刷は地方にも普及し、書道も吉野時代に出た尊圓法親王によつて和漢の粹を採つた青蓮院流がはじまり、後世の御家流の源

繪畫の諸流

尊圓法親王御筆蹟
御氣色之趣



となつた。美術工藝では、繪畫が元明の影響を受けて最も榮え、雪舟がこの方面で稀

建築と彫刻

世の名筆を揮つたが、大和繪には土佐光信が現れ、更に狩野元信は和漢兩派の粹を採つて新たに狩野派を開いた。建築では禪宗寺院が

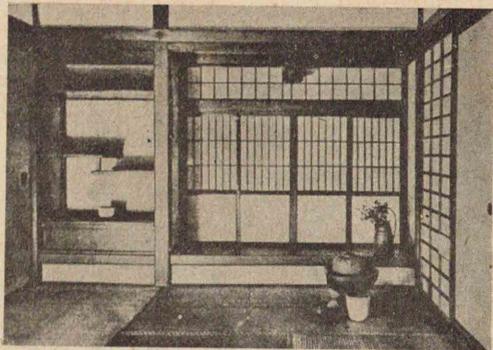
工藝品

最も多く營まれ、そして寢殿造を融合した金閣、更に禪宗僧侶の書院を加味した銀閣の如きものも出來たが、彫刻は佛像彫刻が衰へ、能樂の流行に伴つて能面が盛に造られるやうになつた。工藝品としては陶器、漆器、鐵器等の調度品の製作が頗る精巧

になり、風雅の趣を重んぜられたが、これは茶の湯の流行に基く所が多いのである。

風俗藝道の發達

この時代に至つて娛樂として最も盛になつたのは能樂と茶湯である。



茶室
銀閣寺東求堂
能樂・茶の湯

花道・香道

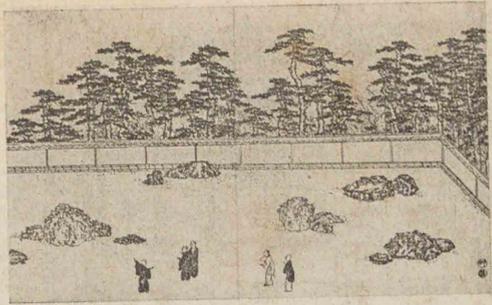
よつて方式が定められ、一般に流行するに至つた。其他花道、香道等もこの時代にその方式が定められたのである。衣服は武士の平服に素襖袴又は肩衣、半袴が用ひられるやうになり、女子には湯卷が一

衣服と食事

住宅と庭園

東山時代の
風趣

室町時代の
庭園
京都市龍
安寺、
相阿彌作



般に用ひられ、鎌倉時代に始まつた月代サカヤキが一般に弘まり、食事は三食が普通となつて強飯コハシより姫飯ヒメコシが常食とせられ、料理法や食事の作法も整へられるに至つた。住居には清楚な書院造が行はれて、現代日本家屋の濫觴をなすに至り、それに伴つて幽邃閑雅な庭園の造築が重んぜられ、これ亦現代にその風を傳へてゐる。かくて瀟洒セウシャな邸宅に幽靜な庭園を廻らし、屋内には茶室を設けて茶の湯を楽しみ、床の間・違棚には水墨畫を掛け、香を薰じ、花を飾り、骨董コトウを遊び、時に能樂狂言に興ずるのは、東山時代の好尚であつた。

参考 現代の生活中より東山時代の遺風を探れ。

武士道の衰
類と婦道

女性の嗜み 吉野時代以來漸く武士道が衰へ、一般に道義の廢頽も著しくなつたので、女子の風儀も亂れ勝にはなつたが、山名氏清の妻の如く、夫が戦死して二子が敗走したのを知るや、慨然として自刃

女子の嗜

し、臨終にも二子の不孝不義を罵つてやまず、侍女も亦主婦に殉じたやうな美談もないではない。又各種藝道の普及するにつれて、その習熟は日常の禮儀作法と共に女子の嗜とせられ、義政の妻富子の如きは婦徳に於ては缺くる所が少なくなかつたが、才氣煥發で各方面の嗜は頗る深かつたのである。

参考 小笠原流・伊勢流等の家元の起源もこの時代にある。

第九章 社會の革新と婦道の發達

戰國時代

戰國時代と下剋上

應仁の亂以後室町幕府の權威は全く地に墜ちて天下は麻の如く亂れ、群雄が各地に起つて所在に割據し、互に相争つて戰の絶間なく、所謂戰國時代となつた。かくて下剋上の風は到る所に見られ、將軍の權力は權臣細川氏に、細川氏の權はその家臣三好氏に、三好氏の權は更にその臣松永氏に移つた果は、松永氏が將軍第十一代を弑するに至り、各大名に於ても主家の權が家臣に奪はれ、

下剋上

道義の廢頹

庶民の擡頭

僧侶の反抗

子が父を壓し、弟が兄を凌いで勢を振ふ者も少なからず、一浪人から起つて關東の數國を占有した北條早雲等も現はれ、道義は全く地を拂つて、たゞ實力競争のみの世となつたのである。従つて庶民の困窮も著しくなつたが、下剋上の風は彼等の間にも及び、多數徒黨を組んで或ひは大名に反抗し、或ひは幕府に強訴するものあるに至り、これを土一揆と稱した。又庶民の間に最も弘まつてゐた眞宗一向宗と稱すも稱す法華宗の僧侶の中には、信徒を率ゐて一揆を起し、大名に反抗して教勢の發展に努めるものが現れ、これを一向一揆法華一揆と言ひ、加賀の一向一揆の如きは守護を攻め殺して群雄と對立する程の勢力を有するに至つたのである。

參考 下剋上といふことを家庭生活に當てはめて考へて見よ。

皇室の式微

皇室の式微と尊皇心の勃興 天下を舉げてかゝる有様であつたから、皇室の式微はその極に達せられ、御料所は横領せられて日々の供御にも差支へられ、御所内外の腐朽破損甚だしくなるも修理する

公家の窮乏と京都の荒廢

に由なく、朝廷の諸儀式は大方廢絶して御大葬御即位の如き大典すらも長く御延引の止むなき御有様であつた。従つて公家の窮乏も亦甚だしく、衣食に窮して地方に流寓する者も少なからず、京都の市街は絶間ない戦亂の爲に荒廢甚だしく、市民も離散して淋しい焼野原と化した所が多かつたのである。併し

皇室の尊嚴
仁慈

三條西實隆



公家の勤王

大名僧侶の勤王

かゝる式微の間に御位にあらせられた後土御門第百三代後柏原第百四代後奈良第百五代正親町第百六代の諸天皇は、何れも固く皇室の尊嚴を保たれ、深く御聖徳を磨き給ふて廣く國民に仁慈を垂れさせられ、萬世一系の皇統は微動だもせられなかつた。この間に於て三條西實隆、山科言繼トヨツネ等の公家は、身の困窮も忘れて東西に奔走し、大名寺院等の間に斡旋して皇威の回復を圖り、諸大名の中にも御大葬御即位の費を獻じ、皇居修理料を奉り、伊勢神宮の造營につくす等、尊皇の至誠を披瀝する者が多

女性の勤王

尊皇精神の
興隆

天下統一の
機運と尊皇
の精神

かつた。佐々木高頼・大内義隆・北條氏綱・今川義元・朝倉教景・上杉謙信・織田信秀・毛利元就等は、その主なる人々であり、本願寺光兼の如く僧侶で勤王の志厚かつた者もあつたのである。又伊勢慶光院の清順尼は、諸大名に説いてその獻金を得、永祿六年百三十年目に、荒廢した外宮の御遷宮を行ひ奉り、その弟子周養尼は師の遺志を繼いで同じく淨財を募り、天正十三年百十四年目に内宮の御遷宮を行ひ奉つて、女ながらも烈々たる尊皇敬神の至誠を發揮した。かくて幕府の衰退と皇室の式微は却つて朝廷と士民を親近させる機會を多くする結果となり、尊皇の精神は次第に天下に擴がるに至つたのである。

【参考】

皇室の式微尊嚴御仁慈等の事實に就き知れる所を想起せよ。

天下統一と海外發展

尊皇精神の興隆は、更に天下統一の機運を促進させたことが少なくない。即ち各地に割據した群雄は次第に有力な者に併合されて地方的統一を見るに至つたが、地方の統一に成功した大名は、更に都に上つて天皇を奉戴し、以て天下を安定し國

織田信長の
天下統一と
尊皇

信長朱印

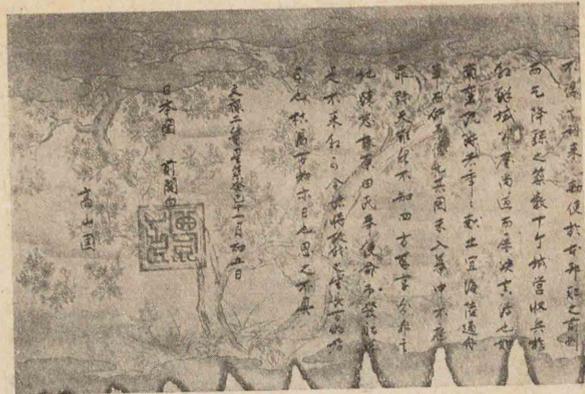
豊臣秀吉の
天下統一と
尊皇
秀吉朱印

秀吉の政治
と君臣和樂

内の統一を完成して叡慮を安んじ奉らんと志すに至つたのである。かくて今川義元・武田信玄・上杉謙信等がその途上に志を完うせずして倒れた後を承け、織田信長が先づ正親町天皇の



勅を奉じて上京し、皇威の復興に力めると共に、足利義昭第十三代將軍を逐つて有名無實の室町幕府を滅ぼし、安土に築城して着々天下統一の業を進め、國政の改革に邁進するに至つた。然るに信長が業半ばで本能寺の變に倒れたので、布衣ホウイより起つて信長の部將となつた豊臣秀吉がその後を承けて、遂に天下統一の大業を完成し、大阪・伏見に築城して武威を輝かせ、尊皇敬神の誠を盡くして御料の増獻、皇居の修理、伊勢神宮の造營等を行ひ、京都の市街を整へて帝都の偉容を盛にしたのである。而して秀吉も亦幕府を開かず、朝臣として關白に任じ、太政大臣となつて大政を輔け奉る



と共に、時勢に應じて各種の新制を立て、國政の改革、社會の平和につくし、後陽成天皇^{第七代}の聚樂第行幸には諸大名を率ゐてこれに従ひ、君臣和樂、公武一和の盛觀を盡くした。而も秀吉の氣宇は頗る大であつて、戰國時代の末に西洋人が渡來してその文化を傳へて以來、貿易が繁榮すると共に邦人の海外發展の盛になつた機運に乘じ、益、それを獎勵すると共に、進んで東亞諸國の一統をすら企てるに至り、朝鮮の役に明と戰つてその膽を寒からしめた上に、印度、呂宋、フィリピン、高山國^{臺灣}等にも服屬入貢を促したのである。かくて是等の雄圖は成果を見ずに終つたが、その精神は天下統一、國內太平の世運と共に、桃山時代の豪華雄大な文化の出現を促したことが少なくない。百年に亙つて鬱勃と發達して來た革新の



氣風は、こゝに燦然たる成果を見るに至つたといはねばならない。
都市の勃興と商業の發達 戰國時代以來群雄が各地に割據するに至るや、各自の實力を養ひ富強を致す爲に、領内の士民を愛撫して民政に留意する者が少なからず、東では北條武田、西では大内・毛利の諸氏等が最も有名であつた。而して從來領地に土着してゐた武士が主君の城下に邸宅を構へるやうになり、一般人民もこれに伴つて移り住む者が多く、所謂城下町が各地に發達し、北條氏の小田原、大内氏の山口は東西の双壁として繁榮を極めたのである。又鎌倉時代以來各種の職人・商人が次第に獨立して商工業に従事するに至り、彼等が製造・販賣の特權を獨占する各種の座が發達したが、庶民の擡頭に伴つて店賣・行商等の商業の發達も著しく、海外貿易の發達は

商工都市の
發達

門前町の發
達

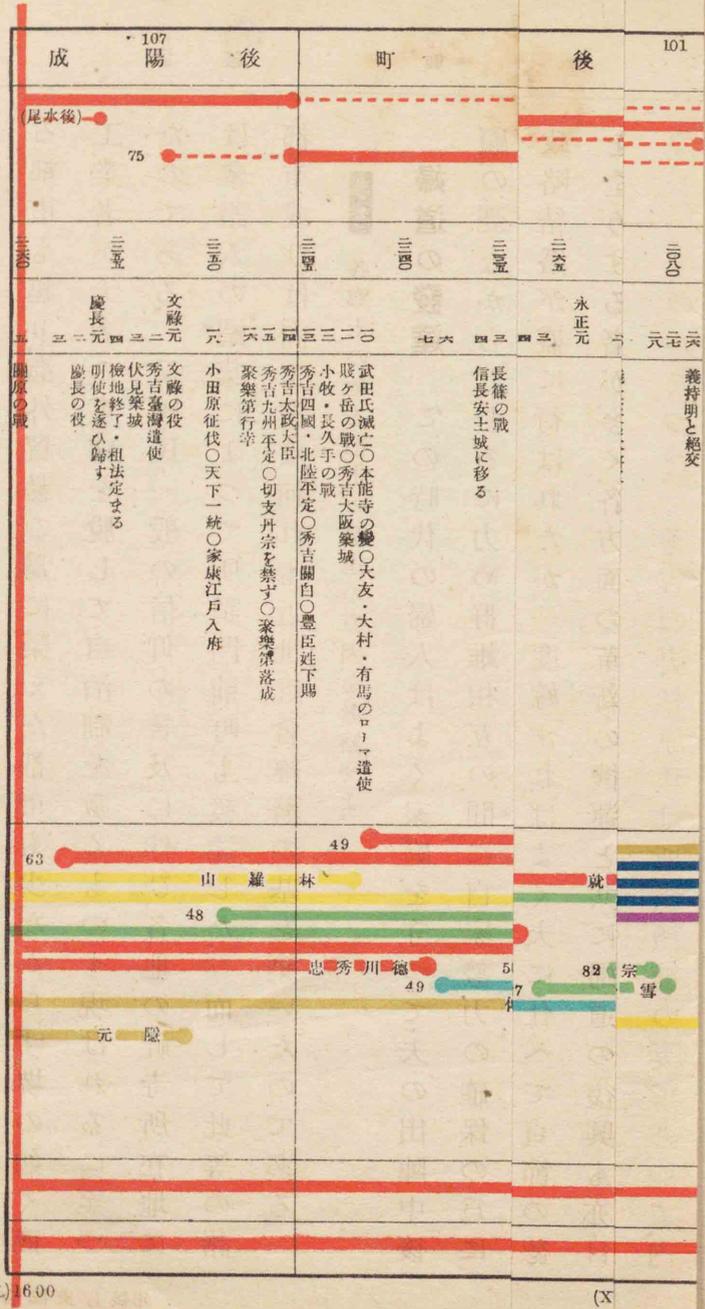
近世社會經
濟の基礎

一層商業取引を活潑にし、大名は城下町の繁榮を圖る爲に商工業者の税を免じて自由に賣買を許す樂市樂座の制も行はれ問丸問屋の替錢爲替の制度も發生した。かくて城下町の外に商工業を中心とする都市も起り、海外貿易の爲に榮えた都市も少なからず、堺の如く商工業者が大名の束縛を脱して自治制を敷くものも現はれるに至つたのである。又國民一般の信仰の普及に伴ひ、各地の社寺所在地には參詣人の蝟集によつて所謂門前町も發達した。而して此等の諸都市或ひは商工業は何れも近世社會經濟の基を築いたのである。

参考 各郷土の地方都市の發達の原因を考察せよ。

婦道の復興

婦道の發達 この時代の婦人はよく家庭を守つて夫の出陣中後顧の憂なからしむるに力め、群雄相互の間に自家勢力の確保の爲に政略結婚が盛に行はれたが、一度嫁すればよく夫に仕へて貞節の徳を全うする者が多く、各方面の革新の機運と共に婦道の復興も亦目覺しいものがあつた。秀吉の妻杉原氏は所謂糟糠の妻であつて、内

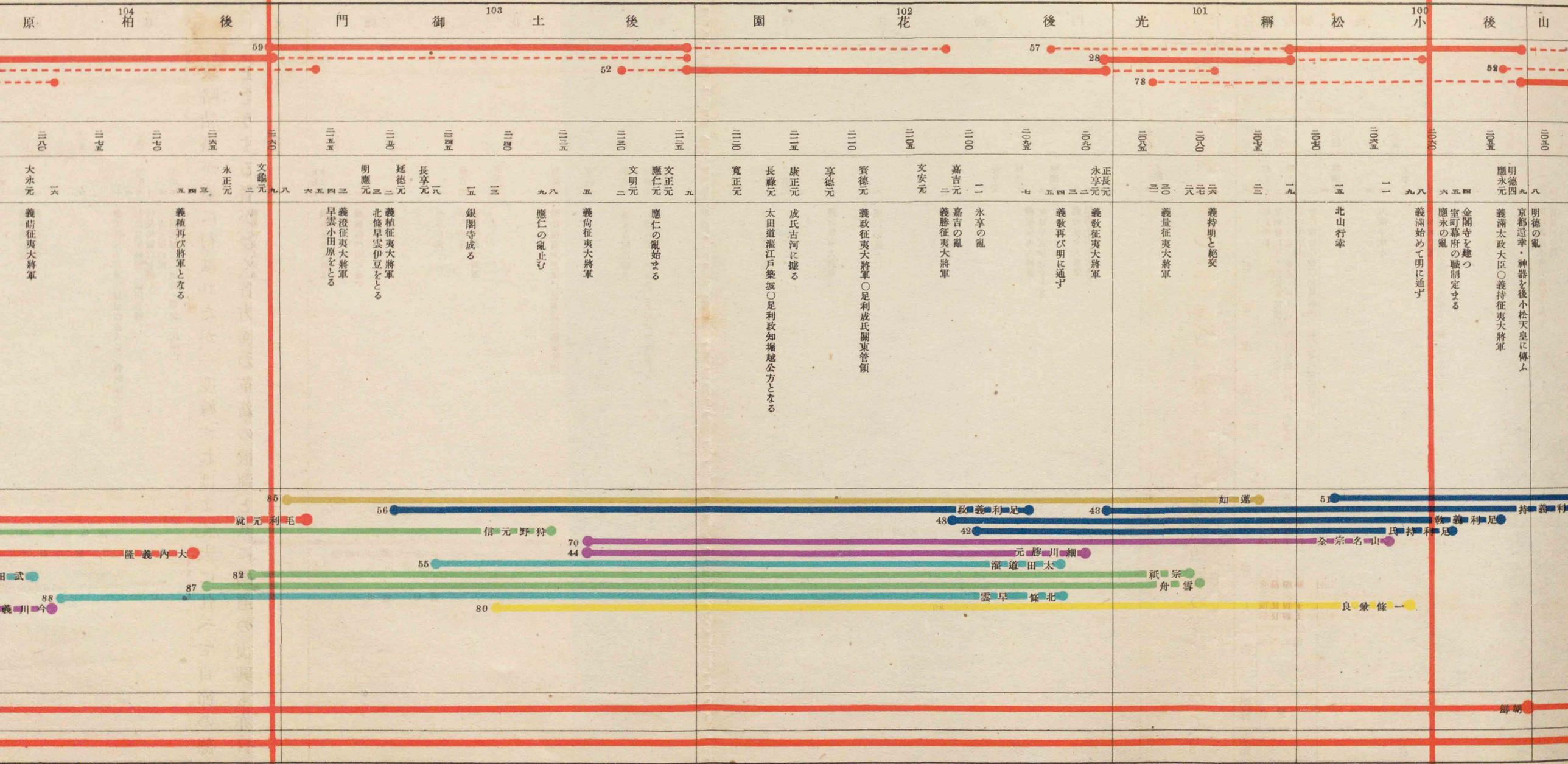


各郷土の地方都市の發達の原因を考察せよ

婦道の發達 この時代の婦人はよく家庭を守つて夫の出陣中後顧の憂なからしむるに力め、群雄相互の間に自家勢力の確保の爲に政略結婚が盛に行はれたが、一度嫁すればよく夫に仕へて貞節の徳を全うする者が多く、各方面の革新の機運と共に婦道の復興も亦目覺しいものがあつた。秀吉の妻杉原氏は所謂糟糠の妻であつて、内

中世第二期 建武中興より桃山時代

天皇	後醍醐	醍醐	村上	長祿	慶應	後龜山	後小松	稱光	後
1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341
建武中興	延元	興國	正平	天授	弘和	元中	明德	應永	北山
建武中興 足利尊氏反く官軍箱根ノ下に敗る 尊氏入京・西走・再入京○湊川の戦○吉野に御遷幸 金崎城陥落 越前・備前島の戦○和泉石津の戦○尊氏に幕府を開く	四條殿の戦 足利基氏關東管領となる・關東管領の始	天龍寺成る	足利義詮征夷大將軍と稱す 筑後川の戦	足利義満征夷大將軍を稱す	京都還幸・神器を後小松天皇に傳ふ 善滿大政大臣○義持征夷大將軍	金閣寺を建つ 室町幕府の職制定まる 應永の亂	義満始めて明に通ず	北山行幸	義教征夷大將軍 義教再び明に通ず
親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28	親良 28
房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37	房親 37
義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23	義隆 23
義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38	義隆 38
親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21	親宗 21
親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43	親宗 43
成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77	成木 77
高麗	高麗	高麗	高麗	高麗	高麗	高麗	高麗	高麗	高麗
支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那



北政所

助の功頗る多く、夫が位人臣を極めて自らも北政所の稱を賜つて後
も頗る謙讓であつて、夫にも昔の苦境を忘れて驕ることなきやう常
に戒め、夫の薨後は庶子秀頼を實子の如く慈しんで豊臣氏の家運長
久を念じ、出家して高臺院と稱せられ、當代女性の龜鑑とされてゐる。

武田勝頼の妻

細川忠興の妻



又武田勝頼の妻であつた北條氏康の女、
柴田勝家の妻であつた信長の妹小谷の
方等は何れも政略的に嫁せられたので
あるが、夫家の滅亡の際は共に夫に殉じ
て自刃して果て、才色兼備で名高い細川
忠興の妻は明智光秀の女であつたが、父
の叛逆の際自害を勧められたが、夫の命無くして死するは、三従の誠
に背くとして諾ぜず、關ヶ原の戦に石田三成が人質にしようとする
と、從容自殺して夫の活躍に後顧の憂なからしめた如きは、日本婦道
の花と云ふべきである。

【参考】 武田勝頼の妻の辭
黒髪（くろがみ）の亂れたる世ぞはてしなきおもひに消ゆる露（つゆ）の玉（たま）の緒

第十章 文教の復興と江戸時代

江戸時代と文化

徳川家康は秀吉歿後、關ヶ原の戦に天下の實權を握り、やがて征夷大將軍に任ぜられて幕府を江戸に開き、室町幕府滅亡後三十年にして武家政治を再興した。かくて子秀忠、孫家光三代に亘つて幕府の組織を整備し、慎重な用意を以て上朝廷を抑制し奉り、下諸大名を統制し、社會の安定を圖つて、封建制度の完成に努めたのである。而して戰國時代の末から頗る盛になつた國民の海外發展、諸外國との國交・貿易も、切支丹禁制の爲に朝鮮との國交、オランダ・支那との通商に限つて、鎖國を斷行し、江戸時代三百

武家政治の再興
徳川家康の筆蹟と朱印
封建制度の確立

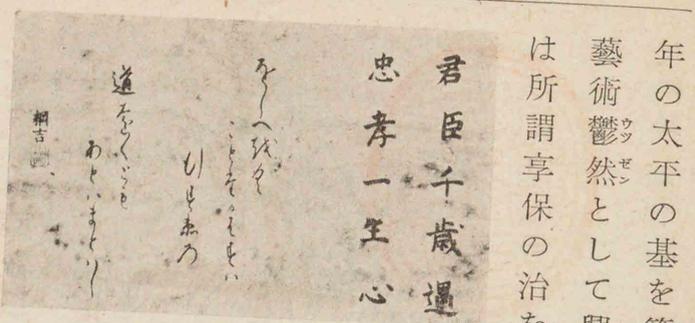


外國關係の中絶

元祿時代と享保の治

寛政・天保の改革と文化文政時代

綱吉筆蹟



年の太平の基を築いた。かくて綱吉第五代將軍の所謂元祿時代には文教藝術鬱然（ウツゼン）として興つたが、同時に文弱の風漸く萌したので、吉宗第八代將軍は所謂享保の治を斷行して政治・風教の肅正を圖つたのである。併しその後幕府の基礎は次第に弛み、家齊第十一代將軍の初世の松平定信の寛政の改革、家慶の時の水野忠邦の天保の改革も効なく、幕威は益々傾くに至つたが、文化は愈々爛熟して所謂文化文政時代を現出した。以上の如く江戸時代の文化は元祿及び文化文政の兩時代に最も盛であつたが、この間に外來文化は再び醇化せられて日本文化の獨立を見、且都鄙一般に擴がり、上下貴賤にも及んで、國民文化としての完成を示すに至つたのである。

【参考】 平安時代中期と江戸時代の文化の特色を比較せよ。

學問の發達と女性の貢獻 家康は早くから學問の獎勵に努め、藤

幕府の獎勵

文化の特色

り、砲術・兵學等の國防科學も蘭學によつて長足の進歩を見たのである。その他國史・國學等の研究も著しく

men leeren. 人 習	Ik wensch u goe 我 望 汝 吉 den dag myn heer. 日 若 我 貴 尊
Hy brengt gant 他 携 終	Ik ben u dienaar 我 者 汝 僕 者 臣
sche nagten met 我 者 汝 僕 者 臣	leefen door. 我 者 汝 僕 者 臣
Ik heb al myn 我 者 汝 僕 者 臣	Ouden zal men 我 者 汝 僕 者 臣
	eeeren jongen zal 我 者 汝 僕 者 臣

發達したが、これは次章に述べよう。かかる學問の發達には女性の貢獻も少なからず、益軒の妻東軒ハツ名は和漢の學や書道に通じて夫の學業を助け、井上通女ツツ田田氏氏の妻は歌文に長じ、儒佛に精しく、その

文才は紫式部に比せられ、荒木田麗女伊勢國慶徳は和漢學、國史等を學んで著述が頗る多い。

参考

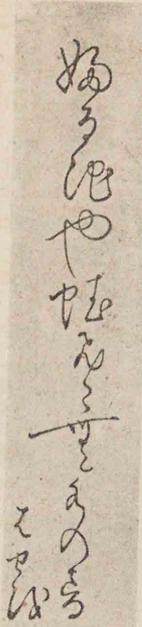
通女の東海紀行歸家日記、麗女の池の藻屑月のゆくへ等は著名である。

藝術の進歩と女流作家

學問と共に文學も頗る發達したが、特に

平民文學の興隆がこの時代の一大特長であり、且その中心が元祿頃は上方にあつたが、時代を降るに従つて江戸に移つた事も注意すべきである。前代の連歌の一變した俳諧は松尾芭蕉によつて大成さ

れて門人全國に及んだが、後與謝蕪村の出づるに及んで更に面目を一新された。芭蕉と並んで戯曲に近松門左衛門が出て淨瑠璃を大成し、小説は井原西鶴によつて所謂浮世草紙が創められ、何れも名聲を博したが、文化文政時代に教訓を主とした讀本ヨミカに瀧澤馬琴、諧諷を主とした滑稽本ワケモノに十返舎一九、式亭三馬等が出て最も持モチ囉ハヤされた。



滑稽本と前後して輕妙な滑稽を主とした狂歌、川柳も盛になり、前者に太田蜀山人、後

者に柄井川柳が最も名高く、廣く平民の間に歡迎された。古來盛であつた和歌も次第に復興して賀茂真淵は萬葉風を盛にし、香川景樹は清新な歌風を興して現代に迄その流風を及ぼすに至り、儒學の興隆は漢詩文をその餘技として盛ならしめたが、やがて詩文を専らにする者も現れるに至つた。美術は繪畫の發達が最も著しく、初期に狩野探幽が狩野派を大成し、土佐光起が大和繪を復興したが、その後

振はず、やがて續々新畫風の發展を見るに至つた。元祿頃尾形光琳によつて大成された裝飾畫はその第一であり、英一蝶ハチマタは獨り特異な風格を以て名高く、時代の風俗を描いた浮世繪も同じ頃菱川師宣に至つて著しく發達し、版畫として一般に普及された。かくて浮世繪版畫は益々精巧となつて錦繪を生むに至り、文化文政前後には鈴木春信・喜多川歌麿・葛飾北齋・安藤廣重等の名手を輩出し、美人畫の歌麿、風景畫の北齋、廣重は最も名高く、支那から傳はつた文人畫には池大雅・與謝蕪村等が傑出し、圓山應舉は寫生を重んじて圓山派を創め、その弟子吳春は文人畫を同化して四條派を起し、蘭學と共に西洋畫も傳はつたが、谷文晁は以上各流派の粹を採つて獨特の才筆を振つた。建築・彫刻には見るべき發達もなかつたが、陶器・漆器・織物等の工藝は産業的に發達すると共に、名工の輩出も少なくなかつた。又世の平和に伴つて演劇遊藝の進歩著しく、歌舞伎は出雲阿國イヅノクニが初めて一時女歌舞伎が盛になつたが、元祿頃より男優に名人多く現れ、淨瑠璃は



圓山應舉筆山水圖



葛飾北齋筆山下白雨



池大雅筆山水圖



六十余別名所圖會
志摩
日和山
善明侯

志摩

安藤廣重筆 鳥羽港

竹本義太夫の名調に近松の名作が物語られて名聲を博し、各種の小唄・舞踊の發達も著しく、これ等の樂器としては三味線が流布するに至つた。藝術各方面に於ける女性の活動も少なからず、歌舞伎の阿國は言はずもがな、俳諧には芭蕉の流を汲む伊勢の園女、江戸の秋色等について加賀の千代が最も名高く、和歌は眞淵の門下に三才女子・餘野子・茂子あり、幕末に大田垣蓮月・野村望東尼トニ等が高潔な志操を清純な歌に示し、池大雅の妻玉蘭は清貧の裡に夫の藝道精進を助け、自らも畫に一家を爲したのである。

参考 女流作家の一例

蜻蛉つり今日は何所まで行つたやら

千代女

宿かさぬ人の心を情にて朧月夜の花の下伏 (蓮月)

教育の普及と女子教育 學問文學の發達は教育の普及に負ふ所が多い。幕府は林氏の私塾を保護して綱吉の時湯島に移し、側に聖堂を建て、孔子を祀らしめたが、家齊の時官學として昌平坂學問所

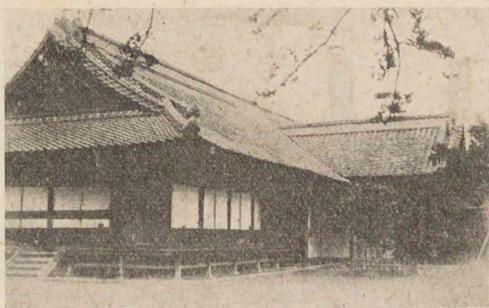
大名の藩學

と稱し、幕府教學の中心とした。各大名の藩學を建てるものも漸く多く、家齊の頃には二百餘校に上り、會津の稽古堂新館、岡山の開谷學新館校等は創立最も古く、水戸の弘道館、名古屋の明倫堂、萩の明倫館、高知

學者の私塾

水戸弘道館

寺子屋



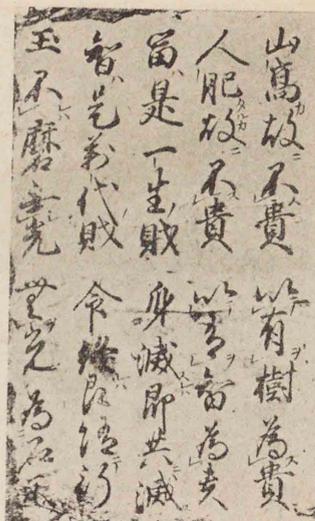
の教授館、鹿兒島の造士館等は殊に名高く、何れも藩士の子弟に文武兩道を授けた。又儒學その他に當たり、中には門下數千人に及ぶものあり、師弟の情誼は頗る濃やかであつた。平民の初等教育機關としての寺子屋は前代より漸く起つたが、この時代には都鄙一般に普及し、學科としては讀書ヨミカキ、算盤ソバンが主であり、教科書には實語教ソゴゴ、庭訓往來等が習字手本を兼ねて用ひられ、吉宗の時には六諭衍義リクンニ大意エニギを頒つて教科書に用ひさせた。印刷が進歩して本屋が多くなつたことも、學問教育の普及に大なる影響を及ぼしたことは言ふまでもない。平民

印刷の發達

女子教育

の女子でも寺子屋に通ふものが少なくなき、公武その他の上流階級の家に女中奉公に出ることは一種の教育と考へられて居り、茶花音曲裁縫等の藝能を仕込むことは女子の教養として重んぜられて居

實語教



を女子教育に盡くした。

参考 六諭衍義大意は清の康熙帝の勅諭六箇條の教訓に范鉉が註した衍義を更に吉宗の命で室鳩巢が假名交り文でその大意を説いたものである。

風俗の華美

衣服

風俗の變遷

衣食住は何れも前代の風の發達したものであるが、平和の永續と文化の爛熟の爲に漸く華美に流れた。衣服は色彩模

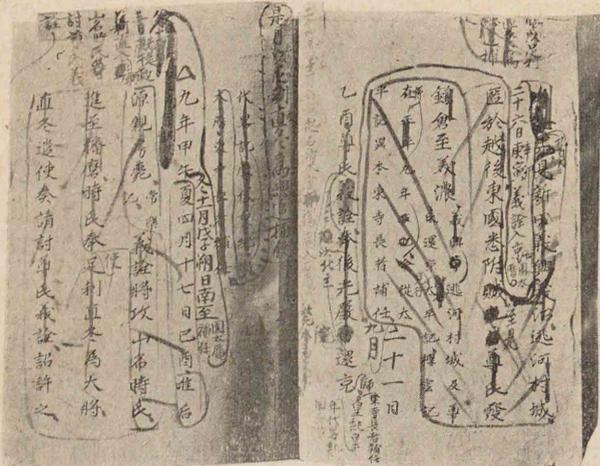


様等の發達著しく、早くも所謂元祿模様の流行を見、女子の衣裳は變化特に著しく、袖は長く帯は廣くなり、結髪には烏田鬻兵庫鬻等が現はれ、女髪結の職業も生ずるに至つた。食物の料理菓子等も、製法に工夫が凝らされて種類も多く、大體今日と同様になり、住居は書院造が一般になつたが、大名寺院等の邸宅に宏大なる庭園の造られたものが多し。而して幕府が世風の頹廢を懼れて屢發した奢侈禁止の令の如き大なる効果もなく、時代の下る程一般に華美贅澤に流れるやうになつたのである。

参考 羽織袴が一般に用ひられるに至つたのはこの時代からである。

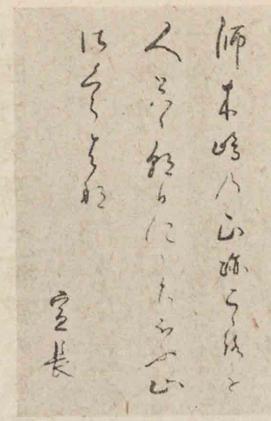
第十一章 勤王思想の發達と王政復古

勤王思想と學問 江戸時代學問の大宗であつた儒學は、元來尊王



賤霸の思想を含んでゐる上、最も普及した朱子學の重んずる所が大義名分であつたから、儒學者の中には勤王思想を鼓吹した者も少なくなかつた。古學の山鹿素行、陽明學の熊澤蕃山、朱子學南學派の山崎闇齋等は、その主なる人々であるが、特に闇齋は垂加神道を創唱して最も熱烈に勤王愛國を唱へ、弟子淺見綱齋も志を同じくし、その門流は崎門學派と稱せられて多くの志士を輩出した。更に國史の研究が盛になつたことは一層勤王思想を鼓舞したが、特に水戸の徳川光圀が學者を集めて編纂を始めた大日本史は、最も大義名分を重んじ、人心に影響する所頗る大きく、儒學の思想と國史の知識を基礎として水戸學の興起を見、維新前後の志士のその影響を受け

たものが多かつた。又山鹿素行の中朝事實、栗山潛鋒の保建大記、頼山陽の日本外史等も志士を奮起せしむること少なからず、吉野時代の悲史たる太平記は一般に流布して勤王思想の普及に與つて力があつたのである。又我が古典の研究に端を發して儒佛二道の外に我が國獨特の道あるを唱導するに至つた國學が勃興し、荷田春滿の



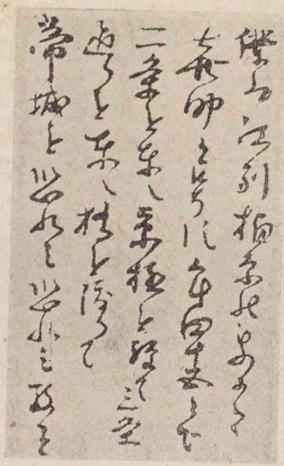
創唱について門人賀茂眞淵があらはれ、更にその弟子本居宣長は古事記を註譯した古事記傳を著して國學の基礎を固め、その弟子平田篤胤に至つては最も熱烈に惟神道カシナガタを唱へて復古神道一派を立て、維新の

志士に大なる感化を及ぼした。かくの如く勤王思想が各方面から鼓吹されると共に、王政復古の實際運動をなす者も現れた。實曆事件の竹内式部、明和事件の山縣大貳、藤井右門等はその先驅をなしたものである。かくて家齊の頃には高山彦九郎、蒲生君平等を輩出し、

水戸藩には藩主徳川齊昭ナリキをはじめ、藤田東湖アヒ、曾澤安等サハヤスが續出し、其の他にも志士が續々現れて尊皇愛國の思想が國內に普及するに至つたのである。

西力東漸と幕威の漸衰

楠公崇拜の思想も勤王思想の勃興に伴つて江戸時代から盛になつたのである。

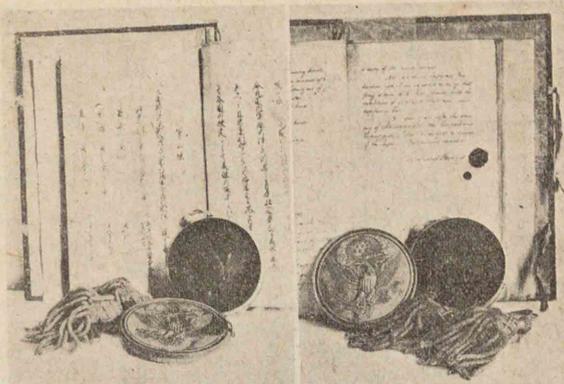


の間、世界の形勢は漸く一變し、戰國時代に初めて我が國に來航したポルトガル・イスパニヤが衰へ、オランダの勢も停滞し、これ等に代つてロシヤは北から、イギリスは南から、着々東洋侵略の歩を進めて次第に我が國に近づいて來た。然るに幕府はかゝる形勢に暗い上に確固たる信念も用意もなく、林子平が海國兵談を著して海防の必要を論ずればこれを罰し、間もなくロシヤが我が北邊を脅かすに至るや狼狽して防備に努め、イギリス軍艦が長崎に來て暴行し、攘

和親條約の締結と幕府の無力

日米通商條約書

通商條約の訂印と幕府の專斷



和親條約を結んでしまったのである。而も合衆國か進んで通商條約の締結を強要するに及び、これをも應諾して勅許を請ひ奉り、朝廷

が國論が盛になるや、沿海諸藩に攘夷を命じ、やがて蘭學者等が鎖國を難じて開國を唱ふるや、これを處罰したが、阿片戦役で支那がイギリスに敗れたのを知るや、再び攘夷令を緩める等、全く外交に對する無定見、無方針を暴露した。内外の情勢に追隨するのみの有様であつた。かくて嘉永六年更に東方からアメリカ合衆國が開國を強要して來るや、幕府は自ら諾否を決する能はず、回答を延期して上は朝廷に奏上し、下は諸侯の意見を徵するに至つて、益、その無力を天下に示し、上下の國論が攘夷にあつたのにも拘らず、翌年再びアメリカ合衆國に威壓されるや、忽ち屈從して

幕府に對する非難と對する大獄

櫻田門外の變と幕威の衰退

が國論の不統一と幕府の軟弱な態度を慮られて勅許あらせられざるや、進退に窮して井伊直弼を大老とし、專斷にも勅許なくして條約に調印してしまつた。當時の世界の大勢から見て、諸外國と和親通商するのは當然の處置ではあつたが、幕府の態度が單に外國の強要威壓に屈服したのみであつて、その無力を益、内外に暴露した上、策に窮して叡慮に逆ふ專斷を敢てするに至つた事は、幕府に對する國民上下の反感と非難の聲を一層大ならしめたので、直弼は遂に安政の大獄を斷行して反對者を抑壓するに至つたのである。併し國民の憤慨は益、甚だしくなつて、直弼は櫻田門外に志士の劍の露と消え、爾來幕威の衰退は一層著しくなつた。

参考 東洋史西洋史を復習して當時の東亞の大勢を考へよ。

國論の推移と大政奉還 從來外國との關係に就いては攘夷と開

國の兩論があり、國內の問題に關しては我が國體に基いて朝廷を仰がんとする勤王論者に對して、幕政を擁護せんとする佐幕論者も少

勤王・攘夷論の合流

なくなかつたのであるが、幕府の無力が益明かになるや、攘夷論と勤王論とは合流して天下の輿論を支配するに至つた。茲に於て幕府は衰退した幕威を恢復して國論を統一し、内外の國事に當たらんとして公武合體を策し、將軍家茂第十四代將軍に孝明天皇第一百二代の皇妹和宮親子和宮親子内親王の御降嫁を奏請し、天皇も内外の大勢を察せられてこれを勅許あらせられたのであるが、この事に當たつた老中安藤信正は、勤王論者の反感を買つて坂下門外に要撃されたのである。かゝる間に憂國の大名志士は次第に京都に集まり、有志の公家と結んで國事を圖るに至り、政治の中心は自然に朝廷に移つた觀を呈するに至つた。而して是等の公家・大名志士の間には公武合體を促進して國內の統一を圖り、以て外國に對せんとする穩和派と、あくまで幕府に攘夷を實行させて苦境に陥れ、以て王政復古を圖つて革新を斷行せんとする過激派とが自ら對立し、前者では薩摩の島津、後者では長門の毛利の兩氏が各頭目として上下の人望を集めてゐたのである。かくて

兩派の運動によつて朝議は數度の變遷を見たが、やがて國內の統一を第一とする穩和派が有力となつて、幕府は勅命を奉じて庶政を一新し、以て皇運を扶翼し奉ることゝなり、過激派は京都から遠ざけられ、その結果所謂七卿落の事件も起り、憤激した志士の各地に於ける討幕の舉兵ともなり、長門藩士の大舉上京によつて蛤御門の變をも惹起するに至り、幕府は是等の兵變を鎮壓すると共に、勅を奉じて攘夷討幕派の巨頭たる長門藩を征伐することゝなつた。然るにこの長州征伐は第一回は長門藩の恭順によつて事なきを得たが、第二回は最早出兵の幕命に従はぬ藩もあり、且幕軍は連戦連敗の醜態を暴露し、孝明天皇の崩御により、明治天皇第一百二代が大喪の故を以て戦を止めしめ給ひ、辛うじて結末を告げたのであつて、幕府の無力の全く救ふべからざることを天下に明かにしてしまつたのである。この間に公武合體論者も漸く幕府の頼むに足らざるを覺り、薩摩藩は長門藩と聯合して密かに討幕の計畫を廻らし、同志の朝臣とも聯絡して

大政奉還の奏請

王政復古

時代と女性

和宮の御事蹟

(一)家茂への御降嫁の内助の功

討幕の密勅を奏請するに至つた。然るに一方土佐の前藩主山内豊信は天下の形勢を察して平和の裡に局面の轉換を圖らんとし、將軍慶喜第十五代將軍に大政奉還をすゝめたので、水戸藩に生まれて大義名分に明るい慶喜は、直ちにこれに従ひ、固く意を決して大政奉還を奏請した。時に慶應三年十月十四日、恰も討幕の勅を薩長二藩主に賜はつたと同日であつて、かくて平和の裡に江戸幕府は滅び、鎌倉幕府以來七百年に亘る武家政治は止んで、天皇親政の古に復することゝなつたのである。

参考 平和の裡に王政復古を見るに至つた所以を深く考へよ。

和宮の御事蹟と女性の勤王 以上の如く内外非常の時代にあつて、女性の身でありながら、よく勤王愛國の誠を盡くしたのも決して少なくないが、和宮親子内親王の御事蹟の如きは、最も日本女性の龜鑑として仰ぎ奉るべきものである。宮が將軍家茂に御降嫁遊ばされたのは御年十六にましましたが、君國の爲に天皇の御命のまゝ

(二)家茂の御貞淑

村岡局

村岡局

野村望東尼

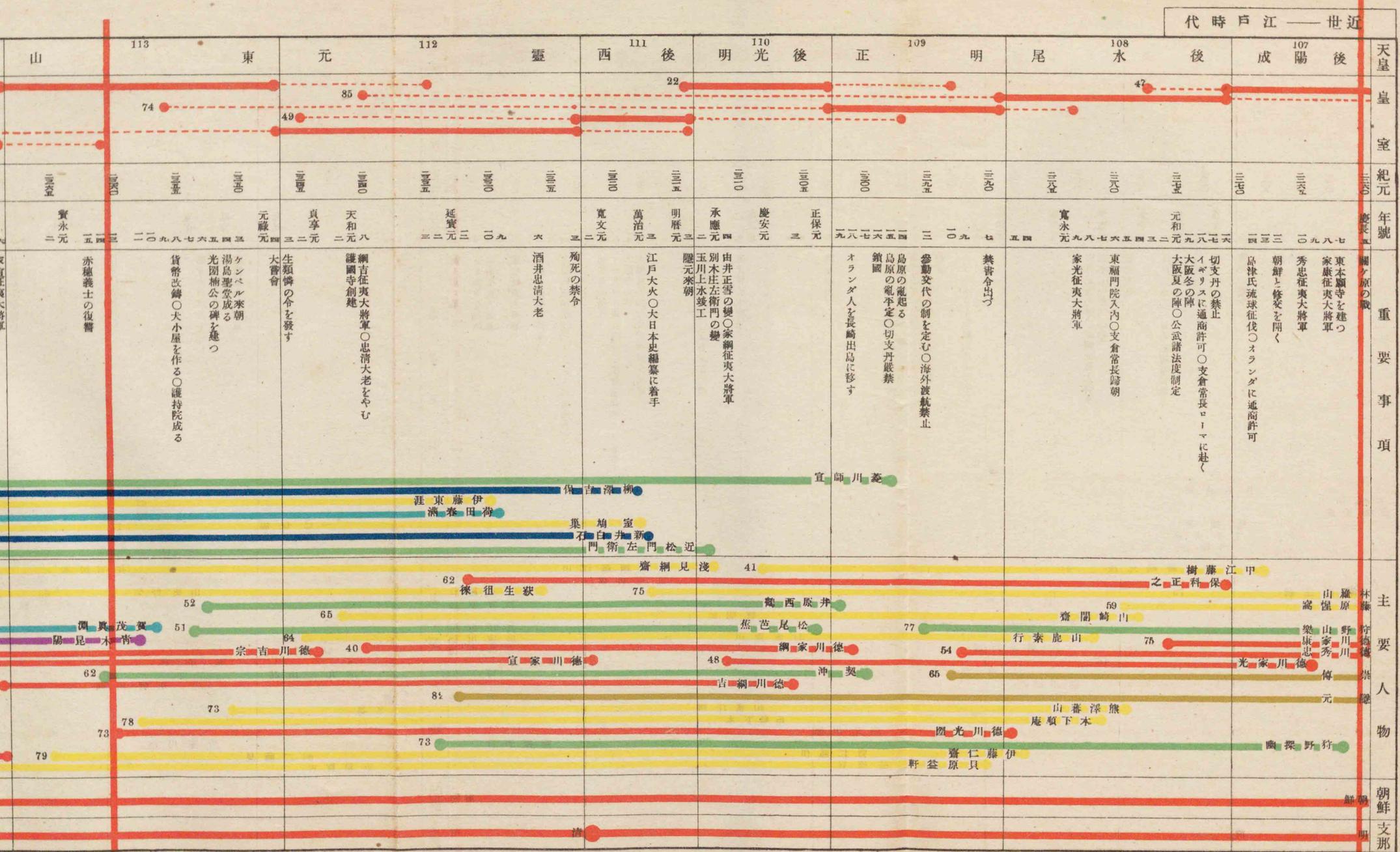


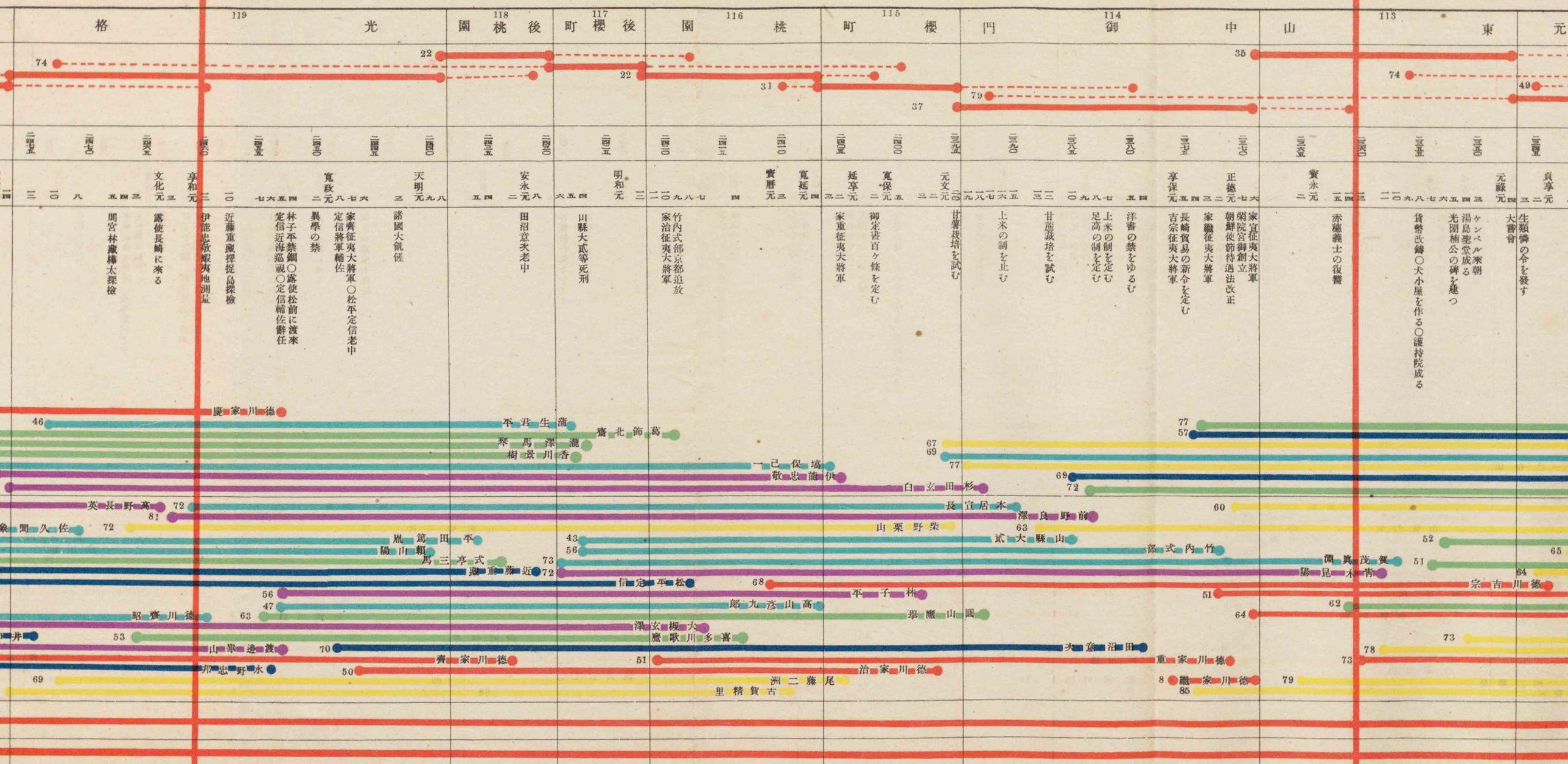
に決然東下あらせられ、爾來伉儷睦しく内助の功を積ませ給ひ、御降嫁後僅か五年にして家茂が長州征伐の爲に大阪城に滞在中薨去するや、御悲嘆一方ならず、間もなく御出家になつて靜寛院宮と申し奉つた。而して大政奉還後、頑迷なる幕臣の一部が叛亂して累を徳川氏に及ぼし、朝敵の名をうけるに至るや、深く婚家の存否を憂へて、幹旋につとめ、遂に徳川氏の存續を全からしめられたのである。かくて明治維新後は家茂の墓近くに移り住まはせられ、明治十年御年三十二歳にして數奇な御生涯を終らせられた。勤王の烈婦として最も著名なものには村岡局津崎、野村望東尼がある。村岡局は近衛忠熙左大臣の老女であつて、外はよく志士の間、に幹旋し、内は主忠熙の活動を助けて勤王の爲に奔走し、安政の大獄には七十四歳の老齡で江戸に禁錮せられ、望東尼は野村貞貫福士の妻で、女流歌人として

第十二章 明治維新と帝國憲法

王政復古の大號令

明治維新の精神 明治天皇は徳川慶喜の大政奉還を御許しになつて後王政維新の大成に深く叡慮を廻らせ給ひ、十二月九日に至





五箇條御誓文

明治天皇御銅像

新政の二大精神

つて王政復古の大號令を發せられ、從來の變態な攝關將軍の政治を全く廢し、神武天皇御創業の大精神に基づいて天皇御親政を遊ばされ、公武上下の別なく國民舉つて大政を翼賛せしむべき旨を仰出され、假に總裁ギ・議定ヂヤウ・參與の三職をお定めになつた。かくて翌年三月十

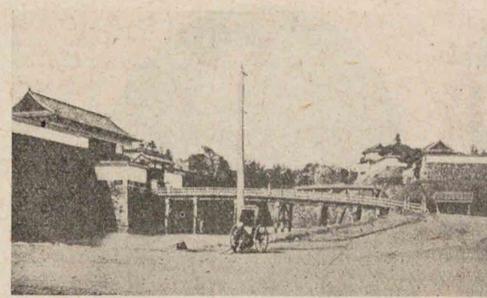


四日には、更に三職以下公武百官を率ゐて紫宸殿に御し、親しく天神地祇を祀つて五箇條の御誓ひを遊ばされ、我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨと仰出された。この大號令と御誓文こそ、王政維新の根本を宣布せられたものであつて、實に國體の本義に基く王政復古と世界の大勢に據る開國進取の國是は新政百般を貫く二大精神であつたのである。かくてこの年舊規に基き新

御即位と東京
京都

昭憲皇太后
の御坤徳

明治初年
の東京城



制を立て、御即位の大典を挙げ給ひ、明治と改元して一世一元の制を定められ、江戸を東京と改めて東京城を皇居と定め給ひ、爾來この新帝都を中心として内外百般の大改革が着々斷行されることになつた。東京御奠都後間もなく、天皇は一旦京都に御歸りになつて一條忠香臣右大の女美子ひなを皇后に御册立になつたが、皇后は御坤徳高くましまし、深く御内助の功を積ませ給ひ、天皇崩御の後まで御在世あらせられ、昭憲皇太后と諡せられた。

参考 五箇條御誓文を拜讀して、その御精神を拜察し奉れ。

内治外交の革新 改革實施の基として最も肝

要なことは、皇室を中心とする中央集權の確立である。そこで中央官制は明治二年大寶令に準じて神祇後省となり更に内務省に合併、太政の二官の下に民部後大藏に合併、大藏、兵部後陸軍海軍の二省に分つ、刑部後司法と改む、宮内、外務の六省を置き、その後文部、内務、農商務等の諸省が次々に増置され、時勢

中央集權確
立の必要

中央官制

地方制度

(一)八府
二十一縣

(二)版籍
奉還

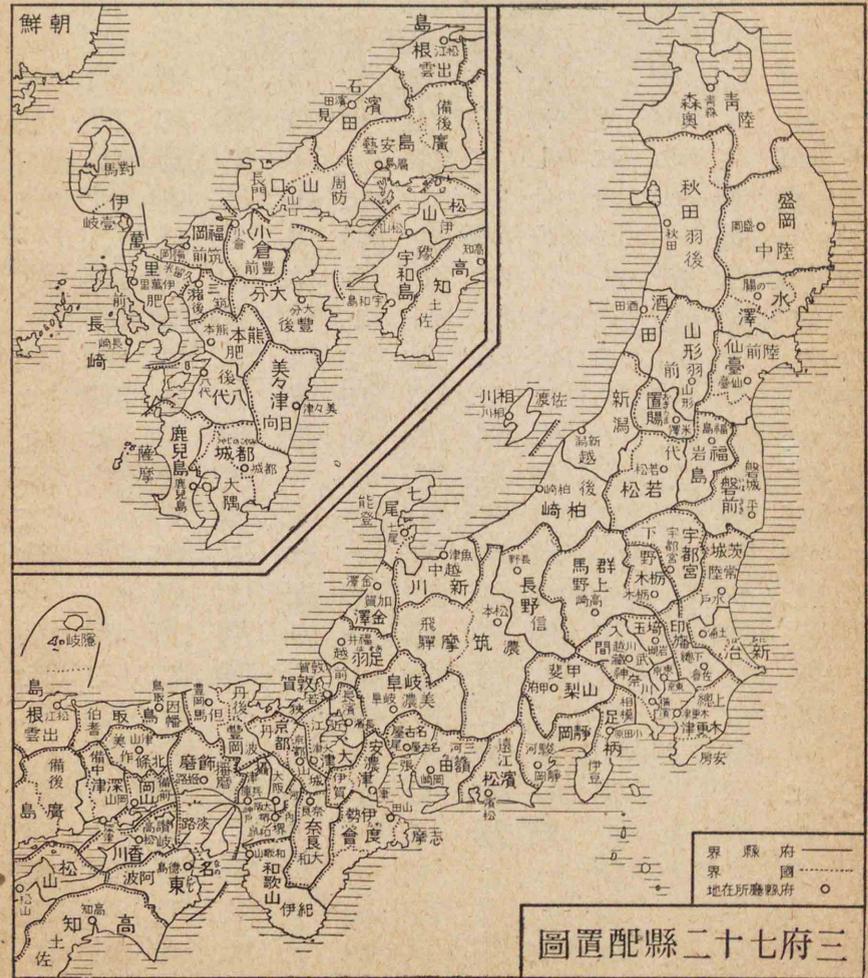
(三)廢藩
置縣

(四)三府
四十三縣
一十三道

に應じて種々部分的改正も行はれたが、太政大臣を政府の首班とする太政官制度は、明治十八年迄繼續せられた。地方制度は、王政復古の際舊幕府君臣の領地を朝廷の直轄として八府二十一縣を置いたのみで、二百六十餘の大名の領地は封建制度の舊態をなしてゐたから、中央集權の實を擧げるに頗る困難であつた。そこで木戸孝允、大久保利通等は諸藩主に斡旋して版籍奉還の機運を促進し、その結果、明治二年各大名は悉くその土地人民を朝廷に奉還したので、朝廷は舊藩主を知事に任じ、全國を八府二十六縣二百六十二藩に分つて各地方の政治を行はしめた。かくて封建の制は廢れて、全國統一の政治が行はれることになつたのであるが、久しきに亘る主従の情實は猶去り難く、且管轄の大小錯綜も甚だしくて、不便が少なかつたので、明治四年詔して廢藩置縣を斷行し、府縣を廢合して全國を三府七十二縣とし、府知事、縣令後知事にを新たに任命して、名實共に中央集權を完成するに至つた。その後地方の實狀に應じて府縣の廢合は屢

三府七十
二縣配置
圖

行はれた
が明治二
十二年三
府四十三
縣となり、
北海道は
初め開拓
使を置い
たが、後、
廳の管轄と
し、以て現
今に及ん
であるの
である。



三府二十七縣配置圖

外交の刷新

西洋諸國との
國交
東洋諸國との
國交

開國進取の國是に基いて外交も着々刷新せられ、西洋諸國に對しては明治三年より公使を派遣し、翌年岩倉具視等の特派して諸國を歴訪せしめ、以て友誼を厚くせられた。東洋諸國に對しては明治四年清國と交を結び、朝鮮とは維新早々から交渉してゐたが、當時攝政の地位にあつた大院君國王李熙の生父李昰應の保守頑迷な爲に目的を達せず、一時はその暴戾不遜の爲に征韓論も起り、西郷隆盛以下多數大官の辭職を見たが、あくまで平和の手段で誘導に努め、明治九年より國交を結ぶに至つた。かくの如く内治外交の革新

大院君



少なからず、その爲に一時は維新の精神を誤解する者も出來て、一部人心の動搖を來たし、明治十年、かゝる傾向は鬱積して遂に西南の役を勃發せしめるに至つたのである。しかしこの役後は國內は全く安定し、國民は上下擧つて維新の精神の實現發展に努力することゝ

改革の反動

國內の安定

なつた。

参考

諸事改新の際の國民の心得を考察せよ。

立憲制度の階梯

五箇條御誓文に「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決



スヘシ」と仰出だされた如く、衆議を
盡くして大政を輔翼させ、大憲を制
して國家組織の根本を宣明するこ
とは、新政の一大目的であつた。そ
こで維新以來諸藩より貢士後公議人
と改名を徵し、公議所後待詔院
と改名待詔局等を設けて士民の意思を聽くに努め、中央
官制にも早くより立法、司法、行政の

三權分立の制を加味し、明治八年には立法の府として元老院、最高司
法府として大審院を置いて、行政府たる太政官に對せしめたのであ
る。かくてこの年地方官會議を召集して施政を議せしめ、十二年は

じめて各府縣に民選議員による府縣會を開くに至つたのであるが、
この間に民間にも西洋政治思想の影響少なからず、種々過激な論議
も戦はされ、政治運動も漸く盛になつて來た。その最も主なるもの
は、征韓論で野に下つた板垣退助等が明治七年に建白した民選議院
設立の請願であつて、彼等は又愛國公黨を組織して自由民權の説を
唱へた。而して西南の役後かゝる運動は益、盛になり、板垣退助は、明
治十三年國會開設期成同盟會を作つて同志を赳合し、再び請願書を
提出したのである。かくの如く官民兩方面より立憲制度制定の機
運が次第に熟して來たので、天皇は明治十四年勅を發して明治二十
三年を期して國會を開設すべき旨を天下に宣布せられた。茲に於
て民間の論議も收まり、有志は各政黨を組織して國會開設の日に備
ふるに至り、板垣退助の自由黨、大隈重信の改進黨等は、その最も主
なるものであつた。この二大政黨はその後幾變遷を経たが、現在の政
友會は前者、民政黨は後者の傳統を承けてゐるものである。

國會開設の基礎

参考 當時の政治運動家の中には女性も加はつてゐた。景山英子、岸本俊子（後衆議院第一次議長中島信行の妻）等は最も著名である。

國會開設の準備 國會開設の爲にはその基礎となるべき憲法を



憲法記念館内部
立憲制度の調査と制度取調局

内閣制度及び宮内省の創立

しめられた。かくて翌年太政官を廢して内閣制度を創め、内務・外務・大藏・陸軍・海軍・司法・文部・農商務・逓信の九省を置き、内閣總理大臣は各省大臣を統率すると共に、國務大臣として内閣を組織し、以て天皇輔

内閣制度の發達

樞密院と憲法會議

地方自治制の進歩

時勢の進運と自治制

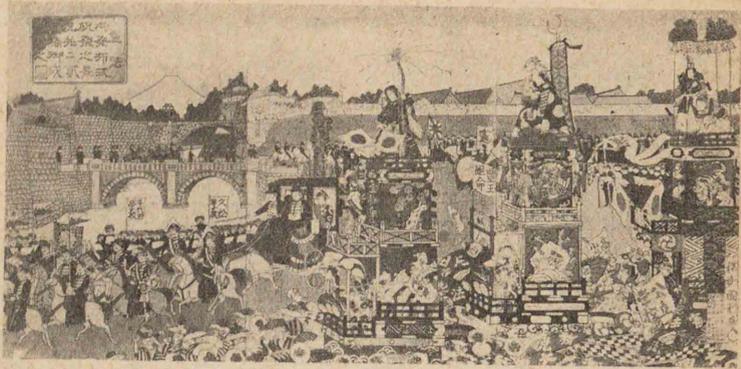
弼の責を負ふこととなり、別に宮内省を置いて皇室の事務を掌らしめ、博文は初代の總理大臣並に宮内大臣に任ぜられた。内閣制度はその後國運の發展と共に擴大せられ、順次鐵道・農林・商工・拓務・厚生の諸省が増置せられて、現在は十三省を數ふるに至り、最近は内閣參議の制も設けられたのである。ついで二十一年天皇御諮詢の府として樞密院が創設せられ、博文はその最初の議長に任ぜられ、天皇御親裁の下に憲法草案を慎重審議せられ、これを欽定あらせられるに至つた。中央官制と共に民政の基礎たる地方自治制度の發達にも注意し、維新の初め各町村に戸長を選任して公共事務を處理させたが、府縣會開設の翌年には區町村會法を制定し、二十一年更に市町村制を發布して市町村を完全なる自治體とし、二十三年には府縣制・郡制を發布して地方自治の擴大を圖つたのである。かくて自治制度は國民政治思想の發達につれて益進歩したが、時勢の進運につれて郡制は廢止され、市町村の合併は現今猶各地方に行はれつゝある。又

司法制度の基礎たる法典も、初め支那に倣つて新律綱要を頒つたが、明治六年西洋の法律を参考して改定律例を制定し、その後次第に改正を加へて現行の刑法、刑事訴訟法が制定せられ、民法、民事訴訟法、商法裁判所構成法等も次々に制定され、その後の改定も少なくないが、憲法發布の前後には一應法治國たるの體面を全うするに至つた。

【参考】 公民科の課程を参照して地方自治の精神を考察せよ。

憲法發布と帝國議會

かくて周到なる準備を経て、明治二十二年紀元節の佳辰を卜して憲法發布の大典は舉行せられ、天皇は宮中三殿に御親拜、皇祖皇宗に御奉告の後、宮中正殿に皇后御同列で出御、内外百官に勅語を賜はり、別に上諭を發して一般に御宣言遊ばされた。國民は上下擧つて歡喜してこの前古未曾有の盛典を祝し奉り、聖代の惠澤は國內に滿ち亘つたのである。曾て學んだ東西諸國の憲法が君臣抗爭、革命擾亂の末に漸く成つたものゝ多い中に、我が憲法が欽定に成り、而も天皇が率先してこの遵守を宣せられたことは、實に



【参考】

公民科の課程を参照し憲法發布の上諭を拜讀してその特色を考察せよ。

立憲政治の發達と女性の心得

その後議會制度は時勢の進運に

畏き極であつて、世界無比の國體の精華はここに燦然と咲き誇つたと言ふべきである。又憲法と同時に皇室典範も御制定になつたが、これ實に皇室に關する根本法であつて、天壤無窮の皇運は益、その基礎を固められたのである。かくて翌年七月第一回衆議院議員選舉を行ふと共に元老院を廢して貴族院議員を任命せられ、ついで帝國議會を東京に召集せられ、貴族院は伊藤博文、衆議院は中島信行が第一代の議長に任ぜられ、天皇御親臨の下に莊嚴なる開院式が擧げられ、我が立憲政治は名實共に備はるに至つたのである。

選舉法の改正

政黨の發達

我が立憲政治の特色

國民の責務

女性の心得

伴つて屢、改正せられ、國民の衆議院議員選舉權も次第に擴張されたが、大正十四年遂に所謂普通選舉法の制定を見るに至り、以て現今に及んでゐる。又政黨の發達も著しく、議會に於て堂々國策を論議し、或は政府を鞭撻し、或はこれを支持して來たが、國家非常の際には常に小異を棄て、舉國一致の行動をとり、我が國獨特の發達を遂げて現今に至つた。我が立憲政治は諸外國のそれの如く國民の權利擁護を目的とするものではなく、君民一體の國體に基いて皇國の隆昌を圖る爲に創められたもので、國民はこれに參與することによつて皇運を扶翼し奉り、忠君愛國の至誠を披瀝すべきである。而してこの立憲政治の基は選舉の公正にあるのであるから、國民は私利私慾を離れて公明正大、よく君國の爲に有爲の人材を選出するに努めねばならない。故に女性は選舉權を有せずとてこれを等閑視することなく、男子を助けて内助の功を積み、子女の教養に盡くして獨特なる我が立憲政治有終の美を全うするに一半の責務を有することを忘

れてはならない。

参考 公民科の課程を参照し立憲制度の女性としての實際の心得について廣く考察せよ。

第十三章 教育勅語と現代の文化

社會風俗の變革 五箇條御誓文に「舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道

ニ基クヘシ」と仰出されてゐるやうに、明治維新の改革は封建時代の陋習の打破少なからず、士農工商の階級が廢せられて、公家大名は華族、武士は士族、農工商は平民となり、その間に於ける職業・生活等の差別制限を廢し、平民の苗字、僧侶の肉食妻帶等も許された。又學制の頒布によつて國民教育の根本を確立し、徴兵令の發布によつて國民皆兵の古制に復し、國民平等に納税の義務を負はしめ、上下貴賤の別なく國民たるの義務を負ふと共に皇國の民たる幸福を享受することが出来るやうになつた。風俗習慣も日に新たになり、士民の帶刀

國民生活の平等

社會階級の打破

風俗習慣の變革

通信交通機
關の發達

車馬往來
の圖



は禁ぜられて、文武官の禮服・正服も洋服と變り、明治六年から太陽曆が實施され、五節が廢せられて祝祭日を新定され、男子の散髪も一般に行はれるに至り、衣食住悉く西洋の風が次第に取入れられるに至つた。交通通信機關の變革も著しく、鐵道の敷設、汽船、自轉車、馬車等の利用が盛になり、郵便・電信も實施されて、漸く千里比隣の世を現出するやうになつた。

参考 人力車は明治二年和泉要助等が工夫し、翌年官許を得て東京で使用し始められたものである。

識技能の輸入利用されたことは頗る多く、西洋人の來朝、邦人の海外

開國進取の
氣風

西洋模倣の
弊害

國粹主義の
勃興と新舊
兩派の對立
最初の女
子留學生

教學大旨と
幼學綱要



留學も少なからず、年少の女子で留學する者すらもあつたのである。而してその一面には極端な西洋模倣の風が流行し、物質文明の花やかさに酔つて實利主義に走り、自由平等の淺薄な思想に迷つて個人主義に陥り、徒らに新を追ひ奇を求めて我が國古來の醇風美俗を顧みぬ等、その弊害も年と共に著しくなつた。かくて明治二十年前後はその風が極度に達したため、これに對して國粹主義の運動が勃興して西洋模倣の風潮を非難攻撃する者も生じ、兩者の對立が激しくなつて國民思想を混亂させ、國民は適從する所に迷ふ有様になつたのである。早くよりかゝる弊風を憂慮し給ふた天皇は、明治十二年教學大旨を頒たれて、教學ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ知識技能ヲ究メ、以テ人道ヲ盡スハ我祖訓國典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ」と仰出だされ、ついで幼學綱要等を編纂せしめて思想

教育勅語御
下賜

の善導に努めさせられた。かくて更に新舊思想の混亂が國民の歸趨を迷はすに及び、明治二十三年十月、教育に關する勅語を下賜せられて國民道德の根本を御訓しになり、古今に通じて謬らず、中外に施

模倣より獨
創へ
昭憲皇太
后華族女
學校行啓



して悖らぬ國民の大道を御示しになつたのである。かくて國民は漸く據る所を明かにせられ、一般文化は次第に模倣より独自の建設に向ふやうになつた。

参考 教育勅語を奉讀してその御趣旨を察し奉れ。

教育學問の進歩 文化發展の基

礎たる國民教育は學制頒布以來日進月歩の勢で發達し、小學校の就學歩合は十割に垂んとして世界に稀な成績を示し、中學校・高等女學校は各府縣に限なく設けられ、高等學校も官公立併せて三十に近く、

普通教育の
進歩

専門教育の
發達

是等の教育者養成の爲には師範學校・高等師範學校・文理科大學等が次々に設立せられた。高等専門教育機關としては東京帝國大學が最も早く出來、その後京都・東北・九州を初めとして帝國大學八を數ふるに至り、實業教育の爲の中等専門の諸學校も多く、單科大學も各地に出來、女子高等専門學校の設立も次第に多くなつた。又各種各程

私立學校の
發達



度の私立學校の設立も少なからず、特に福澤諭吉の慶應義塾、新島襄の同志社は東西に對立してその設立最も古く、大隈重信の早稻田大學もこれ等と比肩して多數の人才を輩出せしめてゐる。女子の教育家も少なからず

下田歌子

女子教育家

皇室の御獎
勵

現はれたが、津田梅子・下田歌子等は特に名高い。教育御獎勵の爲に天皇皇族等の諸學校に行幸啓遊ばされることも屢、あつたが、昭憲皇太后は女子高等師範學校・女子學習院に行啓遊ばされた際、御歌を御下賜になり、永く校歌として奉唱されてゐる。教育の進歩は自然學

西洋學の流

独自の研究の發達

女子の學者

學問研究機關

問の發達を促し、從來その中心であつた漢學に代つて西洋諸國の學問が最も盛になつた。而してはじめは翻譯模倣の風が著しかつたが次第に独自の風を發揮し、人文科學では日本の特長が強調され、自然科學では獨創的研究で西洋の學者を凌駕する者も現れ、女子の學位を授與される者も次第に多くなつた。而して是等學問研究機關としては各大學の外に各種の研究所以も次第に多くなり、帝國學士院は權威者を集めて學界を指導してゐる。

参考 獨創的研究に名高い學者で知れる者を挙げよ。

文學の革新
(一)翻譯
小説

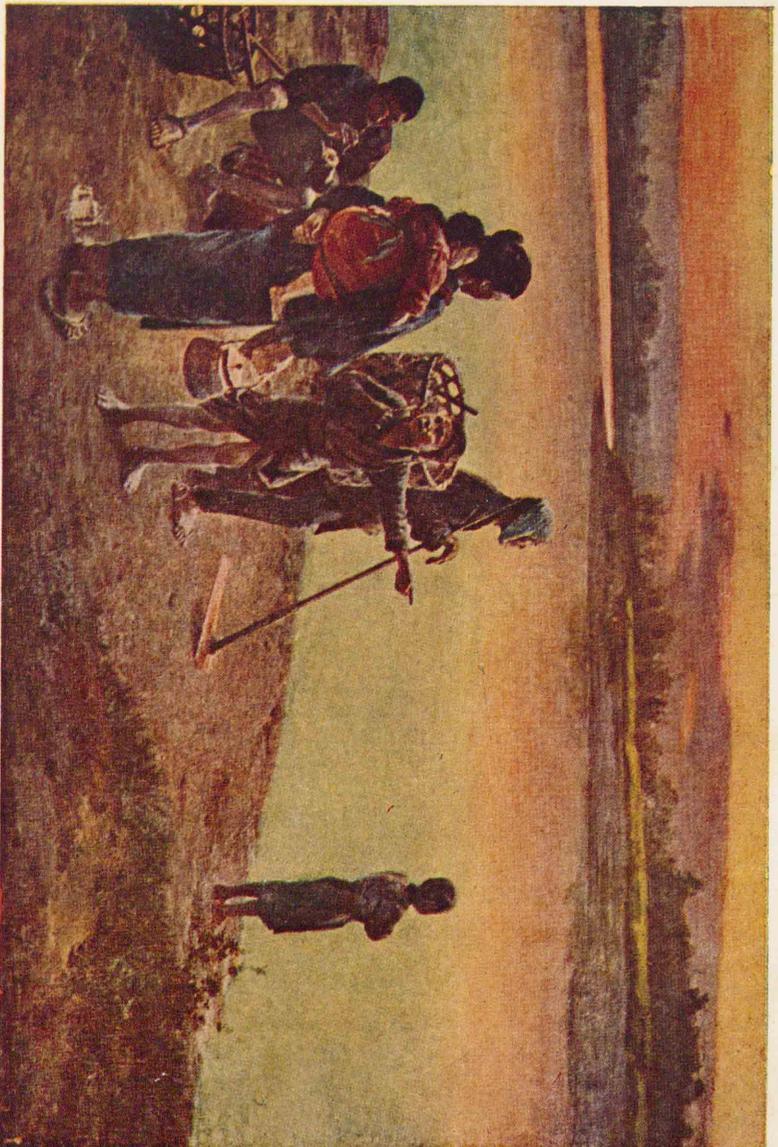
藝術の發達

文學も西洋文學の影響多く、坪内逍遙はイギリス文學、森鷗外はドイツ文學の移植に功あり、やがてロシヤ・フランス等の文學も盛に翻譯されて文壇の面目を一新するに至り、小説では尾崎紅葉、幸田露伴等の名匠を出し、ついで島崎藤村、夏目漱石等の文豪の輩出を見た。評論では三宅雪嶺、高山樗牛等が早く名聲を馳せ、古い傳統を誇る和歌は落合直文、與謝野寬、正岡子規等によつて革新され

(二)評論
詩歌



青綠山水圖 野口小齋筆



(暮夕の頭渡) 筆作英田和

(一) 演劇

(二) 女子の貢獻
藝術の保護
獎勵

制されたが、從來洋樂のみを教へてゐた東京音樂學校でも最近邦樂が正科に加へられるに至つた。演劇は從來の歌舞伎の外に西洋劇が輸入されて面目を一新したが、この方面では坪内逍遙が最も功勞がある。是等音樂演劇等の演出には女子の貢獻が頗る多い。藝術特に美術に對する獎勵には早くより文部省の展覽會が開催されてゐたが、最近文學・美術等の權威者を集めて帝國藝術院が創立され、文化勳章も制定された。

【参考】 諸子の知つてゐる明治時代の藝術作品の主要なるものを挙げよ。

女性と文化及び社會

教育の普及と共に、男女教育の差別は殆どなくなり、女子高等専門教育の門も開かれるに至つたので、女性の活動は頗る自由になり、前述の如く各方面に女流の人才を輩出するに至つた。而も時勢の進運は文化の方面のみならず、社會經濟の各方面にも女性の活動



奥村五百子
女性の文化
活動

女子と社會
經濟

女性と家庭
生活

最後の乃木
大將夫妻

が要求され、早く愛國婦人會の創立者奥村五百子の如き人才も現れ、



教育慈善事業、工場病院等に於ける多數女性の貢獻は近來特に注目せられつゝある。しかし家族制度を特色とする我が國に於ては、女性本來の活動舞臺は依然として家庭にあるのであるから、教育によつて得た高き教養をこの方面に發揮し、婦道を全うするの覺悟を忘れてはならない。乃木希典（陸軍大將）の妻靜子の如きは、現代女性の龜鑑

となすべきものである。

【参考】 修身公民家事裁縫等の諸課程を参考して、現代の婦道に就いて考察せよ。

第十四章 現代の大勢と女性の覺悟

世界平和と我が國の貢獻 明治維新以來我が國が最も力を用ひ

東洋平和の
確立

(一)朝鮮
の保全
と日清
戦役

(二)日英
同盟と
日露戦
役

(三)國際
地位の
向上と
韓國の
合併

て來たのは、東洋平和の確立である。朝鮮の獨立保全に對する努力はその第一であつて、明治十五年十七年の變等に多大の犠牲を拂ひながら、朝鮮を屬國視する清國の勢力を次第に抑壓し、遂に明治二十七八年日清戦役によつて彼を屈伏せしめた。ついでロシヤが極東侵略の野心を伸ばし來るや、三國干涉の屈辱を忍んで國力の充實に努め、明治三十三年北清事變の起るや、列國と協同して清國の内亂鎮定に盡力し、イギリスが我が實力を頼つて同盟を求め來るや、これと盟約して清韓朝鮮は明治三十年韓國と改稱した兩國の領土保全を圖り、ロシヤが清韓兩國を壓迫するに至るや、決然立つてこれを膺懲し、その野心を挫折せしめた。かくて我が國が世界八大強國の一となり、東洋の盟主たるの地位を占めるに至るや、諸國は相ついで我が國との修交を固くするやうになり、日露戦役以來保護國とした韓國が、我と合併を希望するに至るや、明治四十三年これを實行して皇室の御稜威を彼の地に迄遍く及ぼし、以て東洋平和の基礎を確立するに至つた。かくて我

世界平和への
貢獻

(一)歐洲
大戰と
國際聯
盟

(二)ワシ
ントン
會議と
軍備制
限

國土國民の
増大
經濟力の増
進

が國は次第に世界全體の平和に大なる役割を演ずるに至り、大正三年歐洲大戰が勃發するや、イギリスの請を容れてこれに参加し、聯合國側の戦局の發展を容易ならしめ、パリに列國講和會議が開かれるや、五大國の一となつて樞機に參じ、爾來國際聯盟常任理事國の一として世界平和の促進に努めた。ついで大正十年軍備制限の目的でワシントン會議が開かれるや、三大國の一となつて會議の中心となり、多大の犠牲を拂つてその條約を成立させ、爾來數次の軍備制限會議にも常に參加して世界永遠の平和促進に惜みなく誠意を披瀝して來たのである。

國力の増進と國內情勢の變化

以上の如き我が國際地位の向上は、明治維新以來、飛躍的に發展した我が國力に基くものである。即ち明治初年に比して現今の領土は約二倍、人口は三倍に垂んとするに至り、商工業の發達は海外貿易を促進し、明治元年三千萬圓に達しなかつた貿易額は最近昭和十一年に五十四億五千萬圓を突破する

盛況を見るに至つた。國家財政の膨脹もこれに比例して著しく、明治初年三千万圓前後であつた歳出入は、昭和十二年豫算に二十八億圓、別に支那事變費二十四億圓を計上して猶餘力を存するに至つた。軍備は徴兵令實施後七師團はじめ額であつた陸軍が、大正の初に二十一師團となり、明治五年一萬四千噸に過ぎなかつた海軍は昭和六年七十萬噸を突破する勢を示し、陸海軍とも新兵器新戰術の研究が着着進み特に航空兵力の躍進は目覺しきものがある。しかしかゝる國力増進の一面には憂慮すべき問題も少なからず生じ、國債は百億の巨額を超え、領土の増大は最近一億に垂んとする勢を示すに至つた人口の増加に伴はず、經濟の進展に伴つては勞働・小作等に關する難問題の續發を見、經濟の變動は都市に失業者を増し、農村の疲弊を著しくするに至り、是等の社會經濟問題に聯關し、且西洋諸國の影響を受けて種々國情に反する不穩過激な思想の流行を見るに至つたのである。而して是等諸問題の解決には政府をはじめ國民識者が

舉つて努めつゝあり、貴賤貧富を問はず一視同仁なる有難き皇室の御仁慈は各方面に及んでゐるのであるが、未だ充分なる解決には到達してゐない。

國際情勢の真相と滿洲事變

又歐洲大戰以後世界平和を目的とする幾多の國際會議が開かれ、國際協調主義が唱へられたのであるが、かゝる主張は廣大な領土、豊富な資源を有する西洋老大國の自己保全の野心に基くものが多く、従つて弱小國や新興國には不利益少なからぬ矛盾を藏してゐた。そこでイタリー・ドイツ等の如く國民主義を強調して國家の復興を企てる者も現れ、ロシヤには過激なる勞働者獨裁を主義とするソビエツト聯邦が出来、危険な共產主義を世界に宣傳するに至つた。是等諸國の間に伍して國際協調の責を盡くすと共に、建國以來常に内亂を繰返して基礎の固まらぬ中華民國に隣保共同の誠を致し、以て東洋の平和を確保しつゝ、世界の平和に貢獻し來たつた我が國の立場は、頗る困難なものがあつた。然る

に中華民國は我が國の誠意と苦衷を理解せず、或ひは西洋諸國の老
獪な煽動に乗り、或ひはロシヤの危険な宣傳に動かされ、我が國を敵
視して國內に排日運動を醸成せしめ、特に滿洲方面に於てその氣勢
を著しくするに至つた。かくて昭和六年九月、その軍隊は遂に我が
南滿洲鐵道破壊の暴舉を敢てするに至つたので、隱忍自重してゐた
我が國も止むなく蹶起して彼の軍隊を驅逐し、更に翌年正月上海に
排日運動が激發するや、この方面にも兵力を急派して國威の維持を
圖り、所謂滿洲及び上海事變を生じたのである。この間に滿洲には
中華民國より獨立して滿洲國が起り、支那古來の王道主義を掲げて
東洋平和の確立に邁進せんとするに至つたので、我が國は列國に率
先してこれを承認し、ついで防守協同の盟約を結んでその建國の大
業を翼賛することゝなつた。然るに中華民國は、國際聯盟にすがつ
て我が國を中傷讒誣するに至り、聯盟も亦それを信じて我が國の主
張を無視する態度に出たので、我が國は止むなく自主獨立の立場よ

り公正なる世界平和の完成に邁進せんと決意し、遂に昭和八年三月
敢然聯盟を離脱し、ついで軍備制限會議とも別を告げたのである。

世界形勢の變化と支那事變

滿洲國はその後着々堅實なる發展

を見、最近ドイツ・イタリー兩國もこれを承認して各條約を締結し、次
第に國際的地位を確立しつゝある。然るにソヴェット・ロシヤは滿
洲建國以來不穩の行動益、著しく、盛に共產主義の宣傳を企て、その策
動は全世界の平和攪亂の危惧を著しくするに至つたので、昭和十一
年我が國はその共同防衛の爲にドイツと協定を結び、進んで世界各
國に参加を奨めた結果、翌年イタリーの加入を見、新しき世界平和の
樞軸たらんとしつゝある。一方、中華民國國民政府は益、抗日、排日の
態度を濃厚にし來たり、誠意を以て隱忍する我が國を侮り、昭和十二
年七月その軍隊は北京郊外に於て我が軍に不法射撃を加へるに至
つたので、遂に北支事變の勃發を見たのである。而も續いて彼等は
上海方面に於ても大軍を擁して我が軍民を危殆キダイならしむるに至つ

たので、我が國はこの方面にも軍隊急派の必要に迫られ、遂に支那全體に亘る東洋永遠の平和確立の爲の聖戰を起さざるを得なくなり、北支事變は支那事變に發展することゝなつた。爾來一年有餘、我が軍は陸海空の優秀果敢なる勢力を以て到る所敵を制壓撃破し、開戦數ヶ月にして北部は綏遠、察哈爾より河北、山西、山東の諸省を占據し、中部は上海を取り、首都南京を奪つて、敵根據地を漢口に後退せしめ、南部は廣東、厦門等の要地を或ひは爆撃し、或ひは占領して敵膽を寒からしめ、全部の海上、大半の空中を全く我が手中に收め、十三年五月徐州に大捷して後は、江蘇、浙江、安徽の諸省にも勢を張り、漢口の攻略も近きにある勢を示すに至つた。然るに國民政府は猶迷夢より醒めず、長期抗戰を呼號して頑迷な抵抗を續けて居り、その結末は全く豫斷を許さぬ形勢にあるので、我が國は外に堂々の陣を進めると共に内に銃後の守を堅くし、國民精神の總動員を行ひ、國家總動員の體制を鞏固にして、聖戰の究極目的達成に邁進しつゝある。而もこの

間に於て我が占據地域には、中國國民の有志により、早くも北京に臨時、南京に維新の兩假政府が生まれ、我が國と協力して東洋平和の完成に努めつゝあるが、イギリス、フランス、ロシア、三國は陰に陽に國民政府を後援しつゝ、事毎に我が方を壓迫せんとする態度を持續して居り、アメリカ合衆國の態度も明かならぬものがあるので、今や我が國は世界屈指の富有強大なる數國を相手として獨往邁進せねばならぬ形勢になつてゐるのである。

我が國の使命と女性の覺悟 上述の如き内外の形勢を大觀すれば、現下の日本が正に有史以來の重大な難局に當面してゐることは自ら明かに理解されるであらう。しかし神武天皇御奠都の勅に上、則答乾靈授國之德、下、則弘皇孫養正之心、然後兼六合、以開都、掩八紘、而爲宇、不亦可乎

と仰出された御言葉は我が日本の大理想を道破せられた千古不磨の大宣言である。我等國民は如何なる難局に遭ひ、如何なる試練に

苦しむとも、この大理想の實現に努力しなくてはならない。皇祖の御神勅のまに、まに世界無比なる國體を擁護して皇運を無窮に發展せしめ、國際正義を蹂躪する者には敢然破邪の劍を振り、顯正の誠を示して、世界永遠の平和の達成に努め、我が固有の文化に東西兩洋の文化を採つて融合同化し、眞正なる世界文化を創造して人類の福祉を増進すべきは、我等國民の大使命である。現在日本の女性は參政の權なく兵役の務も有してゐない。しかしながら女性には自らなる女性の天分がある。家庭にあつて内助の功を積み、貞淑孝悌、男子をして後顧の憂なく、國事につくし業務に専念し得らるゝやうにし、子弟心身の教養に留意して健全なる國民をつくり、家計の運用に注意して間接に國家の財政を助け、以て奉公の誠を捧げる覺悟がなければならぬ。

終

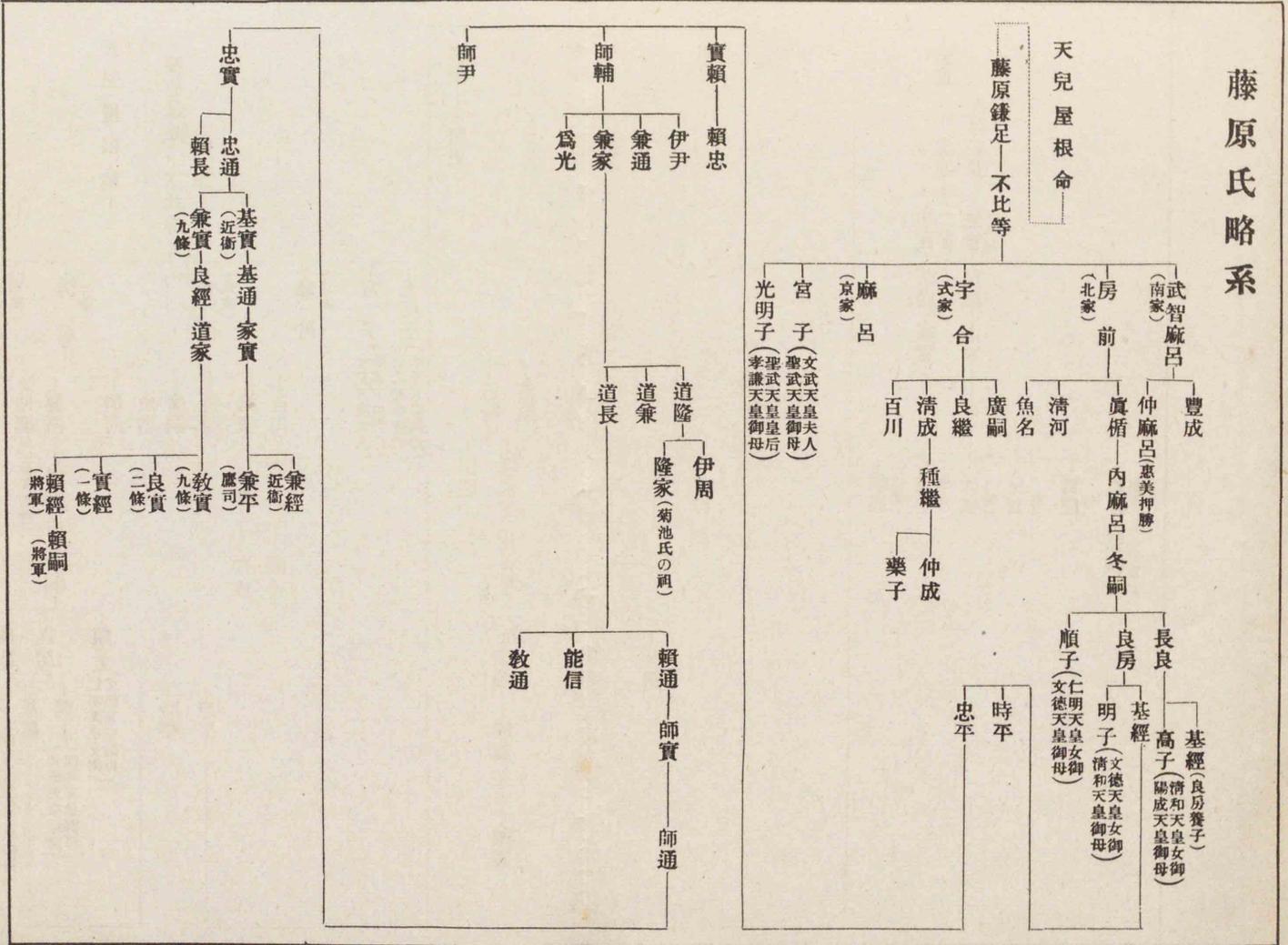
一 滿洲國皇帝御來朝
 二 海軍々備制限會議
 三 支那事變○イタリ一の防共協定
 四 滿洲國承認
 五 國家總動員法制定

(備考)
 政府欄は太政大臣と内閣總理大臣の姓である。
 次に姓名を示す。

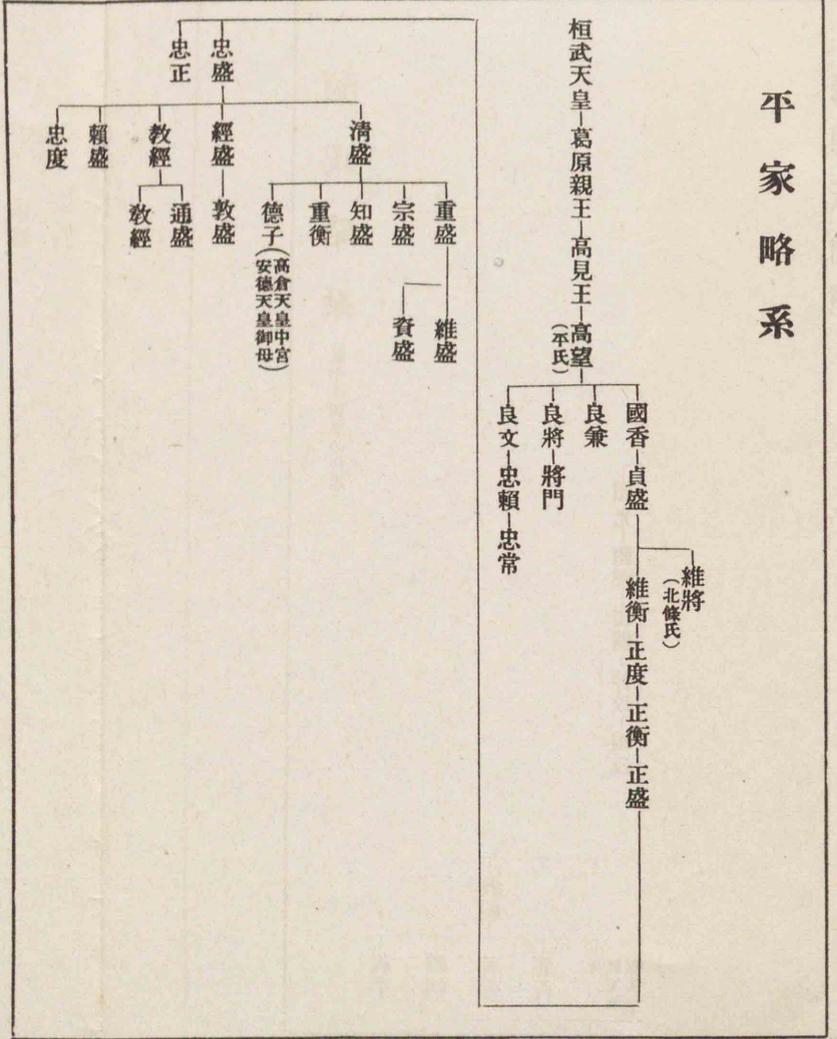
三條 三條實美	伊藤 伊藤博文	黒田 黒田清隆
山縣 山縣有朋	松方 松方正義	大隈 大隈重信
西園寺 西園寺公望	桂 桂太郎	山本 山本權兵衛
寺内 寺内正毅	原 原敬	清浦 清浦奎吾
高橋 高橋是清	加藤(友) 加藤友三郎	内田 内田康哉
加藤 加藤高明	若槻 若槻禮次郎	田中 田中義一
濱口 濱口雄幸	大養 大養毅	齋藤 齋藤實
岡田 岡田啓介	廣田 廣田弘毅	林 林銑十郎
近衛 近衛文麿		

廣田
 林・近衛

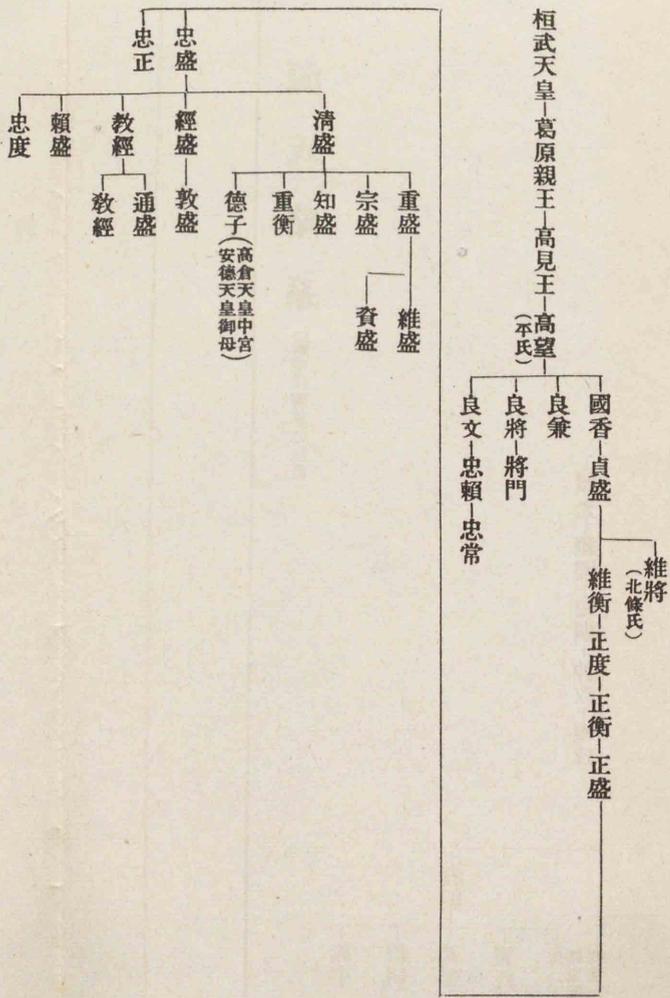
藤原氏略系



平家略系

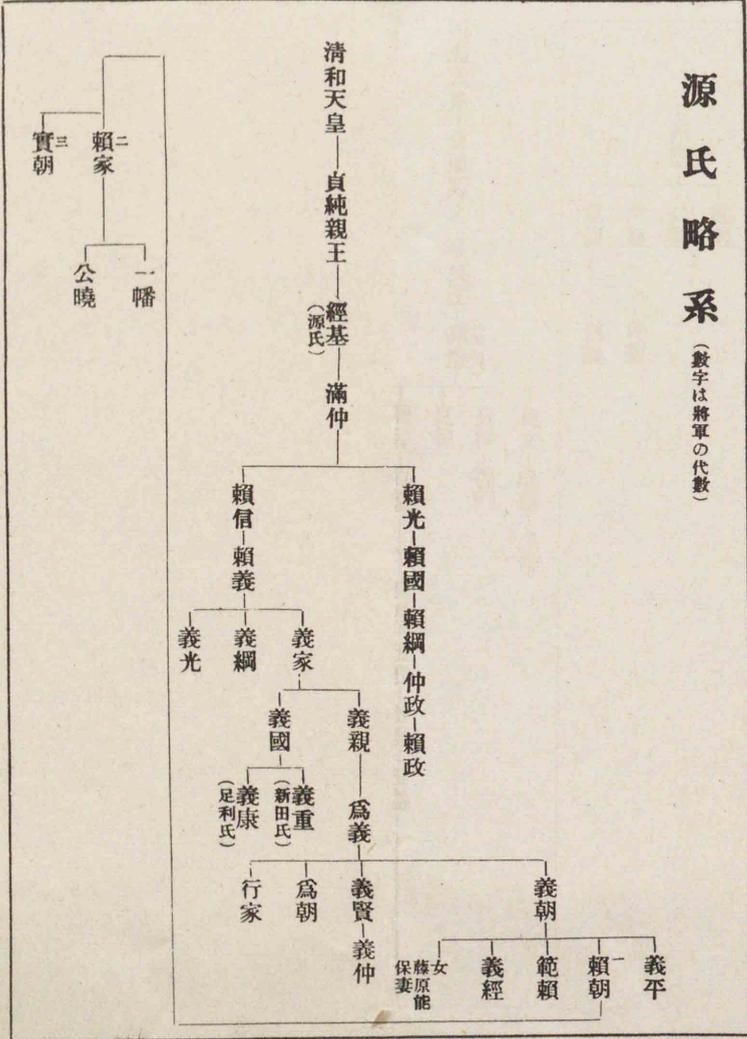


平家略系



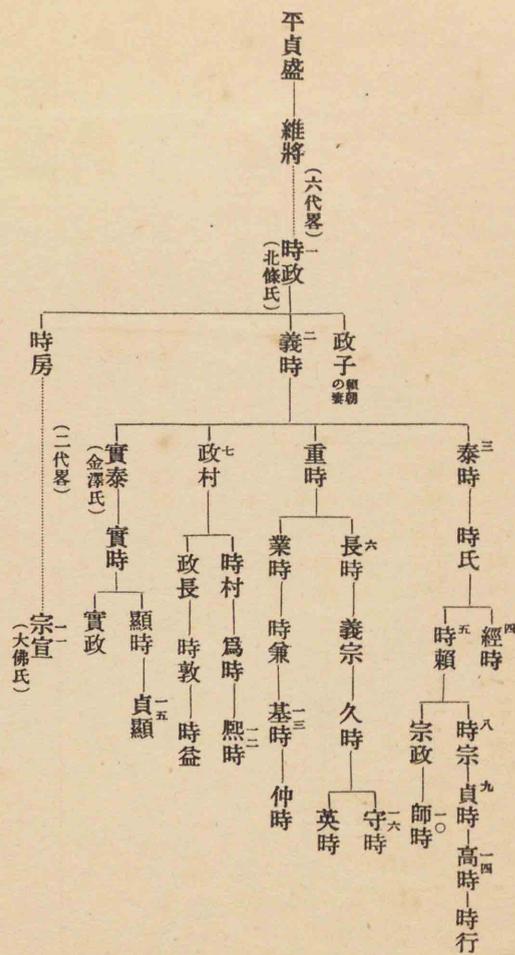
良實 (二條)
實經 (一條)
賴經 (賴嗣)
賴經 (將軍)

源氏略系 (數字は將軍の代數)



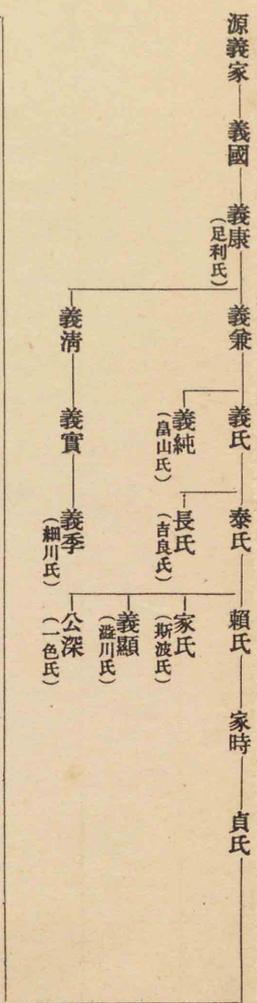
北條氏略系

(數字は執権の代數)



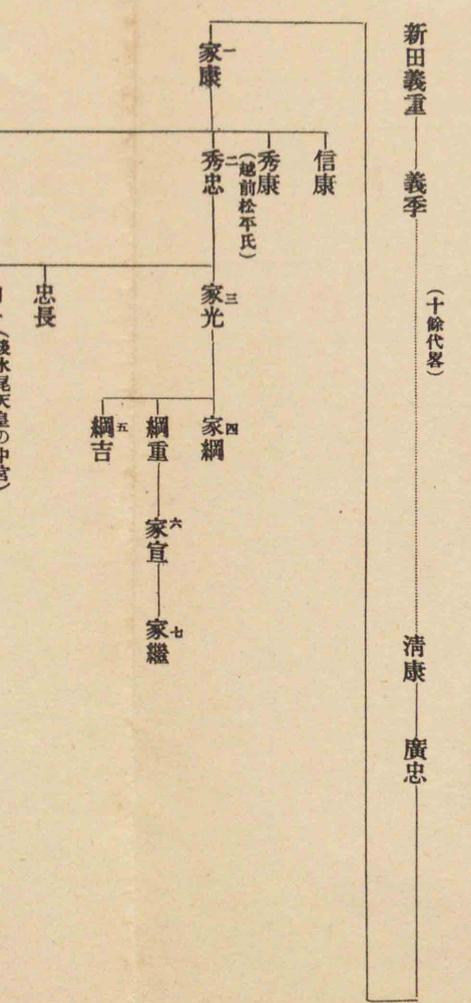
足利家略系

(數字は將軍の代數)



德川氏略系

(數字は將軍の代數)





昭和十四年一月十二日
昭和十三年十月十日
昭和十四年一月十日
修正發行
修正印刷
發行

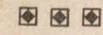
新體女子綜合國史
上級用



著者 栗田元次
發行者 中村時之助
印刷者 新井修平
印刷所 新堂

東京市牛込區辨天町百七十四番地
東京市京橋區木挽町三ノ十一番地

定價 金八錢



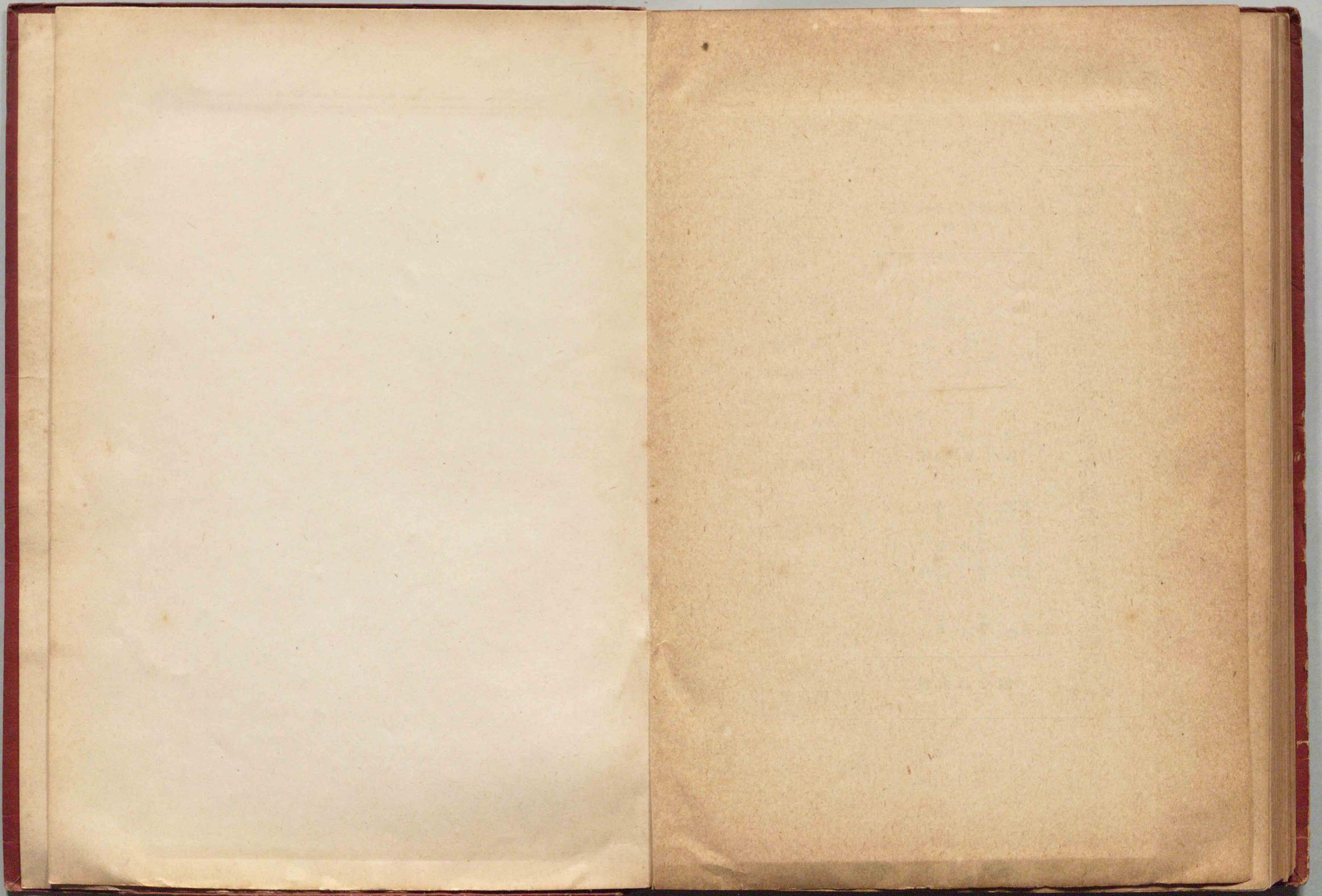
發行所

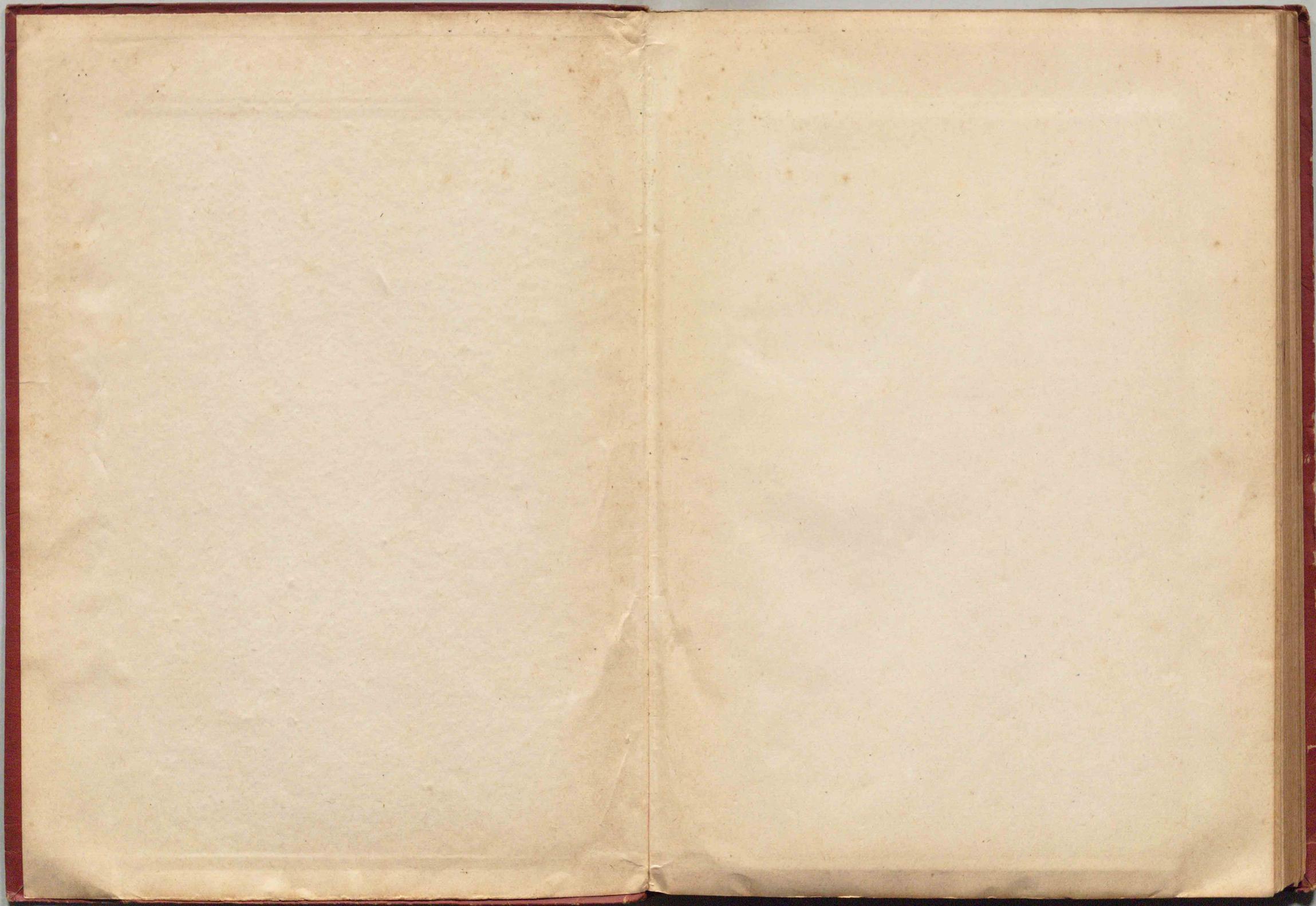
東京市牛込區辨天町百七十四番地

中文館書店

電話 牛込三三二五番
振替 東京三八四二七番









広島大学図書

2000087011

